

---

# 花散里の手帳～青潟大学附属シリーズ中学編

舞夜じょんぬ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花散里の手帳～青鴎大学附属シリーズ中学編

### 【Zコード】

Z6863E

### 【作者名】

舞夜じょんぬ

### 【あらすじ】

中学一年五月。美少女とは言いがたい容貌だが、小学時代は愛嬌と性格のよさでクラス男子を悩殺してきた奈良岡彰子。ひょんなきっかけからクラスの王子様、南雲くんから想いを告げられてしまう。幼なじみの男子ふたりもからみ、彰子争奪戦は激しさを増していく……。青鴎大学附属シリーズ第八作

誰も信じないかもしないけれど。と前置きして、「私もね、小学校の頃はもてもてだつたんだからね、ほら、すい君、そこで信じられないって顔、しないで」

彰子はぽんぽんと、水口くんの頭を軽く撫でながら続けた。

「どのクラスに入つてもそつだつたんだから。給食の時もちゃんと、私の分だけ多めに給食よそつてくれたりしたし、たまにはあげパンを半分もらつたりね。遊びに行く時も、男子ばかりのグループに私だけ入れてもらつたりしたんだから。いろんなところ連れてつてもらつたよ。山の中で昆虫集めに行くのも一緒だつたしね。すっごく得してたんだよ」

「それが今では、全然だよね。奈良岡のねーさん」

きょとんとした顔で、口を尖らせて言つのは水口くんだった。制服を着ているからまだ、青大附中の一年生だと分かるけれども、たぶん小学生の群れに放置したら気付かないだろう。きちんとマッシュマロカットに切りそろえているのは、親の趣味だろう。そりやそうだ。水口くんの家は個人病院だと聞いている。絵に描いたようなお坊ちゃんなのだ。

「そうなのよ、なんでだらうね。あ、でも給食の時はたまにプリンもらつたりしてるから、おあいこかな」

他の子だつたらむかつくりしげけれど、彰子からしたら水口くんを始めとする男子の言葉は軽く、ぽんぽん跳ね返して気持ちいい。一部の女子ならば、「なんてこと言つて、ガキのくせに！」とヒステリーを起こすかもしれない。そういう感覚が彰子にはないらしかつた。めんこいめんこいと、撫でてあげるしかない。

「それにさあ、男子がしてくれることつて、給食のことしかないのかなあ。ますますぼちやぼちやになっちゃうじやないか

「痛いといつきますね、すい君。女子にそんなこと言つたら、も

つと嫌われちゃうぞ」 いい表現だ。ぱちゅぱちゅ、か。まあ仕方ないかな、と思いつつもつとしそうなにに許せてしまつ。

「だつて、他の奴だつて言つてるじやないか。ビール瓶つて」

否定はしない。彰子はちるつとすい君のほそつこい、それでいておつむの肥えていそうな顔を見つめ、思いついた言葉を口にした。「私がビール瓶だつたら、すい君はドリンク剤の瓶だね。すつごく頭がいいくせに、こーんなにちつちやいんだもの。もつと、たくさん食べなくちゃ大きくなれないよ」

「ドリンク剤？」

「そつだよ。すい君なんて、難しい問題をたくさん解いて、今月だつてテストトップだつたでしょ。なのに、こーんなにちつちやいんだもの。将来体力がないと大変だよね。お医者さんになるんだつたらさ」

「奈良岡のねーさんみたいに、ぱちゅぱちゅでないと、医者になれないなんてことないだろ。医学部に行ければ」

天井を見上げて思い切り彰子は笑いこけた。めんこい奴だと、もう一度思つ。

「お医者さんはね、手術で何時間も立ちっぱなしだし、真夜中に患者さんの様態が急変したりしたらすぐ起きなくちゃいけないんだからね。患者さんがふにゃふにゃなのに、お医者さんがダウンしてたらまづいでしよう。まずは、体力だよ」

「そりや知つてるよ。うちの父さん、すつごく疲れてるもん」

「すい君だつて将来はお医者さんになりたいんでしよう。知つてるぞ」

なぜ、最近になつて水口くんが彰子にべつたりするようになつたのか、見当はつく。もともと人見知りする子ではあつたけれども、話し掛けると素直だし嘘がつけない性格だつたし、けつこうめんこい。彰子が保健委員になつた理由などを知るやいなや悔しがり、

「僕も保健委員になればよかつたあ

とすね始めた。

「だつて、保健委員で、そんなお医者さん関係の話してもうれるなんて、僕知らなかつたもの。僕、医学部行くつもりなのに、もつと、解剖とかいろいろ覚えたかつたんだ」

「すい君にはね、早いうちからお医者さん勉強するよりも、もつと遊びなよつて、どつかの神さまが導いてくれたんでしょう。ほらほら、私とくつついてると、ぱちやぱちや菌がつくつて言われるぞ」

彰子は向こう側で男子同士、カードゲームをしてくるグループを指差した。一年〇組の男子グループはおおまかに三チームに分かれている。だいぶ子どもっぽい遊びをしてくるのが水口くんのいる場所だった。

「はあい。じゃあね、ビール瓶ねーさん」

「ありがと、ドリンク瓶の君」

口にもたれかかつて、別のグループ男子一人が小さい声で何かを話している。手にはLPレコードの入つたビニール袋をぶら下げている。たぶん貸し借りしてくるのだろう。

「ねえねえ、何のレコードかなあ」

ふたりに聞こえないよつこささやきあつのは古川いづえちゃんだつた。一緒にいるのが清坂美里ちゃん。前髪をなんどか摘み上げながらきつぱり、答えていた。「立村くん、洋楽好きだからね」

「さつすが、よく観察してゐよね。相手の南雲の方はどうなの？」

「さあ、どうなんだろ。南雲くんもロックとかそういうの好きそうだもんね。でも」

「まあ、立村がそういう壊れたタイプの曲を好きだとは、私も思えないけどね。ねえねえ、羽飛はどうなんだろ羽飛は」

思わず彰子は耳をそばだてた。

「いづえ知つてゐでしょ。貴史はロココロンで面食いだから、鈴蘭優すずらんゆうのおつかけに専念よ。もちろんね、立村くんの影響で多少は洋楽とかそういうの聴いているみたいだけどね

鈴蘭優かあ。

ため息がこぼれる。残念ながら彰子とは似ても似つかぬかわい子ちゃんタイプのアイドルだ。

気付かれてしまったらしい。「すえちゃんが彰子の方に近寄ってきた。耳もとあたりでやわらかくそいだショートカットが似合っている。部活にも委員会にも所属していないのがもったいない。バレ一部に入つたらきっと、人気出ただろうに。」こつくり彰子は頷いた。「彰子ちゃん、やっぱさあ、羽飛はアイドル系でないと無理なんかあ」「

「すえちゃんはす」「。入学当初からずっと羽飛くんのことを好きだと公言してはばかりないとこだ。

「羽飛くんねえ、可愛い子が好きってタイプみたいね」

「そつなんだよなあ。鈴蘭優って感じだと、思いつきり髪が長くて、耳にお団子にできるような感じで、もつとくつくつとした耳をしてて」

「「すえちゃんだつて田は大きいじやない」

あまりいい慰めになつていないけれど、もともと「すえちゃんは男の子っぽい可愛さがあると思つ。きっと将来は、美人さんになるんじゃないだろうか。

「そつかなあ。でも、ギヨロ田だと言われるだけかも。あーあ

「すえちゃんが大づさに、ため息をつく。すぐに美里ちゃんに話しつけた。

「ま、いつか。美里。それよつさあ」

美里ちゃんがちらちらと口の男子ふたりを眺めては、軽くつむいでノートを開く。数学の問題集を開いて、ひらつと彰子の方に寄ってきた。

「彰子ちゃん、この問題なんだけど、空間図形の問題、じつじつうこう答えになるのかわからんの。教えて」「簡単な解き方の解説、写してきたから見る?」

「言つのもなんだが、彰子は数学がお得意なのだ。

「うん、ありがとう。こ、よね、彰子ちゃんは数学とか理科とか得意だもんね。私、どうしてもわかんないとこあるから困っちゃつ隣りで聞いていた」じゅえちゃんがまぜつかえす。

「なに言つてゐる、あんたのダーリンに比べたらまだまだ言いかけたところでほこんと叩かれていた。

「い、ずえ！ やめなさいよ！ なんもないんだからね、もう」

心なしか美里ちゃんは真つ赤だ。うつむいて問題を解いていた。

「ほおら、赤くなつてゐる。奴に気付かれたら、どうするつて」

美里ちゃんはどうして羽飛くんじゃないんだろう。

彰子は席後ろ側に陣取つてゐる羽飛くんを探した。後ろ側の席で花札を広げてはしゃいでいる。田鼻くつきりした、いかにも裏表ないよつて顔が気持ちいい。一年生の女子たちが騒ぐのも無理はない、と彰子は思う。ブレザーに最近は、飛行機のピンバッヂらしいものをつけてこる。校章でないことには明らかなので、よく先生に呼び出しをくらつているらしいが、その辺はお調子ものでつまく乗り切つているらしい。そういうじゅえちゃんから聞いた。髪の毛もだんだんつんつん立ててきていて、微妙に整髪料独特の艶がある。

羽飛くんは、面食いなんだもんね。

わかつてゐるけれど、やつぱりため息が出る。じゅえちゃんに気付かれないと、彰子はもう一度、唇だけで吐息をふきだした。

最近、水口くんが彰子になつき出したのにわけがあつた。

もちろん入学当時から、赤ちゃん赤ちゃんしていた水口くんに、「ほら一緒に遊んでもらいなよ」と、保母さんみたなことをしていつたけれど。でも、他の女子だつてみなしていたことだつた。彰子だけが目立つたわけではない。現在彰子が所属している一年D組は、裏でいろいろあるのにせよ、仲間はずれにしたりするような奴はいなかつた。

一年に上がつてから、クラスの道徳の時間で、「将来の夢」を発表させられた時、

「将来は医学部に行つて、お医者さんになりたいんです。だから保健委員になつたんです。今のうちから医学関係のこと勉強できるから」

と言い放ち、クラスを爆笑の渦に巻き込んだ。馬鹿にされたとは思わない。彰子も笑つたから。

次の瞬間、あの水口くんが手をひょいと挙げて発言したではないか。

「僕も、うちの病院を継ぐために、医学部に行きます！」と。

あの、

「見た目小学生」

「でも頭はいいけれど」

「頼むからいきなり泣きじやくつて物を投げるのはやめてくれ」の水口くんが、医者を目指しているなんて、想像する方が難しい。あきれかえつた爆笑と囁き声にもめげなかつた。その時に限つては水口くん、本気だつたらしくがんとして笑わなかつた。

「だったら、どうすればいいのかな、奈良岡」

担任の菱本先生がからかうように彰子へ声をかけた。

「やつぱり、解剖になれるため、お魚やお肉を捌く練習をしたほうがいいと思います。終わつたら料理して食べられるしね」

水口くんに、あえて笑顔で話し掛けた。なんとなくだけど、水口くんは彰子の言葉に釣られたから言い出したのではなく、どうしてもいつかは宣言したかつたんじやないか、そう思えてならなかつた。やつぱりそういうところが、「すい君」めんこいと思う次第だ。母に勧められた勉強方法だつた。クラスがさらなる爆笑状態に陥つたにも関わらず、水口くんはまったく笑わなかつた。ちょっと冗談がきつすぎたかも、とは思つたけれど、本当のことなのだから仕方ない。

たぶんそれまでは一度も、自分の夢を口にしたことになかつたのかもしれない。ばかにされるからがまんしなくちゃいけないと思つたのかもしれない。でも彰子が同じ夢を追いかけていると知つて、

「女子の中でも特別なお友だち」と水口くんは認識してくれたらしい。

「奈良岡のねーさん、ビール瓶のねーさん」

一番田の呼び名はちょっと、女子について失礼だと思わなくもない。

当然のことながら、彰子は水口くんにお返しの呼び名を贈呈した。「なあによ、ドリンク瓶の君」

頭の栄養は満点なのに、瓶は小さいし硬い。いつもひょろひょろしていて小柄だけど、学校の成績は非常によろしい。そんな水口くんにはぴったりだ。皿皿皿賛してしまつ。

「にやはは、と素直に喜んでいる水口くんと遊びながら、彰子は思う。

本当に、小学校の頃はこうこうの男子っぽかりだつたんだけどなあ。

私の『黄金時代』は、早いうち過ぎちゃつた。

ま、じつか。あとで父さん、中学の連中たちがどうしてるか聞いておこうっと。

家に帰つてから家で料理に専念した。毎度毎度「解剖學習」するわけにはいかないので、シチューの素にたっぷりさいころ牛肉を入れて煮込むだけにした。五月だからまだあつたかいものでも平気。父はそろそろ戻つてくる頃だし、母が遅くてもフリーザーに入れておけば大喜びで食べてくれる。確かに今日は病院の当直だと聞いていた。

「もう料理できたかな」

穏やかに、足を忍ばせて帰つて来たのが父だつた。めがねをかけている。細い。骨が浮き上がつてている。一時期彰子は、「父さんつてもしかして人体模型から生まれたんじゃないだろうか」と思ったことがある。どうして自分のような「ぱちやぱちや」系の子どもが生まれたのか謎だつた。たぶん母にまる」と似てしまつたのはわか

るが。

「父さん、ほらほら、食べないと体力もたないよ」

「彰子さんのお肉を少しほしいなあ」

全く男性は彰子の乙女心を逆なでするようなことを平氣でいう。でも、「ま、いつか」で流せるからそんな腹も立たない。仕方ない。「今日は父さん、学校で何かあったの？ 疲れてるね。ここ最近」「いや、なんでもないよ」

そういう言葉の力なさに、彰子は思つ。

絶対何かがあつたはずだ。

学区内の公立中学で社会科教師をしている父は毎日のように、疲れきつて帰つてくる。教師が父親というと、やたらめつたら規則に厳しいとか、勉強についてはうるさいとか、先入觀持つて見られることが多い。だが彰子からすれば、それぞほんとの「先入觀」だつた。家に帰れば「頼りないけどやさしいお父さん」のままだ。そりや多少は勉強のことも話をするけれども。

「ま、いいじゃない」とこっちで流せばそれですむ。

「ならまあ、お父さん、最近、そっちの学校の連中元氣なの？ 私も最近は、青大附中の方の友達としか遊べなくつて気になつてたんだけど。ほら、時也とか元氣なの？ あいつもあまりしゃべらなくなつたつて、この前和子ちゃんから聞いて気になつてたんだけど」

「ああ、時也か」

皿に盛つたシチューを口に運びながら、ほおつとつぶやく父。「どうしたんだろうね。クラスで何かあつたのかな。父さん、聞いてないの」

「いやな

「口」もるよつす。口こまだ食べ物が残つてゐるわけではなそつだ。

「この前、時也<sup>ときや</sup>のうちに家庭訪問に行つたんだけどな」

「うんうん」

「……彰子さん、今度、小学校時代のみんなと、飯盒炊爨やるうか

？」

飯盒炊爨といえど、青鴎河川口と呼ばれる河原で石を積み上げ、カレーライスや焼肉をこしらえて、食べて騒ごうつて奴だ。もう手を挙げて賛成したいところだけど、話が飛んでしまつと彰子も答えに困る。

そりやあまあ、いくら担任しているクラスの生徒が、彰子の友だちとはいえ、露骨に内容を話すわけにはいかないだろ？

「でも、時也がどうしたの？」

「うん、まあな。でも彰子さんの方達は他にもたくさんいるから、全部集めてはあつと騒ぐべ。母さんの非番の日でモナ」

「今週は厳しいんじやないの？ 母さん、研修会があると云つてたよ」

「それじゃ、彰子さんだけでもいいか」

父の言つ葉葉は取り留めなかつた。

「日曜は、今のところ予定ないよ。わかつた。じゃあ他の子に連絡取つておくれ。そうだ、時也のこと心配だつたら、私が連絡しておこつか？ お父さんだつたりやつぱり、先生だし。それに家庭訪問したばつかりでしょ。ちょっと、要注意人物つて思われているかもと、時也のことだから悩んでしまつかもよ」

何かを言おうとする父を押しつぶし、彰子は受話器を取つた。

「ああら、彰子ちゃん、お久しぶり」

名倉時也への電話番号は、ちゃんと一年一組連絡網の中にプリントされてる。電話口に張られてる。すでに黒くにじんでる。使用しまくつてるのは父だ。彰子ももちろん愛用させていただいている。

「ほんにちは。時也、こまですか」

時也のお母さんは、ときぱきなんでも片付けるタイプの人で、ほおつとしている時也がどうして生まれたのか謎な存在だ。親子遠足の時などもやうだ。何もしないで空を見つめている時也のそばで、

お母さんはあつという間に荷物を出したり片付けたりお菓子をくばつたりと、捌きが早かつた。「過保護」と陰口を叩かれないわけではなかつたけれども、いつもお母さんと行動しているわけではないのだから。からかう男子たちには彰子の方からきちんと、「あんまりやりすぎたら、今度のクリスマス会、私の手作りクッキー、あげないよ」と脅してあげることにしていた。結構、効果的な注意方法である。

「お父さんから聞いたの？」

「いいえ、今度、みんなと一緒に遊ぼうって企画立てたんで、時でもどうかなあつて思つたんです」

「まあ、彰子ちゃん、勉強忙しいんでしょう。青大附中つて大変なんですよ」

みなそつ言う。大変でないとは言わないけれど、そんなんみんなが騒ぐほど怖いところでもないのに。第一、彰子がいつも遅く帰るのは決して塾に行つているわけでも勉強しているわけでもなく、保健委員会の関係で残つてゐるくらいだ。保健室は勉強もできるし、おしゃべりの場もある。彰子にとつては庭だった。

「みんなに会えないからすつごく、淋しいです」

「これ以上突つ込まれるのは面倒だ。早く時也に代わつてほしかつた。一秒、空白が流れ、おそらくそれでお母さんも気付いたのだろう。

「ときや、彰子ちゃんから電話よ」

と、遠めに響く声がする。確か時也の部屋は一階のはずだった。受話器を取つたらしく、鼻息らしき雑音が聞こえる。でも答えない。全く、返事くらいしてほしいものだと思つても、この辺が時也らしいとも再認識する。

「もういるんでしょ、時也、元気?」

返事がない。ただ、脣がふるえた程度で、つづらうと空氣の揺れる音が聞こえる。あいつなりに答えてはいるのだろう。彰子は続けた。

「最近、元気ないって聞いてたからね、どうしたのかなって電話してみたんだ。ううん、父さんとは関係ないよ。私も最近、小学校の時の人など遊んでなかつたからね、せつかくだしみんなでどこか行こうかと思つたわけ。飯盒炊爨なんてどうかなあ。青潟河川口の河原で、カレー作つたりして遊ぶの。火を使うから大人を連れてかなくちゃなんないけど、うちの父さんだつたら大丈夫でしょ。大人を利用するのも手だよ。ほら、聞いてる？」

一気にまくし立ててみたけれど、返事はない。

聞き取れなかつたのかもしれない。時也は少々鈍いところがある。話を変えてみた。

「そうだ、時也、ちょっと気になつたんだけど。今クラスで、意地悪されてるとかそういうことはないの？ あんたおとなしいからね。ちょっと嫌なことされても、ずっと黙つてこと多いでしょ。言わなきやだめだよ。やられることあつたら絶対やだつて相変わらず吐息のみの返事だ。

「もしなんかあるんだつたら、相談に乗るからね。ま、私なんかだつたらあまり役立たないかもしねないけどね。でもさ、同じ学校じゃないから返つていろいろ話できるといひあるよ。あ、それとも、私の言い方、うつとおしかつた？」

男子によつては彰子のように話しかけられるのを嫌がる奴もいる。青大附中に来てから驚かされたことのひとつだ。あまり干渉されたくないということで、彰子を無視しようとする男子が多い。

「そんなことない」

やつと、一言だけ聞こえた。完全にひび割れた声だつた。男になつたねえ、とひとりごちる。

「ああ、よかつた。いやね、私も小学校の黄金時代からすつかり引きずり下ろされてる始末だからさ。たまには、気持ちよく讃めてほしこつてのもあつたのよね。ありがと。じゃあ、もつ少し私と父さんとで相談して、決まつたら連絡するね」

「奈良岡、おい」

電話を切ろうとした手が止まつた。時也が何か受話器の向こうで言つてゐる。聞き取りづらい。

「」の前、聞かれた

短いセンテンスで話すのが時也のくせだつた。

「青大附中のブレザー来た奴に、聞かれた」

「まるでスパイじゃない、何よ、何」

時也の声が、そばにいるらしくお母さんとの「」を眞にするよつて低く小さくなつた。

「奈良岡と、付き合つてゐる奴いるのかつて」

一点凝視。目の前の連絡網をひとりひとり追つていつた。

付き合つてゐる奴いるのかつて？

青大附中のブレザー来た奴について？

「わあ、嘘でしょ。時也、これつて説得力ない[冗談だよ」

「嘘じやねえ」

まぜつかえしたかつたのに、時也の答えは[冗談が混じらない様子。困つた。答えるにも、真面目に答えればいいのか、ギャグにすればいいのか、その判断が難しい。そばには父もいる。下手なことを言えない。

水口くんと一緒に、眞面目な声を出している時也には彰子も精一杯きちんと相槌を打たなくちゃ、と思つ。

「あのねえ、時也。噂にも聞いてると思うけど、私が青大附中でどう言われてるか知つてる？」『ビール瓶』よ、『ビール瓶』。見るからに私は不細工この上ない証明だよね。でさ、青大附中の男子つて言つたらなんだけど、面食いが多いんだわ。私なんて相手にしてもらつてないもんね。こうやって、今でも私に電話くれたりかけて話してくれるつてのは、時也、あんたを始めとしてうちの小学校時代の連中ばかりだよ。みいんな、いい奴ばっかりなんだもん。まあ、青大附中の男子がいやな奴とは思ったことないけど、でも、まかり間違つても私と付き合つてゐるかどうかで気をもむ奴、いないと思うなあ

「こるんだからしょうがないだろ」

時也の答えは相変わらずぶっきらぼうだった。

「ま、いつか。ごめんごめん。教えてくれてありがとう。時也、その男子ってどんな奴だった？ 知り合い？」

「知らない奴。さぞっぽい顔した奴」

羽飛くんじゃないか。

ちらりと浮かぶ、羽飛くんの顔。どうもさぞとは程遠い。やんちゃな表情だ。

「どういづシユチュエーションなわけ。例えば、学校帰りにゲームセンターで呼び止められて」

「耳鼻科」

単語で答える時也に、彰子はどんどんつなげていった。

「耳鼻科って、病院のこと？ 待合室で？」

「そう」

「そこで、青大附中のブレザー来た男子に声をかけられたの」

「そう」

「こきなり、私の相手がいるかどうかを聞かれたの」

「うん」

わかりやすい。時也と会話するのは慣れると簡単だ。

「どうしてうちの父さんは悩むんだろうなあ。絶対、変よ。

「たまたま、隣りの席に座つていたとか」

「向こうから寄つてきた」

なるほど、でもわかる。時也の通つている中学の制服は、ふつうの学生服なのだけど、カフスと学ランの裾に白線が太く入つていて。

バッヂを確認しなくともすぐにわかるという、目立つ制服だった。

「ふうん、じゃあ私の出身小学校がどこかって、ことがわかつてる人だよね。うちのクラスの男子かなあ。それで、なんて聞いてきた

の」

「一秒くらい、間があった。

「時也、電話長いわよ」

声が聞こえる。お母さんだ。

「『奈良岡さんご、付き合っている奴いるんですか』だけ  
いきなり電話が切れた。たぶん、お母さんに怒られたのだろう。  
これは、私の方からあやまつておいたほうにかもしない  
な。

もつ一度掛けなおした。

お母さんが出た。何度も呼び出すのは申しわけないので、彰子は  
大急ぎ、お詫びと説明を伝言することにした。

「『めんなさい、奈良岡です。さつき時にも話したんですけど、  
私の、たぶん同じクラスの男子だと思つんですけど、時にも変なこ  
と言つて、迷惑かけたみたいなんです。『めんなさい』。だから、時  
にこぼれでもらえませんか？ みんなでまた面白いことして遊ぼう  
つて。うちの父さん連れて、今度どこかみんなで行こうって。本当に  
に、本当に、いやな思いさせちゃって、『めんなさい』って」

「まあ、そうだったの。『めんなね。彰子ちゃん』じゃ、うちの時にも  
氣を遣つてくれて。わかったわ。伝えておくからね。お父さんによ  
ろしくね」

お母さんは怒つてない様子だ。よかつたよかつた。父が担任だつ  
たというのが、かなりのプラス材料だつたのだろう。テーブルに向  
かつて不安そうに見つめている父にペースサインを送り、受話器を  
置いた。

洗い物は彰子がする時もあれば、父がやつてくれる時もある。

なんだか頭を冷やしたかつたらしく、今日は父が全部、食器洗い  
機に詰め込んでくれた。「父さん、無理しないでよ。まだまだ私が  
お金稼ぐのは時間かかりそうなんだからね。この細い腕が折れちゃ  
つたら大変なんだから」

力弱く笑う父に、それ以上追求できず、彰子は部屋を出た。

時也の様子は電話口でも伝わってくる。やはりいつもより落ち込んでいるのを感じる。もともとクラスではおとなしい子だったし、真面目ではあったけれども、お母さんに押しつぶされそうな感じで心配ではあった。父の担任クラスに入つたと聞いて、他の子たちの方からもいろいろ、男子たちとの軋轢を耳にしていた。あまり父のクラスは、明るい雰囲気ではないらしい。ただ、父は基本として、家でクラスの「こたごた」について話をしない。彰子に対しても、母に対しても、誰かが万引きして捕まつたことがあっても、黙つて出かけていき、静かに戻つてくる。気にはなつていたけれど、口には出さないようにしていた。

臨時家庭訪問するくらいのだから、そういう事態は切迫しているに違いない。

ただ、彰子には何が起こっているのかつかめない部分の方が多かつた。小学校時代一緒にいた男子たちは今でも、しおつかう電話がかかってくる。遊ぼうといわれることもあるし、誕生日にプレゼントといふことで、ガチャガチャのおもちゃがポストの中に入つていたりした。

少なくとも彰子の受ける印象では、連中が時也をいじめるいやな奴とは思えなかつた。

別の問題もある。

気になるのは青大附中の誰かが、時也に話しつけてきたという事実だった。

制服が田立つというだけで、たまたま彰子と同じ中学だったということで、わざわざ時也に近づいてきて、

「奈良岡さんに付き合つている相手がいるんですか」と尋ねてきたのはなぜなんだろう。時也の口調からすると、丁寧語を使つた相手らしい。

誰だろ?。羽飛くんではなさそつだ。

羽飛くんでないなら、まあ、誰でもいいか。

一気に気持ちが軽くなつた。

昔は私ももてたのよ、なんて言つたから、みんな本気にしちやつたのかもな。なんか、笑つちやう。

でも、時也には悪いこと、したな。関係ないのに。よおし、明日、うちのクラスの男子連中にきつちり釘をさしておこいつと。でもまた大受けするだらうなあ。また水口くんに「わあ、ビール瓶のねーさんの相手なんてだーれなんだろ?」とか言われて大笑いされるかも。ま、いつか。私も一緒に笑つちやうしね。

別にいいのだ。小学校の時みたいにお姫さま扱いされなくたつて。すい君みたに「ビール瓶」と呼ばれようが、「うるせーなあ」と嫌がられようが。基本はひとつ、いい奴ばっかりだと思えれば、それでいい。

脳天気だと思われようが、それこそ奈良岡彰子としてのモットーだつた。

だつて、私の周りにはいい人ばかり集まるんだもん。小学校の男子も女子も、青大附中の男子も女子も。みんな、いい奴ばかりだから。

階段を上がり、母の部屋をのぞく。当然、真っ暗だつた。電気をつけて「月刊メディカルイン」の包みを探した。母が毎月購読している医学雑誌だつた。すでに封を切つているが、まだ封筒の中に納まつてゐる。無断借用は母とのお約束だ。早速借りていふことにした。ピンクのカーテンに花模様の壁紙。真つ白い椅子と机。たぶんこゝを見た限り、母が眼科医であることを想像するのは難しいだろ? 本棚の医学書、「白内障」「失明」などなどの言葉を見出さなければ。

小さい頃から彰子は母と遊んでもらう時に、絵本代わりとして医学書をめくつて喜んでいたものだつた。図工の時間中に、「目の拡大図」を書いては大笑いされた。彰子も笑つた。充血した目のひび割れを線で描くのが面白かつたことを覚えている。

仕事柄、どうしても家にいることが少ない母。  
人はみな、

「淋しいでしょう」

「ただでさえ一人っ子なのに彰子ちゃんはけなげね」と同情する。でも、彰子は極端に淋しいと思ったことはなかつた。何かがあれば父がいたし、もつというなら母だつてすぐ駆けつけてくれるとわかっている。もし来てくれなかつたとしたら、それはどうしてもお医者さんとしての義務があるからであつて、彰子のことをないがしろにしてるわけではないとわかつてゐる。たぶん、家族は気持ち悪いくらい仲がいいと思つ。

「絵に描いたような幸せ」という言葉がある。

父は中学教師、母は眼科医。

医師令嬢、深層のお嬢様、門限厳禁、勝手な想像なんて、とんでもない。

三人揃えばひたすら、漫才ネタをかましあい、時には学校関係の問題について「学校現場」からの意見を求められたりもしてゐる。小学校時代の男女子女子、その他父の教え子たちはしおつちゅう遊びに来てくれるから、そんな誤解なんて一切しないのだけど、それ以外の人たちにはどんなに説明してもわかつてもらえない。残念だ。

父曰く、

「彰子さんは我が家のカウンセラーだなあ。なあ、彰子さん、教師つていうのも、いい仕事なんだぞ」

母曰く、

「あんたみたいな子が看護婦さんでいたら、すつじく助かるんだけど。ねえ、彰子、どうしても、医者でないとダメなの?」

小学校の頃までは、全く疑つたこともなかつたのに。

どうしてだらう。青大附中に入学してからだつた。彰子の周りがだんだん、違う視線の色に染まつていく。父も、母も、小学校の友だちも、みな今までと同じ仲良しなのに。男子たちも相変わらず彰

子に電話してきて父をやきもきさせているつていうの」。

とにかく、明日、「だあれ、私の友だちに『奈良岡のねーさんがめちゃくちやもてていた説』を確認した奴つて。もつ、やだなあ！」とかましてあげよつ、そう決めた。そして時也に「なあんだ、うちのクラスの男子だつたんだけどね、あんまり私が過去の栄光を自慢したから、からかいたかつたみたいなんだよ！」と明るく教えてあげよう。そうしたら、時也も笑ってくれるだろう。

彰子が、小学校時代の仲良し男子たちにしてあげられるのは、まづはこれだから。

ま、いつか。私は楽しいんだから。

いつものように本を無断借用し、彰子は部屋に戻つた。「月刊メディカルイン」には毎週、女医さんの有名な人にインタビューするコーナーが設けられている。

夢見るために読んではにこにこしてしまつ、お気に入りの連載だつた。

保健室に寄つてから教室に戻ると、水口くんが待ち構えていた。

「ねーさん、ねーさん、昨日さ、僕、解剖したんだよ」

「解剖つて、何々？ 蛙を捕まえたりなんかしたの？」

「いきなり問われた。以前理科の授業中に蛙の解剖が行われていたとは聞いていたけれども。

「ううん、にわとりなんだけどさあ」

よく話を聞いてみると、水口くんの家で七面鳥を手に入れたらしく丸ごと焼くのを手伝わされたとのことだ。よくアメリカのドラマで見かけるクリスマス料理用七面鳥。彰子の家では見たことがない。

「なにかドラマチックなことでもあつたの？ すい君

「うん、僕の誕生日だから、作ってくれたんだ。注文してもらつたんだ」

そばで聞きつけた羽飛くんがにやりと覗き込んだ。

「水口、お前、五月が誕生日なのかよ、まじで」

「そうだよ、ほんとだよ」

「おおい、立村。水口の方がお前よりも四ヶ月、年上だつてさ」

真ん中あたりの席でふたり話をしている立村くんが、振り返つて答えた。

「悪かつたな、どうせ俺は九月生まれさ」

一応五月生まれの彰子にとつては衝撃的事実ではあるけれども、まあ頭の出来からしたら当然かもしれないと思い直した。

「じゃあ、こんどから、『お兄ちゃん』って呼んであげようかな。すい君」

「僕、本当にお兄ちゃんなんだぞ。弟が一人もいるんだよ。双子だ

よ

男子の間では当然知られているらしいが彰子は初めて聞いた。たぶん女子連中も初耳の子が多いだろ。朝の自習課題プリントをい

じりながら、

「ううそでしょお」

と、つぶやく声がしきりに聞こえた。

「こんな和やかな連中の中にまさか悪意持つて  
「奈良岡さんに付き合つている奴いるのか」

とこう質問をかます奴はいないだろう。彰子は確信した。

人を簡単に信じやすいというのが彰子のよくないところだという人もいる。けど、疑うよりも信じた方が何倍も楽しいし、楽だと思う。仮に裏切られたって、その人がずうっと裏切ったままとは限らない。いつでもいい人になつて戻つてくるのを待てばいい。

どの辺でかまけてみよつかなあ。

水口くんのお兄ちゃん発言で盛り上がる男子集団を横目に、彰子は近くの女子たちとテレビアニメの感想を語り合つていた。「砂のマレイ2」の続きがどうだとか、新しい美少年キャラクターが登場したらしいとか。美里ちゃんとこずえちゃんが熱く盛り上がつてゐる。原作ファンだけに、年季が入つてゐる。

事件が起ると身体が砂として解けてしまい、一体化するという三人の男子中学生が主人公の、SF学園アニメだつた。話そのものは単純なのだけど、登場人物がかなり、ふたりの好みにぴたりと合つてしまつたらしい。キャラクター名を呼びながらやあきやあ騒いでいる。聞き流しているとふられた。

「ねえ、彰子ちゃんはあの中では誰が好き?」

「私はやつぱりマレイくんかなあ

「こずえちゃんもあつさりと頷く。

「だよねだよね、やつぱりマレイが一番何考へてるかわかるからいいよね。ほら美里、あんたくらいだよ。キーンが好きだつて言つてるの。あんな何考へてるかわからない、神経質なだけの奴のどこがいいのよ。顔はいいかもしけないけどさ!」

「いいじやない。私には私の好みがあるんだから

彰子にはわからない何か、共通する意味があるらしい。

「やにやしたまま」ずえちゃんが美里ちゃんを見下す。

「ふうん、そうだもんね。美里ってそういう趣味だもんね。男好み」「やにやに言い方しないでよー。なにさ、知らないうちに物壊して、大騒ぎして、それで怒られてるマレイよりもずっとこいじやない！キーンの方がずっと眞面目だし、見えないとこで一生懸命努力してるつてとこが、私好きなんだもん」

「そうつか。美里つてそなんだよねえ。実際のとこにも」

男子グループに目を向けてすぐに逸らした。どこかと辿つてみたら、羽飛くん、立村くんのふたりが窓辺でシャープをつき合わせながらしゃべつている。「ずえちゃんはどちらとも仲がいい。羽飛くんに対しても恋する乙女そのものの行動だけど、立村くんにはかなりの「下ネタ」をかましては相手を赤面させる」とに情熱を燃やしている。隣りの席の相手だからなおさら、らしさ。

「「」ずえいつたい何が言いたいのよー。きやあきやあ騒いで馬鹿丸出しで、センスない格好して歩いているタイプは合わないのー。」

「私も、いわゆるつちの弟みたいなタイプは、彼氏としておびじやないけどね。美里と違つて」

「「」ずえ！」

余裕たつぱりの「」ずえちゃんに對し、美里ちゃんの方は今にも泣き出しそうだ。頭を激しく振りながら、口を一文字にして、ぱつと言葉をはじき出す。

クラスの評議委員一年目で、言いたいことはすばすば言つし、男子たちにもひけをとらない。それでいてあどけない瞳とおしゃれのセンスが抜群なとこ。ひそかに男子たちから人気があるつていうのもわかる。もてるだらつ。

ただ、女子たちは一部、

「なんか清坂さんつて自分のやりたい」とばかり自分で引っ張つていくつて感じで、ちょっとむかつく」

声も聞かれる。

やきもちだわい。羽飛くんとは小さい頃からの仲良しで、いつも「貴史、貴史」と呼び捨てにしている。入学式当時からそうだったことを、彰子は覚えていた。

羽飛、清坂の人気最強コンビが揃えば、そりやあ、やっかみも出てくるだろ。いわゆる「羽飛命」のじゅえちゃんが、そういう美里ちゃんと仲良しだというのが不思議だけど、でも女子同士の仲良しつていうのはそういうもんだろ。

「ほらほら、じゅえちゃん、この辺でやめておきなさいよ。私もマレイ派だけど、キーンも嫌いじゃないからね。表向きは何もできな振りしてるけれども、いざとこう時はきつちりと勝負をかけるところって、私も嫌いじゃないしね。美里ちゃん

あまりテレビアニメの登場人物に感情移入しないタイプの彰子である。

物語の登場人物だもの、そんなに本氣になつてビーッするの。

「だよね、彰子ちゃん、キーンいいよね」

美里ちゃんが手を握り締めて、何度も頷き返した。やつぱり、熱い。

女子たちの言い合いか落ち着いたところで、もう一度水口くんの

席に近寄った。どこの誰かに、わざと聞こえるように何気なく話しておくつもらひだつた。

「すい君、昨日ね、私が話したこと信じなかつたでしょ？」

「何？」

白漫話を連ねていたところに腰を折った形となり、ちよつとふくれでいる様子。

「ほり、私がね、昔すつじくもてもだつたつてことを話したでしょ」

「だつて、信じられないよ。だつて今、もててないのに」  
なんて単純。なんて素直。思いつきりなでなでしてあげたくなる。さすがに教室でそんなことすると、

「奈良岡のねーさんは男子の頭を撫でまわすのが趣味だと誤解される恐れがあるので、やめておく。

「しようがないよね。そうだよ。すい君は素直に信じているからま、いつかなんだけど。でもね」

この辺り、じっくり聞かせるように話をする。女子の声だけが響いているけれども、男子グループはおとなしい。羽飛くんは無関心、立村くんを相手にしゃべっているのが見えるだけ。

「昨日、私の友達に言われたんだ。『奈良岡さんに彼氏いるんですか』って質問されちゃつたって。青大附中の男子に聞かれたって。もう、思いつき笑っちゃつたよ。きっと私もてもて伝説が嘘だと思っているからなんだろうなあ。前から話していたことだし、まあいいんだけどね」

「うわあ、ほんとほんと」

身を乗り出してくる水口くん。もつと大きい声で続けた。

「そこで、誰かわかんないけど、ここでお答えします。私は確かにね、小学校の頃男子と仲良しだったんだけど、でも、『お付き合い』なんてとんでもないんだからねって。『安心してください。いつも彼氏募集集中ってどこかな』

「あ、でも変だよ。それ。もてもてだつたら、選り取りみどりだろ？」

話が混乱してしまつたらしい。一部の教室空間内で冷たく耳を澄ませている気配を感じた。反応しているらしい。

自信もつて彰子はほっぺたをやわらかくして笑つた。

「あのねえ、男子と仲がいってことイコール、『お付き合い』じゃないんだからね。すい君、バレンタインデーの時、女子からチヨコとかもらわなかつたの？」

「いっぱいもらつたよ。お菓子ほしごつていついたら、女子が机に置いてくれたんだ」

明らかに、いわゆる「バレンタインデー」の意味とは異なる。

思つに、水口くんはクラスの「マスコット」だつたのだろう。

紐をつけてぶら下げるやうに、そんな可愛さを持つ子だったのだろう。

さすがに中学入学後は、紐も切れそうな男子っぽさが強くなってきたけれども、性格はそれほど変わっていないよう見える。彰子の経験と、共通するものがある。

「そうそう、私もおんなじよ。私も小学校の時、誕生日、なんかわからんないけど机にたくさん、ガチャポンのケシゴムとか、蛇の置物とか、『ダイエット中の貴女にも大丈夫なチョコレート』とかたくさん置いてあつたもん。みんなよく見てるなあって思ったよ。今でも男子が誕生日にくれるものって、やたらと動物の模型おまけとかが多いんだよね。なんだ、すい君、私と一緒にじゃない。もてもてだつたんじゃない！」

ちょっとまずかった。水口くん、すねた。

「違うよ。ねーさんと違つて僕の方はずつと、愛されてたんだよ」

愛と「もてもて」の差の違い。

まあ、いつかってことだ。

「わかつたわかつた。すい君は本当に女子に人気があつたけど、私はただ、仲良しだつただけ。もう、これでどこの誰かに誤解されないですむかな？ 聞いてるかな？」 ぐるっと見渡してみると、やにやしながら数人、男子と女子がふたりを眺めている。中には羽飛くんもいた。立村くんが無表情で席についたまま朝日新聞のプリントに向かっている。「別に犯人探しする気はないから、これでこの話はおしまい！ 私もがんばって、彼氏募集しちゃおうかな。すい君、一緒にがんばろうね！ お医者さんになるのも、彼氏彼女作るのも！」

ぽんと背中を叩いて自分の席に戻った。力一杯たたくと、背骨が折れちゃうかもしれない。彰子からしたら、軽く撫でた程度だ。でも机にうつぶして、

「痛いよ、ねーさんに叩かれたよ」

と情けない声を出すのはやめてほしい。体格の差で、いじめたみ

たいに見えたらいやだ。

数学の時間中、いきなりの抜き打ちテストが行われた。たまつたもんじやない。みなぶつぶつ言いながら、席をあいうえお順に並び替えて座った。ふだんは一列ずつ、机をくつづけているのだけど試験の時はカணニング防止のために半分、離す。彰子の苗字は「ならおか」だから、窓際の真ん中あたりだった。後ろには古川こずえちゃんがいる。隣りは南雲秋世くん。残念ながら羽飛くんはそのふたつ後ろだった。どういう顔して問題を解いているか見たかったのに。

「は」行以降の女子がうらやましい。

「あのやあや、奈良岡さん」

「どうしたの、あきょくん」

「消しゴム、半分分けてほしいんだけどなあ、いいつすか」

襟を半分あけたまま、前髪は軽く膨らませる感じで今はやりの狼カットにしているところ。おしゃれだ。ちょっと髪の毛が赤茶けているのはドライヤーの熱だらけ。いや、染めているかもしれない。「はいな。半分といわす、一個余つてるから全部あげちゃおつ」テスト中に消しゴムがないといつのは辛い問題だ。金魚のプリントが入った、においつき消しゴムをプレゼントしてあげた。

「サンキュー、助かつたあ」

「女子っぽい消しゴムでごめんね。恥ずかしいかも」

「そんなこと」ざこませんって。数学完璧なねーさんのことですからお守りになるかもなあって、思つります」

顔に似合わず、めんこい性格した子だよね、あきょくん。

本名は「しゅうせい」と呼ぶのだが、彰子は入学当時から「あきょくん」と呼んでいた。あつかけは単なる読み間違いだったのだけど、南雲くん当人から、

「いいよ、俺、あきょくって呼ばれること多かつたし」

とあつさりOKしてくれた。呼びやすい方がよろしい、ところどころ周りの視線を気にせず、彰子は「あきょくん」と呼びつづけている。一年半近く。

だが、最近になつて気がついたのだけれど、そう呼んでいるのは彰子ひとりだけだつたらしい。

「あのさあ、奈良岡のねーさん」

「なあに、何でも貸し出しますよ。分けられるもんだつたらね」  
まだテストが配られる寸前に、手を伸ばしてつんつんと呼ぶ南雲くん。

「今度さ、うちに遊びに来ない？」

「それはそれは、いきなりどうしたの。あきよくん」

軽く流す。同じ学年では南雲くんファンの女子たちがかなり存在していて、現在その一人とお付き合つしているらしいことも知っている。そりやあもてるだろ？ 彰子のいう「もてもて」とは異なる。正真正銘の「好き」だ。アイドルグループ「パール・シティ」のボーカルにそつくりだということで、入学当時から人気爆発。そういう話題にうとい彰子ですらも、「ここには人気あるわ」と思つくれいなのだから、なおさらだな。

「うちの父さん母さんがさあ、最近うちに帰つてこないんだ。事務所にずっと泊つくりでさ。うちににはあちゃんと俺だけ。気兼ねないでお茶飲めるし、ねーさん、どうです、今度」「やだなあ、あきよくん。あんたがお誘いする女子は別でしょ。私みたいなおかちめん」がのこのこ行つたら大変だよ。あんたのファンに恨まれちゃうよ」

軽く流した。南雲くんに対してもすることだ。

まかりまちがつても彰子を誘いたいと思っているわけではないだろ？ 南雲くんの、女子に対する気遣いが実にこまやかかつてことを、彰子はよくわかつている。クラスであきらかに「もてない」系統の彰子にすらこういった誘いをかけるのだ。たぶん美里ちゃんやこずえちゃんタイプの「ちょっと可愛い」感じの子たちにも、いやいや自分の彼女にはもつと丁寧に接しているんだろう

顔に似合わず、気遣い上手なところが偉いよ。あきよくんは。だからみんなにモテるんだね。まあ、羽飛くんとはうまくこつてな

いみたいだけど、それもしょうがないか。

「俺、そんなにファンなんていないよ」

「ぱそつとつぶやく南雲くんの言葉が、妙に眞面目に聞こえて、彰

子は吹き出した。

「なあに言つてゐるの。この前だつて大変だつたんだよ。私との前図書館で話してたでしょ。すぐこの組の女子が近づいてきて『南雲くんと何話してたの何々』で、すつごく聞かれちゃつたんだから。別にさ、『清潔週間』のプリントつくりについての打ち合わせだけだつたのに、もうみんな、何考へてるんだろうね。私の顔見ればわかるでしょ、つて言つておいたよ」「ねーさん、何て答えたっすか」

「一年D組の王子をまと、愛嬌で生きる私と、どうつりあうつて言うのつて。大丈夫、ちやあんと、あんたのファンには納得していただいたからね。もうあきよくん。ちゃんと、自分の彼女を大切になさいよ。他の女子たちに申しわけないつていうのはわかるけれどもね」

さすがに、水口くんとは違つて簡単に背中を叩けない。

「うん、わかった」

風船の空気が抜けたような声で、南雲くんはつぶやいていた。聞こえたのはここまでで、さらに何か口にしていたのかもしれないが、彰子はあつたらと無視していた。

さつさと解き終えて、窓の外を眺めていた。連休から一週間、感覚がだいぶ一年の教室になじんできた。視線が真向かいの校舎と窓にぶつかるのも、やたらとすずめが飛んでいるのも、小テストだしたいしたことはなかつた。でも他の連中はまだ時間がかかりそうな感じだつた。

みなが背中を丸めて、グレイのジャケットを羽織つたままつむいている。

向かい側に反射する光がまぶしい。避けるよつて頬杖をついた。

昨夜父と話した通り、飯盒炊爨でもいいかと思つ。ただどうも時  
也の電話口調がひつかかっていた。

もともとしゃべらない子だ。彰子はそんなに時也がだんまりだと  
は思わないけれど、男子たちからするとかなり、問題があるらしい。  
お母さんがひるさくて大変だというのが共通見解だ。

時也は過保護だもんね。

女子たちが陰口を叩いていたのも知っている。

修学旅行の夜にさ、時也のお母さんが電話してきたんだよ。  
心配だから声を聞かせてつて。

ふつうしないよね。やだなあ。それでさ、帰りも一日散に走  
つてきて、べたべた触つたり服直したりして、手をつないで連れて  
帰っちゃつたんだよ。わあ気持ち悪い。

でもまあ、他の男子たちが面倒を見ていてやつたようだし、中学  
に入つてからも担任の父がそれなりに気遣いしていらっしゃるので、  
いじめられてはいないようだつた。

もともと父の担当しているクラスは一年から三年までの持ち上がりだと決まっている。違う小学校の生徒が三校分、入学してくると  
いうことで、顔がわからない子もかなりいると聞く。その中の何人  
かは家に遊びに来てくれた。遠足写真などで彰子も顔と名前を把握  
している。でも、小学校時代の友だち以外とはそれほど、付き合い  
があるわけではない。

小学校時代の、友だちかあ。

そういえば。

そつか、ナッキーに聞いてみるかな。

夏木宗の顔が浮かんだ。

小学校五、六年の時に同じクラスだった。近所でよくサバイバル  
ゲームごっこをした仲である。

彰子の誕生日およびホワイトデーには、かなりずピンク怪獣のビ  
ニールフィギュアをプレゼントしてくれた奴だ。

この前も玄関ポストに、きらきら光る七色怪獣カード入りの封筒

が入っていた。切手はなし。ちゃんと「夏木 宗」と記されている。即、感謝感激の電話を入れたら、

「名刺代わりにしろよな」

とけらけら、笑っていた。いい奴だ。

ナツキーだったら、たぶん時也がどうこう状態なかもつとわかるはずだよ。父さんもナツキーのことは気に入ってるみたいだしね。ただ、父さんには知られなによつに聞きたいんだけど。ま、いつか。ナツキーならその辺は、お見通しだよね。

ひとりで頷き、もう一度彰子は隣りの男子列をざざつと見た。

隣りの南雲くんは、彰子のあげた消しゴムを握り締めながら、『こりごり』とシャープペンシルを握り締めている。たまにシャープのお尻についている消しゴムをひっくり返し、ちやつちやと使う。

せっかく消しゴム渡したんだから、使えるばいいのにね。

親指の間にちりちり見える赤い色は、絶対に彰子の金魚消しゴムだ。

横目でさらりと後ろを見る。羽飛くんが鼻をシャープの先でつつきながら、真面目な顔してうつむいている。近くだつたら教えてあげられるのにな。心でつぶやいた。

羽飛くんは面食いなんだもんなあ。鈴蘭優だもんね。およびじゃないか。ま、しうがないかな。

自分がお世辞にも「見られるタイプの顔」を持つていないことによくわかっている。小さい頃から、「ブス」「デブ」の二大悪口を言われても仕方ないとは思つていた。自分が一番自覚している。でも、なぜか小学校時代はそのことで揶揄されたことはない。どうしてかわからない。今だにナツキーや時也を始め、他の男子たちが彰子に電話してきたり、プレゼントしてくれたりする理由がわからない。

お母さんにも言われてたもんなあ、私は愛嬌で世の中渡つて

いけるタイプの人間だつて。小学校の頃まではそつだつて思つたけど、やつぱり青大附中は違うんだよね。　せめて美里ちゃんやこずえちゃんのようになつて、すつきりした格好してて可愛かつたら、きっと違つていただろう。今だつて男子たちとは仲がいいと思うけれども、小学校黄金時代とは違う。

なにせビール瓶のねーさんなんだから。

いわゆる「もてもて」の対象外だといつことはよくわかつてゐる。別にそれでもいい、いいのだが。

羽飛くんは美里ちゃんみたいな子が好きなんだもんなん。まあ、いつか、おしゃべりをせてもらえるだけ、まだましかな。

六時間目の授業が終り、保健室に寄つて石鹼のチェックを行つた後、彰子は職員室の前にある赤電話の受話器を取つた。手帳にはかつての男子友達、一同の連絡先が記入されてゐる。夏木宗の番号を探す。

「もしもし、ナツキー、奈良岡ですよー！」

「わっ！　花散里の君」

大げさに驚いてゐる。不意を突かれて彰子も絶句だつた。  
「何その、花散るなんとかつて」

「お前のこと、なら先生がそう呼んでるんだぜ。もつつかのクラスで彰子のこと知らない奴いないんだぞ。名前は知らなくても『うちの花散里がさ』つていつも、余談しゃべつてるぜ」

父さん、あんたつて人は。

うちで教室の不毛について悩んでいるからいろいろ手伝つてやつたのに、自分の娘をネタにしているつてわけか。頭が痛い。

「うちの父さんが何しゃべつてたつていうのよ」

「お前がさ、青大附中で『ビール瓶のねーさん』つて呼ばれてるつてこと」

わああ、とんでもないことになつてるよ。もう私の輝けり時代は壊滅つてことだわ。やだなあ。

事実なのだから、彰子としては認めるしかない。

「帰つたら父さんに、ギャラもひつわ。出演料ね」

ぎやはせと笑つ受話器の向ひへ。受けてくれたらしい。彰子は続けた。

「それより、ナッキーにお願いがあるのです。私」

男子にお願いする時は、必ず敬語を使うのが彰子流だ。

「おひおひ、なんだよ。なんでも言つてみなー」

「じねんと受け止めしやるぜ、といわんばかり。

ナッキーにはしばらく会つてこない。父にめぢやくぢやなついていふことは知つてゐるけれど。新学期が始まつてから全然、遊んでない。

「どうだらひ、私より背、伸びたかな。ナッキーの奴。

「今度、そつちのクラスと一緒に飯盒炊爨やろひつて案が、某先生から出てるの。あなたの担任ね。面白やうだなとは、思つただけど、ナッキーは？」

「無理だぜそれは」

あつさり却下された。やはり、と彰子もせりに手繰つてみた。

「のりがよくないクラスだとは聞いてるけどね。やつぱり無理かな」

「女子、むかつく」

短い言葉に全てが集約されてゐる。

「女子がなんかしたの？」

「ありやあひでえよな。なら先生も怒るけど、全然効果なしだもん。ああ、だからさあぢうして彰子、こっちの中学校に来なかつたんだよ。お前だつたらあの汚ねえ女たちを黙らせることできただらうになあ」「あんた想像できる？ もし自分の親が担任になつちやつたら、こつちの方が大変よ。うつかり宿題も忘れられなによ」

あまりにもしょつもない話が続く。ひつぱるのはナッキーだ。家中だつたらこの調子で長電話し、両親に叱られるのが目に見えている。この調子だとナッキーもたぶん暇だらう。ナッキーの家は青大附中のすぐそばだ。彰子の家とは道路一本隔てた距離。

「お願ひします、もうひとつ…」

さらに敬語攻撃をかます彰子。

「ほいな、何でも來い」

受けけるナツキー、変わつてない。

「私を、青大附中の校門まで迎えに来てほしいのだ！」

声がない。くくくと、しばらく息を押し殺したような声が聞こえたかと思つと、一氣にはあはあと荒い息遣いが。

「やだ？ 田立つかり？」

「いや、違う」

ナツキーらしい答えた。

「ジージャンにバンダナだつたら、青大附中の前で田立つかなあ」  
ナツキーには派手にペインティングした自転車に乗つて「チャリトンコ暴走族」を氣取る趣味があつた。確かに、青大附中の校門で見られたら田立つだろう。いや、田立ちたいだろう。校門の前で、ナツキーのようどう見ても中学生に見えない奴が派手に決めて、先生には怒られないだろう。言われたら言い返してやる。私の友だちなんです。いい奴なんですよつて。

「ナツキーらしく決めてきてよね。もちろん、校門前で待つてゐるね

！」

受話器を置いて、すぐに玄関へ走つた。

途中菱本先生や、委員会活動に出かける同級生たちと顔を合わせたけれども、手を振つただけにとどめた。

とにかく、現在うちの父さんと、クラスの女子たちが何でうまくいつてないのかをナツキーから聞き出さなくちゃ。

あとあれよ、時也のことも、やつぱし男子だつたらもつとわかるだろうしね。

頼りはナツキー、君だけだつてことよ。

スニーカーに急いで履き替えると、玄関の柱にもたれている男子

の影を発見。ブレザーを羽織つたまま、気取つた風に髪の毛をかき上げている。

髪の毛が光に輝いている、一日で分かる野郎が一人。

一年D組の男子規律委員様だ。南雲くんだ。ネクタイを緩めて、襟のボタンを外している。さつさと学校から出て、堂々と校則違反の格好をしたいんだろう。「規律委員」という言葉がもつとも似合わない委員だろう。別の委員会にすればいいのにね、本人にたまに言つてあげたりもする。

「あきよくん、お先に！」

きつと彼女を待つているのだろう。いつもC組の女子と帰るのが習慣だと聞いている。南雲くんはちらつと彰子を見て、首の辺りで小さく手を振つてくれた。笑顔がないのが気になるけれど、彼女に待ちぼうけだつたらそりやあ、そうだろう。今日は規律委員会ないのだろうか。

生徒玄関を一步出たとたん、ちょっとだけ冷たい風としゃらりと擦れる木々のざわめき、最後に油の切らした自転車の悲鳴。ベルまで派手に鳴らしている。砂利道まで突つ込んでこよつとするきらめく自転車が視界に入った。

来たよ来た来た。ナツキーのご登場。

赤いバンダナにかりあげた頭、すい君と同じくらいの背丈だ。どんぐり眼。真つ黒な顔。アフリカ系の濃い顔立ち。どれを取つても青大附中にはいないタイプだつた。あえていえば羽飛くんが近い、といえば近いけれども、ナツキーよりもはるかに背が高い。声もかすかに太く聞こえる。

「お待たせしやした、花散里の君」

やつぱりナツキーはまだ、声変わりしていない。顔がふにやふにやになりそうだ。ナツキーの顔を見ると、いつもそつなる。

「二人乗りだけはかんべんだぜ」

「私も、貴重なナツキーの自転車、壊すのやだもんね。じゃあ、自転車置き場まで付き合つて」

金銀まだらに塗り分けた、ナツキーオリジナル。さすがにこうい  
う系統の自転車で通う奴は、青大附中で見たことない。

もう一度、柱で黙つて見ている南雲くんに振り返り、手を振った。

「あきょくん、じゃあね！」

返事がなかつたのはたぶん、ナツキーの格好に退いたからだろつ。規律委員様にはやはり、許し難い格好だつたのかもしれない。あとで呼び出し食らうかも。

ちょこつとだけ気になつたけれど、ま、いつかと切り替えた。

明日、噂かもしれないけど、ひとつくらい、浮いた噂あつてもいいよね。もともて族のあきょくんなら、見逃してくれるよね！

母が昨日の夜勤で疲れて寝ている。しつと人差し指を立てて、ナツキーに合図した。「やきん」と、大きく口を動かした。

「なら先生は？」

「まだないみたいだよ。応接間を使おうか」

父が戻ってくるのは六時近くだろう。ナツキーだつて、「大好き」な先生とはいえ放課後まで顔を合わせたくないだろう。彰子も制服のままでまずはお菓子を用意した。母の趣味で部屋の中は小花模様の嵐。男子たちには非常に評判が悪い。なぜか男の子好みの超合金口ボットや、時代遅れの怪獣モビールが転がっていた。もちろん自分が使うのではない。ナツキー、時を始め、しおりゅう遊びにくる男子たちのために提供するものである。お付き合いで彰子も組み立てやらいろいろな遊び方を教えてもらつたけれども、さすがに中学一年となつた今は使うこともない。母がこしらえた花柄のおもちゃ箱の中に投げ入れられていた。

「いやあしつかしさあ、すげえ怖い目つきした奴だつたぜ、あいつ」「あいつって誰？」

「ほら、玄関で彰子が声かけていた奴」

南雲くんのことだろう。納得だ。

「あの子は大丈夫。立場的に規律委員だからちょっとだけ明日注意されるかもしれないけどね」

「ああ、なんかあいつの顔むかつくぜ」

「顔が良すぎるから？」

からかつてみたくなつた。覗き込んでみた。ナツキーの浅黒い顔と唇がとんがつていた。「人間は顔じゃないよ、ナツキー。確かにあの子は『パール・シティー』のボーカルに似てると思うけど、やっぱり人間を顔で決めちゃあいけないよ」

「なんだよ彰子、やたらかばうよな」

笑ってくれない。落ち着かない。機嫌を取り結んでみる。彰子としては思いつきり笑いこけたいのにだ。

「だつてさ、私がそんなこといえる」面相だと想つへ。

答えないのは納得しているつてこと。ケーキを手づかみで口にほおりこんでいる。口の周りは白いクリームでひげ状態だ。口が利けないのをいいことに、彰子は話を続けた。

「それよりも、本田ナツキーに相談したことつてのはね」

自分のお菓子は、母の嚴命でようやせんべいのみ。ナツキーが

うらやましい。手でぱちんと一つに割つた。

「時也、もしかしてクラスでいじめられてるかなにかしてない？」

咽を詰まらせそうになり、咳き込むナツキー。素直だ、時也もそうだけど、ナツキーも考えていることが素直にわかる。こついうところが彰子は大好きだ。なんも考えないで、いいことばっかり話ができるから。

「つちの父さんも全然、そういうこと話さないよ。でもね、なんか時也に電話してみたら、なんか、ね」

言葉を濁して反応を待つ。グラスをかじるよつこへわえる。ナツキーが上田遣いに見つめてくる。

「そりに、いきなりの飯盒炊爨計画でしょ。つちの父さん、そういう得意じゃないからね。気になつてはいたの」

「そりやあ、切れるよな」

バンダナが少し額に下がつてきている。ぐこつと上げて、口を手首でぬぐつた。

「時也ももう少しちり紙を机の中に詰め込むのはやめひくなつて言いたい」

「ちり紙？」

「ほら、あいつ、鼻たれてるだろ。いつも。鼻水すすつてはちり紙でかんで、使い終わつたのを全部、ポケットや机に詰め込むんだ。捨てれ、つて俺も言つたりするんだけどなあ」

言いたいことはだいたいわかる。彰子も番茶の冷えたものを飲みながら答える。

「風邪引いてることが多いのかなあ」

「あいつ年がら年じゅう鼻たらしてるだろ。彰子も知ってるだろ」ひまあるとティッシュの使い捨てで机の中に山をこしらえていた、時也のことを思い出す。そうだ、面倒をみてやつていたのが、同じ「な」行の苗字を持っていたナッキーだつた。

「うーん、でも、時也の場合はしかたないよ。鼻が悪いんだって、時也のお母さんが話してたらしいもん」

耳鼻科にまだ通っているというのが証明だ。いつも鼻詰まりしないように、プッシュ型の小さな薬を鼻の穴に突っ込むように言われていたのも見たことがある。

「俺とか、まあ小学校で一緒だった奴だつたらまだその辺もわかるぜ。ただな、問題は他の学校の連中がそんなこと知らねえ状態だつてことだ。汚い以外、なあんも思わない奴らつてことだ」

だんだん彰子にも流れが見えてきた。ナッキーの方にレースのケースに入つたティッシュを押し出した。口の周りが真っ白だ。

「汚くないとは言わないけど、でも、時也だつて自分でしたくてしてるわけじゃないのになあ。また『鼻垂れ小僧』とか言ってからかわれるの?」

ぶんぶんと首を振るナッキー。口を拭かないで大急ぎで飲み込むだけ。

「いや、それはねえ。俺とか小学校からの持ち上がり連中が黙つちやいねえつてこと、わかつてるだろ。野郎連中については問題ねえ。ただな、女子だぜ問題は

「女子?」

「だから彰子、どうしてお前こっちに来なかつたんだよ」

いつも話はそこに行き着く。答えるのに困る質問はあつさつと食べ物でごまかすことにする。

「もう一個、ケーキをあげようか? それともなんか飴とかにする

？」

### 母からの厳命

「あなたは決して不細工じゃないけれど、でももう少し体重を減らさないと成人病の恐れがあるんだからね」「で、クリームのたっぷり入ったお菓子類は厳禁なのだ。未練たっぷりだけしかたない。ナツキーの血と肉になつていただこう。チョコレートケーキを冷蔵庫から取り出した。

時也が相当、クラスで追い詰められていたことはだいたいナツキーの話でよくわかつた。

確かに小学校の頃から、青い鼻をたらして「きたねー」とせんざん揶揄されていた。小学校中学年くらいまで、上手に鼻がかめなかつたというのも問題だつたのだろう。時也が「過保護野郎」と馬鹿にされていたのも、その辺に理由がある。ただ、男気たっぷりのナツキーを始め、一部の男子連中が時也のことを仲間に入れてやるようになつてから、だいぶ状況は変わつたようと思つ。「なつき」と「なぐら」「ふたりとも同じ」な行で始まる苗字だ。五年のクラス替えでたまたま近くの席になつて、今までの態度があまりにもあんまりだと憤つたナツキーが、時也のことを面倒みるようになつた。体格的には圧倒的にナツキーの方がちつちぢいけれども、誰も格下だなんて思いやしない。

五年、六年の時はそれでうまく乗り切つていた。中学に入つてから父のクラスに、ナツキーと時也が一緒になつたと聞いた時は、時也のためにもほつとしたものだった。今でも、ある程度プラスには働いているのだろう。しかし、誰もが小学時代と同じく、ナツキーに頭を下げるとは限らない。「時也をいじめるな」とか言つても、「はーい」と頷く連中ばかりではないだらう。父が懸命にかばつたとしても、素直に納得する連中でないことは彰子も想像がつく。

「と、いうわけで、はつきり言つちまうと、俺はクラス飯盒炊爨な

んかやつたつて意味ねえよつてこと

「女子もそうとうなの？」

「問題は女子だぜ。つたく、時也がたまたま通りでぶつかつたくら  
いで、『いやーん、きたなーい』なんて良く言えるよなあ。お前ら、  
鼻かんだことねえのかつて俺は言いたいぜ」

「こいだ。

彰子はじつくり聞こいと決めた。

「女子が、なの？」

「時也も黙つて引っ込んじまうから悪いんだ。もつと堂々と、ああ  
そうだ、なにが汚ねえんだつていえばもつとあの女どもも退くだろ  
うになあ」

「言えないよね、時也には。結局代わりにナツキーが？」

頭を搔いて、さつそく次のケーキに取り掛かる。白と茶色のクリ  
ームが口の周りにひつついて、微妙なマーブル模様を描いている。  
笑える。早くティッシュを使えばいいのに。彰子は言いたいけど黙  
つていた。

「けどさ、俺の言い方がいじめてこりよつて見えるとか、女子を馬  
鹿にしてるようと思われるとか、さんざんで、結局つるしにあうの  
は俺の方。なんだよ時也だつて好きで鼻たらしてるわけじやねえよ  
な。気にしてるから、いつもティッシュを丸めてポケットに隠して  
るんだよな」

「わかった。ナツキー。とりあえず、父さんに飯盒炊爨ツアーはや  
めとくよう言つとくわ。だつて、飯盒炊爨となつたらカレーとか焼  
肉とか現地でやるわけでしょ。時也が料理の手伝いするとなると、  
またみんなばい菌扱いするに決まってるよ。ナツキーだつていつも  
いつつも、時也のめんどうを見るわけいかないもんね」

五年生当時のナツキーは、人気も絶大ならば面倒見もいい、身体  
は小さいけれどけんかも強い。お調子ものに見えるけれど、人を差  
別する奴には容赦しない。時也を「渢垂れ小僧」だからという理由  
でいじめる奴には、男女問わず鉄拳制裁を加える。それが裏返つて、

「ナツキーは暴力的な奴」と思われているきらいもないわけではない。幸い、なら先生こと彰子の父は、ナツキーの小さい頃から現在にいたるまでみずみまで知っているから大丈夫なのだが。父や彰子にとつてナツキーが「非常にいい奴」なのに対し、女子たちの間では「夏木くんつて怖い。寄りたくない」という差が明らかに存在している。

そうだよね。ナツキーとしゃべることができる女子が少ないつていうのも問題なんだよね。

こうこう時、私も公立行けばよかつたって思うな。

でもでも、父さんが担任で、朝から晩まで気が抜けないっていうのも、辛いよナツキー。

ただ、時也にも問題がないとは言えないだろう。

彰子は医師である母から「病氣で身体が汚れたり、出でたりしたものは、汚いと決して口にしてはいけないよ。みんな、身体をよくしよう、なんとかしようとして、押さえたいのに出てきてしまうんだからね」と言っていた。よくなるためには、出でたくないものも出さなくてはならない。出したくないのに出でてしまつ患者さんが、一番辛いのだ。目やににしてもそうだ。血にしても。自分の感覚に必ずしもぴったり合つとは限らないけれど、気持ちだけは重ねていこう。医者を目指すと決めてから、自分に言い聞かせてきたことだった。

同じ思いをきっと、時也だってしているのだろう。

でも、もし彰子が母に言われてなかつたら、女子たちと同じことを感じていなかつたとは、限らない。汚い物は汚い、近くに寄るな、と口にしてしまつたかもしれない。反省してしまうけれどもしようがない。

どちらの立場も想像がつくから、いい方法が見つからない。

まずは、時也に、鼻をかみ終わつたティッシュを処分することを覚えてもらう方が先決かなあ。でもそれは、ナツキーがいつも

怒鳴り散らしてくるんだよね。ああ、もし私が耳鼻科のお医者さんだったら、時々に効果的な薬をあげるんだけどな。

「ね、そう思うよね」

思いつくまま彰子が話すのを、ナツキーはもぐもぐ口を動かしながら聞いていた。

「でもな、どうして時々、鼻が治らないんだろうなあ」

「もうだよね。うちの母さんが耳鼻科だつたらいいんだけど、目だつたらちょっとね」

正面で口を動かしつづけているナツキーの視線が、後ろでぱたつと止まつた。「く、と、ひとつ頭を動かした。目がまるく、凍つている。

「あ、おじやまします」

「ナツキー、お久しふりね。お菓子、ゼーんぶ食べてつていいからね！」

母だつた。田を覚ましたらしい。真つ赤なふりふりのワンピースに花のロサージをつけて、すっぴんのままで戸口に立つていた。  
「彰子、またメティカルな話題につきあわせてるの？」「ごめんねナツキー。うちのお姫様は色っぽい話にとんとんといのよね」

言葉を発したくとも口がもごもごしていて何もいえないかわいそうなナツキー。答えに困るだろ？ 田の前に「お姫様」がいるんだから。一番「お姫様」というイメージに合わない人がいるんだから。「お母さん、ナツキーが呼吸困難になると言つたのやめようよ。私に色っぽい話なんてあるわけないって、お母さんがよおぐ、わかつてるじやない」

自分で笑いがこらえきれず、彰子は椅子の手すりをたたきながら答えた。ナツキーよりも息が苦しくなりそうだ。よつやく飲み込んだらしく、ジュースをがぶ飲みし、ナツキーはあらためて頭を下げた。

「「」かうさまでした」

「ここによこいのよ。少しお姫様もスレンダーになつてもらわない

と困るからね。明日香ちゃんに持つて行つてもいいのよ」

ナツキーの妹だ。返事を待たずして母は台所に向かつてしまつた。たぶん包むんだろう。彰子も食べたいなあと思つていたケーキとかクッキーとかチョコレートとかを持つていかせるんだろう。医者の世界とは、上下関係が厳しいとかで、母の後輩からはしょっちゅうお菓子とかがお礼代わりに届くという。届くたびにため息ついているのだけども、分けてくれないのが淋しいものだ。まあ、ナツキーの方がこれからもつと、肥えないことだめだというのは彰子も納得しているから、あきらめる。

「どうしたんだよ彰子、お前も食べばいいのに」

「だから今言われた通り。もつと瘦せろつてばっかりよ。人のこといえるのか、つて言いたいよね。あのどふりふりの服を着るのだけ、ウエストがゴムだから楽だつて、それだけなんだから」

「彰子は着ないのか？」

「だつて似合わないもんね。それに私、あまり洋服とかそういうのに関心ないもん。将来は白衣を着るだけなんだから、それでいいかなつて」

しばらぐナツキーはチョコレートケーキをつつきまわしていたが、軽く腰を上げて伸び上がり、すぐに座りなおした。フォークを彰子向きに置いて、

「あと、全部食べ

押し出した。

「おなか一杯なの？」

「うん、とにかく、お前、食べよ」

背中越しに母の気配がないことを確認し、彰子は両手を合わせた。

「ナツキーありがと！ すつじくうれしいー！」

ナツキーの分をいただいたなんて母にばれたら怒られるのは必至。口をしつかりぬぐつて、皿を重ね、台所に持つていった。母はいかつた。ちゃんと包みこんだ花柄のケーキ箱が置いてあつたつくり。

部屋の中で寝て いるか勉強しているか、のどちらかだらう。

「ところでナッキー、前から私が思つてたことなんだけね」

花柄の箱に顔をしかめている。ナッキーの方をじつと見て彰子は

尋ねた。

「時也、ずうつと前から鼻の調子が悪いって聞いてたけど、病院つてどこに行つてたんだつたつけ」

「山乃耳鼻科つて聞いてた」

「そうか、山乃さんかあ」

青潟の場合、いい病院悪い病院の情報は結構リアルに伝わつてくれる。彰子の場合は、母が直接聞いてくるというのもあるけれども、医療ミスの問題などは、学校での噂話で流れてきている。大きい声ではいえないので、水口くんのお父さんが経営している病院でもいろいろあつたと聞いている。ただ、それが正しいかどうかはわからないし、真相にたどり着くにはもっといろいろな事情を聞かなくてはならないだろう。病院だつて、患者さんを殺したくて死なせたわけではないのだから。と、彰子はいつも思つて いる。

「耳鼻科つて関係あんのか

「うーん、難しいとこなんだけどね」

言つべきか言わないべきか。自分のポリシー「悪い人はいない」を貫くために迷つた。「あそここの病院、うちのお母さんだつたら勧めないって言つてるんだよね。ほら、目と耳と鼻の検診つてあるよね。それでこの前、ある人がひつかつて、病院に行かつて言われたんだ。うちの学校でなんだけど。たまたまうちのお母さんに聞いてみたら、私の友達だしつてことで、ある病院に紹介状を書いてくれたんだ。すつごくいい病院だからつて。そこ、山乃さんではなかつたような気、するんだけどなあ

「早い話、そこ、やぶつてことか

核心を突くナッキー。

答えられない。人を貶すような言い方にはしたくない。彰子は決して山乃耳鼻科なる病院を詳しく知つて いるわけではないし、單に

母の好き嫌いというだけかもしれない。ただ、あまりいい噂を聞いていないのも確かだつた。

「時也がずっと、山乃耳鼻科に通つてゐることで、全然よくならないのだつたら、私だつたらどうするかなつて思つたのよ。一度病院を替えてみて、違うところに行つた方がいいんではないかなつて」

「けじれあ、彰子。いつことど、俺たちから言えるのか？ 時也の母さん、すつげえ怖いじやねえかよ。よけいなこと言つなつて怒られるだけだぜ」

そりやそりである。でも彰子には勝算があつた。続けた。

「だからこいつのことは、いちのお母さんに言つてもらうのよ。お父さんだつたらまずいけれども、お母さんだつたら、まあ友だちつて感じで話できるでしょ。あの性格だし。あとは時也が自分で、鼻を直したいと思うかどうかだけね。時也が自分を何とかしたいと思つていろいろつてわかつたら、あのお母さんだつて駄目だとは言わないと思つよ」

「うわあ、彰子、やること思つてきつぱライバシーの侵害つて奴だよなあ」

「うん、そう。私も思つ。でもね」

たぶんナツキーだつたらわかつてくれる。だから、続けた。

「今のナツキーの話聞いていて、クラスの女子たちがいくらうぢの父さんやナツキーに怒られても、簡単には言つこと聞けないような気するんだ。時也がおとなしいけど眞面目で一生懸命な性格だつて、男子たちはわかつてゐるだらうじ、だからみんなでかばつてあげてるんだと思うんだけど。でも、女子からすると別のところで、ちょっとこいや、つて感じるんじやないかな」

「なんだよ、ちょっとこやつて。あいつら人のこと欺せる奴だ、立派な奴なのか」

怒氣がこもる。まあまあ、押さえてと手をかざす彰子。

「ナツキーは別だと思うし、だから私もこいつこと言えるんだよ。

ね。でも、やつぱり中学に入つて思つたのは、人間外見でみな判断されるんだなつてことなんだ。私が小学校の時に、あれだけみんなとつまくいつてちやほやされてたつてのは、私の顔とかがね、どうでもよかつたからなんだと思う。前にも話したと思うけど、青大附中ではもう私、ビール瓶のねーさんだもん。みんな私のことがきらいじやないから、そう言つてからかうつてのはわかるけど、でも最初はショックだつたなあ」

黙つている。もうほんどついていないフォークをなめている。笑えない雰囲気を作りたくないで、彰子はほつぺたをさらによわらかくしてみた。

「だから、私のできることとしては、クラスのみんなと仲良くして、いつも笑顔でいようつてことくらいだつたんだ。うちのお母さんにいつもいわれていた「あんたは愛嬌で生きていける」つて意味がよくわかつたよ。可愛い子とか美人さんとか、たくさんいるクラスだからなおさら、私がそつちで対抗しても勝ち目ないもん。特別に誰かと仲良くなりたいつてわけじやないけれど、みんなで楽しくおしゃべりできればそれで十分だつたからね。ナツキー、知らなかつたでしょ。私だつて青大附中で結構苦労してるんだよ」

どこまで父が「花散里の君」についての情報をクラスで流しているのかわからない。ナツキーが電話で口をすべらせたのを聞いて初めて知つた程度だ。たぶん彰子が父と母に、ずっと青大附中のクラスが外見重視で結構大変という話をしたことはばれていないと思う。

「だからよ。時也の性格がいいとは頭でわかつていても、女子としては、鼻をいつもすすつて、ポケットにティッシュを溜め込んで、つていうのが不潔に思えてならないんじやないかなあ。おとなしくて言い返さない子だからなおさら、悪口が飛び交つてしまふんじやないかなあ」

「けつ、最低な女たちだよな」

「だからまずは、時也が変わらないとどうしようもないつて気がする。別に性格をえろとかそういうことは言わないけど、できれば

ポケットにつつこんだティッシュは定期的に捨てるが、鼻水をたらしたままにしないとか。でもできないよね。直さないと。うちのお母さんも話してるけど、病院によつてよくなるならないが極端に違つて話してるからね

しばらぐほんやりとフォークをくわえ、舌をぺろんと出してナックキーは顔を上げた。

「病院の話は全然わからねえけど、彰子。時也がもつと女たちに文句言えぱいにってことだな」

「鼻垂れ小僧だなんていわせないようこ、まずは鼻を直そつよつていうのが私の提案なんだ。でもこればっかりは、大人の話だし、私が割り込むのもなんだしね。で、相談なんだけど」

ナックキーは身を乗り出した。

「おおや、言えよ」

「これから時也の家に行こいつよ。時也を呼び出して、ちやんとの計画を話して、自分からつちの母さんが紹介した病院に行くようこ説得するの。どんなにいい病院紹介したつて、時也がうんと言わなかつたらしょがないもんね。私はこれからお母さんに、時也の家に電話をかけてもらつて大人の話してもらつね」

なんだか腑に落ちない顔をしつつも、ナックキーは立ち上がった。

「ううそつさま。うまかったあー、じゃ、彰子行くぜ」

たぶん父から、時也を代表とするクラスの荒れた状況を耳にしてはいたのだろう。

「わかつた。どうせ時也くんのお母さんともお買物に行きたかったしね。何気聞いてみるから。でも、病院がどうのこうのつていうのは人のうちのことなんだから、あまりよけいなこと言わなによつにね」

超どふりふり服を買つのが好きな母は、なぜか時也のお母さんと好みがぴったりで、たまにショッピングに出かける。バーゲンの時は、忙しくて出かけられない母の代わりに取りおきなどもしてもら

つていろいろと。似合わないんだからいいかげん別の服にしろよと、彰子は思つけれどもしちゃうがない。人は好みなんだし、お気に入りの服を着ていたら「機嫌もいいんだから。

釘をさされたけれども関係ない。ナツキーの金銀迷彩自転車を追いかけるように、彰子は時也の家に向かつた。遠くない。一本通りを隔てた、一階建ての白い家だ。学生さんたちがたむらアパートの前だ。

「時也の部屋はどうだたつけ？」

「一階の、ほら、左側の窓だぜ」

直接玄関に向かつてもいいのだけれど、過保護で知られるお母さんに顔を合わせるのは抵抗がある。時也だけを呼びたかつた。

ふたりで声を合わせて叫んだ。

「ナツキー！ 出でおいで！」

トツキー！と時也がのそのそと玄関から顔を出したのは早かつた。

「ナツキーと、奈良岡……」

「昨日はこきなり電話してごめんな。ナツキーもいるから、ほら遊びよ」

見た目は柔道選手のようだし、四角い身体つきと頭。目はしつかりしている。鼻の下が赤く擦れているのは、ティッシュでこすりすぎたせいだろう。彰子は手招きして、向こう側の公園を指差した。シーソーが上下しているのが見える。アカシアの木々が擦れているのが聞こえる。

「ほら、彰子がお前のことすり心配してんだぜ。来いよ。いいかげんポケットの紙ぐず、捨てろよつたら」

ナツキーを手で制した。一番分かつてるのは、きっと時也だ。

「飯盒炊爨はやめようかなつて思うんだ。それよりね

まずは座る場所を探し、彰子はナツキー、時也をベンチに呼んだ。自分に向かいの子供用ぞうの置物に腰掛けた。

「ど、いつわけなんだ。時也」

黙つたまま、時也は鼻をすすつていた。青つぱなところの言葉があるけれどもまあこその通りだ。黄色い鼻水が遠めからも分かつた。袖口もてかつてこる。たぶん潔癖な女子だつたら絶対に嫌がるだろう。女子たちが「菌がつく」とおぞけたつのも、否定はできない。いくら父やナツキーがかばつたとしても、無理だつ。生理的嫌悪感といつのはゞいしょつもないものだから。

でも、いい子なんだよ。時也は。

一生懸命、最後まで残つて後片付けするのせこつも時也とナツキーなんだよ。

いいところを見てあげてほしいんだけどな。

ナツキーはやつぱり男子だ。どうしても甘い言葉が出てこない。

「だからお前ばかなんだよ！ 彦子の言い方は女子だからまだ甘いけどな、お前、自分が変わらないとゞいしょつもないつてことだぜ。わかつてんのかよ、時也」

きつい。言い返せないのはナツキーだからかもしれないし、本当のことだとわかつているからかもしれない。でも、と彦子は思つ。どんなに健康に悪いことだつてわかつてたつて、私もケーキやめられないもんなあ。時也だつて、自分の鼻水が不潔あつかいされているつて、ちつちゅこころから分かつていて、でもゞいしょつもないんだもんなあ。

「ナツキー、やめなよ。それよりもかつきの案なんだけどね」

ゆつくつと繰り返した。

「つちの母さん、時也のお母さん、いい病院を紹介するつて話してくれると思うんだ。たぶん、今通つているところよりもいいとこね。あんたの鼻がよくなれば、女子たちだつて不潔だなんて言わなくなるよ。もし鼻水が止まらなかつたとしても、みんなにはつくり『これは病気なんだから、治している最中だ、文句あるか！』と言つ返せるじやない。時也、女子の中にだつて、あんたのよさをわかつてくれる人が絶対いると思つもん。これほんとだよ」

しばらく黙っていた時也だが、やがてぼそつとつぶやいた。

「痛いこと、されるのか」

ナッキーと顔を見合せた。

「検査……の、ことなの？」

「おいお前、もしかして、それが怖いのかよ！　自分のことだろ！」  
止める間もなく、ナッキーの鉄拳制裁が入った。こういつ時のナッキーは容赦ない。うつむいて両手で後頭部を撫でているのは時也だ。スポーツ刈りのままだから、じゃりじゃりと音がある。

「こればっかりはね、私もわかんないけども、でも、今よりはずつとよくなると思うよ。まあ、うちのお母さんがどうこう話をするかわかんないけれど、とにかく私が言えるのは、時也。あなたはもつと他の人たちに受け入れられていい奴だつてことだよ」

下から見上げるようにして、時也が彰子の顔を覗き込む。

「ほら、青大附中つて優等生の集団だとみんな思つてるでしょう。私を除いたみんなエリートだつてね。入学するまではどんな奴だろうつて思つてたよ。でもね、入つてみて驚いたんだ。みんな成績つてできる子もいればひどい子もいる。変わらないんだつて思つたんだ」

ひとり思いつく相手がいた。時也と重なる一人のクラスメート。

「うちのクラスで評議委員やつている男の子がいるんだけど。ほら、学級委員と同じもの。その子はね、英語とか国語とかそういう文系科目が天才的にす」「くせに、数学がからつきしだめなんだ。いまだに九九の書いてある下敷きを持ち込んでいるくらいだし、複雑な掛け算の問題の時にはすごいことやつてるんだよ。真四角に細かく切つた消しゴムを筆箱に詰め込んで、摘み上げては数を重ねて、またひとつひとつ計算してるんだよ。テストの最中にだよ」

「……そいつ、ばかか」

かすかに聞こえる時也の声。時也も算数関係は得意だったのだ。

「もつとすごいのはね、やっぱりテスト中、空間図形の問題があつ

てね。たまたまその子の方を見たら、いきなり定規で消しゴムを切り刻んでいるのよどうやら問題に、空間図形の面積を求めるものがあって、それを解こうとしてたみたいなのよ。ずっと、消しゴムでその図形どおりに形を作つて、組み合わせたりなんなりしていたみたい」

前で腹を抱えて笑い転げるのがナッキーだ。

「ね、おかしいよね。ナッキー。もちろんその子は一生懸命やつていたんだと思うし、笑つちゃいけないって思うよ。でも不思議だよね。どうして青大附中に受かつたんだろうつてほんとに思つちゃつた。成績だけだつたらきっと、時也だつて受験してたら受かつたと思うし、公立だから頭が悪いなんてこと、絶対にないよ」

なんだかクラスの数学できないある生徒のことを悪口言つちゃつたような気がして、落ち着かない。聞かれていないとわかつていてもそうだ。言い訳を付け加えることにした。「めんねと手を合わせて。

「でも、今話した数学の出来ない子、評議委員やつているって話したでしょ。数学以外のことについてはものすげいんだ。私なんか全然わからないような、生の外人さんの言葉あるでしょ。べらべらつてしゃべってる。ほら、ヒアリングつていうあれ」

「はいはいはい、へるーんとか、じすいすあべんとか、そういうもんだろ」

「そうそうナッキー、分かってるじゃない」

たぶん時也もじつと見返しているところみると、分かるだろ。安心して彰子は微笑んだ。「全然聞き取れないような言葉を黙つて聞いて、すぐにノートに書き取つて、あつという間に日本語の訳つけてるのよ。びっくりしちやつた。人それぞれ個性があるんだなあつて感心したよ。だから時也、あんたをばかにする女子もたくさんいるかもしれないし、あんたが変わらなくちゃいけないとこもあるかもね。でも、ずっとずっと時也のやさしいことか、知つてる私たちだつてたくさんいるんだよ。それをもつと見せつけてやるうよ。

悪口言う女子たちにや。見返してやるわよ。」

そのために、と彰子は付け加えた。

「ちょっとくらい痛い検査だつていいじゃない。そうだ。もしあれだったら私と一緒にデートに、誘つてよ。病院に行く前にね」「デート？」

反応したのは時也ではなく、ナツキーだった。ぼけつと背を伸ばしている時也にくらべて前かがみだ。ギョロ目でちょっと怖い。あまりナツキーを相手にそういうことを言つたことなかつたから驚いたのだろう。

「私も、時也とは最近話、してなかつたしね。もちろんお父さんには話さないよ。私だつて花散里の君だなんてさんざんクラスでねたにされるのやだもん」

膝を叩いて笑い転げるはやめて欲しい。しばらくナツキーがえびぞりせんばかりに笑いこけているのを、彰子はため息交じりで眺めていた。時也もだんだん顔がにやけてきている様子。思い当たる節、あるのだろう。ゆっくり、ぱそつと。

「じゃあ、あのことは内緒か」

「あのことって？」

「奈良岡の付き合い相手のこと」

笑いこけるのは今度、彰子の方だった。ちゃんと処理済つてことを、本当は最初に時也へ話すつもりだったのだから。右、左と揺れながら、

「ああ、あれね、きっとみんな大いなる誤解してるんだよ。ちゃんとクラスのみんなには、そんな相手いないよつて言つておいたから、ごめんね時也」

立ち上がり、ぽんぽんと時也の肩を叩いた。唇の端でちょっと、揺れた笑みがやつぱりめんこい。ちょっとくらい鼻水たらしてたつて、言葉がぶつきらぼうだつたつて、ちゃんとこいつやつて彰子としやべつてくれる大切な友達だ。時也も、ナツキーも、みんな大好きだ。彰子はあらためて、手のひらに伝わる暖かさを確認した。つい

でにナツキーの片腕をひょいと持ち上げた。まだえびぞりしたままでいる。

「時也、いいか、今度そういう質問を受けたならばだ。覚えておけよ」

「なんだナツキー」

一本調子の武士っぽい言葉遣いが時也のお得意だ。

「とりあえず、彰子の相手は俺だつて、言つとけ」

彰子は両腕を持ち上げた。軽い。男子と思えない軽さ。

「もうやだなあ。ま、いつか。ナツキーがかまわないなら、名前貸してもらっちゃおうつかな。でもちゃんと彼女が出来たら、報告すること。誤解を招かないようにね！」

しばらく三人で、他の連中の噂や漫画の話で盛り上がった後、それぞれ三人分かれて帰った。母が持たせてくれたナツキー用のお土産は、結局三人で半分平らげてしまつたことを告白する。心で「明日香ちゃんごめん」と、手を合わせた彰子だった。

家に戻ると、母がにこやかに、丶サインで彰子を迎えた。話し合ひあつさり決着がついたらしい。

なんのことではない、要は時也のお母さんと一緒に洋服のセールに行く約束したかったんだろう。大人は大人が話をすると一番つまく行く。すでに母はテーブルに便箋を用意してすらすらと手紙を書いている。手馴れたものだ。小学校の頃からそつだつた。なにげなく世話好きな母は、ちょっと様子がおかしい子や親御さんがないと、「よかつたら私の友達の病院紹介しますよ」

と気軽に声を掛けていた。ずっと見てきたから、彰子もそれが当然のことだと思っていた。みんな楽しく、健康でいられたらしい。どんな人もみんないい人で幸せなんだと思いたい。「時也くんも前から病院替えたらしいのに、つて思つていたんだけど、なかなかね。我が家のお姫様のおかげで、またひとつ、うちの家族もいいことできただかな。でもね、彰子」

念を押された。わかつている。

「あんたが話を持ち出したなんて、絶対に言つちやダメよ。あんたはまだ愛嬌で世の中渡つていける子だから大丈夫だけど、世の中、人の善意を悪意だと思う人がたくさんいるからね」母の口癖だった。彰子は愛嬌が武器だと、いつも言われてきた。

次の日、彰子は一年D組の教室で南雲くんに手を振つた。

「あきょくん、おはよ。私の友達みて思いつせり退いてたでしょ」じりつと、笑みのない顔で見返した後、南雲くんはうつむき、つぶやいた。

「俺、別れたんだ、昨日」

「え？」

聞き返す間もなく逃げるよつこ、南雲くんは自分の席についた。教室はまだ揃つていない。ちょっとした声もすつきつと聞こえる。近くの席にいた立村くんに、はつきりと

「好きな子ができたんで、別れたんだ」

と、報告しているのもはつきりと耳に届いた。

「ああ、そつか。あきょくん、彼女と。

そりや、私になんか笑顔で手なんて振る余裕なんてないよ。

辛いこと、聞いちゃつたな。ごめんね。

みんなが楽しく、幸せていられるなんてこと、なかなかない。

教科書に五月の陽射しが黄色く落ちている。黒い文字で一次方程式の応用問題が綴られている。光のあたり加減により、黒のインクが鮮やかに見えたりもする。新しい教科書になつて二ヶ月、彰子のはまだきれいなままだつた。

緑色の黒板前で、時間が止まつていて。

いつものことだつた。立村くんがチョークを握り締めたまま、ぼんやりと黒板に端正な文字を眺めている。問題そのものはきちんと整つた字で書き記しているのだが、それ以降が進まない。めつたに立村くんが黒板に出て問題を解くなんてことはない。特に数学担任が狩野先生に代わつてからは、一度もなかつたはずだ。

確かに、立村くんだけひいきしているつて思はれてるかもしれないなあ。

でも、こうじつとこころを見ると、やはりかわいそうだと思つ。彰子は問題の中身をざざつと見直した。

当たりが悪い。よりによつて応用問題だ。せめて教科書の例題に、数字をちょこちょこ入れ替えた程度だつたら、立村くんが曲がりなりに形を作ることができただろう。運が悪い。周りの女子たちがひそひそとつぶやいている。

「やつぱりね、立村くん以下じゃないことは証明されたかな」「そこまで落ちたら悲惨だよ。よく青大附中に入れたよね」  
くくくと声を殺して笑う人々。男子たちはとくに、これぞ「いつものこと」と割り切つた視線。

「そりやああいつは数学ペケだからしうがないよな。ま、立村の場合は人呼んで『全自动翻訳機』だからな」

なんかな、なんで立村くんは男子に受けがいいのかなあ。妙なぐらいに。

翳つてゐる横顔を彰子は遠目から見た。席が離れてるので細か

くは見えないけれど、何かを考えて、何かしようとしているのだけはわかつたような気がする。何度もチョークを黒板に当てるようなしぐさをする。すべらせようとする。が、どうすればいいかわからぬようにまた外す。文字だけだつたら完璧に問題を解いた後に見えるのだけれども、先に進めないらしい。前髪だけが軽く浮き上がり、そのまま襟足にきちんと伸びているのが見て取れる。唇が薄い。何よりも血管が透けそうな顔。採血検査の時は苦労しそうだと、彰子はひそかに思っている。

立村くんが一年連続評議委員に選ばれた時、女子同士からはブーイングが起きたことを、よく覚えていた。むしろ彰子も、立村くんよりも羽飛くんの方がずっと押しも強いし、明るいし、完璧じやないかと心積もつていたのだが。男子全員の一括した意見に押し切られてしまった。むしろ羽飛くんの命令に逆らえなかつた男子たちの態度が謎だつた。何を考えているか分からず、無口だし、英語は得意かもしれないけれども、数字が混じつたとたん授業が漫才ねたになつてしまつ。評議委員が必ずしも成績優秀な必要はないかもしない。でも、人望は必要だと思つ。ひつぱつしていく力は必要だらう。彰子からすると、どうも立村くんにはそのどちらも欠けているような気がしてならない。

性格は、いい子なんだけどね。男子はなかなか自分からあやまるとかしないけれども、立村くんは男子女子関係なく、すぐに頭を下してくれるし、気持ち悪いくらい丁寧に接してくれるからね。ホテルのボーイさんみたいな感じかな。でも、本当に何を考えているのかが見えないから、こちらも一線引いておかないとまずそう。こちらが言いたいことをぽんぽん言つても、「ごめんなさい」の一言で逃げられそうな感じだしなあ。なんか、存在感が妙にないのに、どうして男子たちは立村くんを圧倒的に支持するんだらう。今度、ナックキーあたりに意見を聞いてみようかな。

「立村くん、ちょっといいかな」

三分くらい膠着状態が続いたのに痺れを切らしたのか、白衣姿でじっと見守っていたらしい狩野先生が教壇に上がった。この先生も彰子からすれば「何を考えているのかわからない」タイプだ。ひとりひとりに「さん」付けで呼ぶのは、生徒を「紳士淑女」として扱いたいからだとは聞いている。決して声を荒げることもなく、分からぬ問題は丁寧に黒板で説明してくれる。また、小テストなどもひとりひとり違う内容の問題を手渡してくれる。彰子の場合は数学が得意なので、高校生レベルの死ぬほど難しい問題を渡されて悲鳴をあげている。いい先生なのだろう。でも、今ひとつぴんとこなかつた。

もっと腹が立つた時ははつきりと言えばいいんだけどな。去年の石原先生なんてすごかつたなあ。今、立村くんがこうやつて立つていたら、まず出席簿で思いつきり叩いて、「これはな、基本として解き方がこうなつて、ほら、立村聞いてるのか。しつかと田ん玉開いて見てろよ。ほら、手を黒板に当てる、それで考えてみる」って体で教えていたのにね。ちょっと乱暴かもしれないけれど、わかつた時には思いつきり頭なでなでしてくれたし、拍手もしてくれたしなあ。今でも石原先生の所に質問しに行くと、「彰子えらいなあ。医者かあ。じゃあ俺も将来お前の世話になるかもしれないから、がんばつて教えなきやあなあ」って燃えてくれるんだけど。どうも、狩野先生って、問題そのものだけを教えてくれるだけで、それ以上の深みがないって感じ。あまり生徒と深くかかわりたくないって感じなんだよなあ。

狩野先生は粉で白くなつた指を立てた。手付かずの方程式を押さえるようにして、何かの言葉を発した。

「……」

英語とは違う発音だった。咽を鳴らすような、舌を巻いたような、響きの硬い言葉だった。

立村くんの目がくいつと上を向いた。横顔にはありありと戸惑いが見え隠れしている。唇がかすかに動き、自分で何かを言おうとし

てこるのだが、やはりこちらも聞き取れない。「……」

もう一度、ゆっくりと狩野先生は方程式をなぞりながら、立村くんに問い合わせた。

「ねえねえ何言つてるの、狩野先生」

「英語?」

いや、英語じやないだろ?。「ノッホ」だとか「イッヒ」だとか、数回聞き取れない言葉が混じつてこる。ドイツ語だろ?か?。なんとなくそういう思つたけれども、断言する自信はない。英語関係の能力が天下一品だとは、立村くんと同じクラスの人ならみなわかつていることだ。でも、ドイツ語まではわからない。

「……」

小さな声で、うつむいて何かをつぶやく立村くん。やはり「言葉」が「何か」としか、判断できない。

「ヤー、……」

語尾を上げて、次に狩野先生は黒板に問題の答えを綴り始めた。かなり小さい神経質そうな文字だった。

「……?」

プラスとマイナスを重ね、丁寧に同じ部分をなぞりつつ、出てくる言葉はやはり聞き取れないものだった。返す立村くんも、小さく頷きながら滑らかに答えてこる。内緒話をひそひそするような感じだった。

「おいおい、じじじでいきなり英語のヒアリングかよ。やつてくれるぜ立村ちゃん」

「てかさあ、なんか立村らしげっていうか、なんといつか」やはり男子たちの反応は好意的だった。一番の仲良しである羽飛くんがにやにやしながら黒板のふたりを眺めてこる。

繰り返された異国の一言葉のやりとり。十分くらい行きつ戻りつしながら、教室内がしゃべりの嵐に満たされた中、やつと立村くんは席に戻った。隣りの古川こずえちゃんが身を乗り出すように、「ねえねえ、立村、いったい何話してたのさ。なんか、内緒の相談

とかしてたんだ? 英語?」

「違うよ。ドイツ語だつて」

短く答えて、すぐにうつむいてノートを開いていた。

やつぱりそつか。でもどうしてだらう。確かに立村くん、一年に入つてからドイツ語の講習を受けているつて聞いたことあるけれど。ま、いつか。人それぞれ、得意なこと、苦手なことってあるもんね。

その後数学の授業は静かに終わった。居眠りの多い授業だつた。狩野先生の話す言葉があまりにも細々しているので、みなも騒がない代わりに自分のやりたいことを勝手にやらせてもらつてはいる、といつ感じだつた。授業が終わつてからは、時也とお約束の「耳鼻科ヘデート」の予定だつた。青大附中よりも授業は早く終わると言つていた。玄関での待ち合わせと、すでに公園で約束済みだつた。

公園で三人ケーキを食べまくつた後の展開は聞いていない。父にも「飯盒炊爨じやない方いんじやないの?」とは言えず、委員会関係の用事があるとこまかしてその件はお流れにした。特に残念そうな顔もしていなかつたといふみると、父なりにかなり無理をしていたのだろう。きっと。

直後の日曜に時也のお母さんと一緒に超ビューフリフリ服を買いあさつてきた母に言わせれば、

「すぐにお母さんと一緒に病院に行つたんだつて」

とのことだつた。紹介状であつて、診断書じゃないから医者としては気軽に書ける、というのが言い分だ。とにかく時也の場合は病気をきつちり治して、それからだらうと彰子は思つてはいる。外見の嫌悪感とか不潔感とかをなくしたら、もともと時也はいい子なのだからすぐにもともてになるだらう。怖いナックキーだつてついているのだから。寡黙だけれど、頼まれた仕事はきつちりこなすし、荷物を押し付けられた子を見ると、無言で半分以上持つてくれたりもする。

時也みたいな子はわかりやすいんだよなあ。むしろ、立村くんみたいなタイプって、どうもわからないなあ。男子たちはみんな立村くんを評議委員と/orしてあり認めているけれど、そのところも正直なところ、なぜ?って感じだもん。すれ違つても気づかなつていうのかな。

「どうしたつすか、奈良岡のねーさん」

後ろを振り返ると、南雲くんがにこにこしながら立つていた。腕には銀のアームバンドのようなものをつけていた。ブレザーを脱いでいるので、腕がふたつに区切られた感じ。少女めいた袖のラインに見えた。たぶん細いんだろう、うらやましい。

「ううん、別になんでもないよ。それより、あきよくんさあ下手なこと口にしたら立村くんへの悪口にならうので、言葉をくつづけるのが大変だつた。

「どうして、規律委員になんてなる?って、思つたの。何か似合つてないなあつて、いつも思うんだけど」

「そんな俺つていいかげんに見えるかなあ」

目を細めて南雲くんは頭を搔いた。銀色の光がちらりと光り目にに入る。彰子も目を細めた。

「いやそういうんじゃないよ。ただ、今日もこいつにこの銀色のわつかみたいなの付けてるし。きっとあきよくんは思いつきりおしゃれな格好で決めたいんだろうなあつて、想像はつくよ。規律委員の場合だと、厳しい規則がどうたらどうたらって言つのを決めるわけだから、本当にあきよくんのやりたい格好なんて、できないんじゃないかな。それならむしろ、評議委員とかその辺りに立候補したらよかつたのにね」

「このクラスで評議に立候補するつてことは、自殺行為ですつて、ねーさん」

思つた通り南雲くんはさうと答えた。

「立村に勝てるわけないもん。俺だつてそのくらいのことはわきまえてますつて」

「そうかなあ」

ふと表情が変わった。猫が獲物を見つけた時の輝きだらうか。身をかがめてきた。かすかに匂うのは柑橘系のコロンの匂い。こいつ、男子のくせに香水なんてつけてるんだ。あきれる以前に思わず笑ってしまった。

「俺が評議できる器だと、もしかして思つてくれてた?」

もちろん誰にも聞こえないように気を遣つてはいるようだ。立村くんおよび羽飛くんは、廊下に出ていて何かを話している。たぶん聞こえないだらう。

「うーん、難しいところだなあ。あきよくん。でも、あきよくんが評議委員に立候補したら、きっとクラス女子の半数は、賛成の手を挙げてくれたんじやないかと私は思つよ。立村くんとの決戦投票になつても大丈夫。ただ」

「まだましいことを言つたとは思わなかつた。」

「羽飛くんなどどうかな、ってここはあるけれども、あきよくんは人気者だからね。その辺大丈夫だと思うんだ。一年はこのままだろうけれども、もし三年になつて考えるところあつたら、チャレンジしてみたら?」

素直に口にしただけだつた。羽飛くんと南雲くんとだつたら、人気度からしてたぶんとんとんだらう。どちらも明るいし、考えていることがすかんとわかり、もつと言つならルックスも雰囲気も、女子好みだ。少なくとも立村くんのような、明治時代の書生さんの雰囲気よりは、ずっと受け入れられると思ひ。

「わあ、ねーさんに誉められたぜ。まじで。すげえうれしいよ」笑顔が満開になる寸前、突如唇がとがつた。なんか気に障ること口にしたのだろうか。言つてくれればいい。すぐにごめんなさいとあやまるから。

「俺は立村には勝てねえよ。羽飛には勝てるかもしねえけど」「なあに自信なさげなこと言つてゐるのよ。ほんと、実は自信あるくせして!」

はつと呟づいた。この前、ナツキーたちと会つた日の帰りがけ。

あきよくん、わあ、そうだよ。とんでもないこと言つちゃつ

た！

「けど、ま、これでエネルギーを注入されたつてことで、俺も明るく生きていきますつて！」

言い訳、『めんなさい、悪いこと言つかけやつた、口の中でも』『も』『言つているうちに、南雲くんは両手を組んで伸びをし、自分の席に戻つていつた。

そうだよ、あきよくん、彼女と別れたばつかりなんだよね。つい最近。まだ傷口ふさがつてないよね。この組の彼女とだよね。きっと慰めてほしかつたんだろうなあ。仲のいい女子に。でも私くらいいしか手が空いてなかつたからなあ。もっと、元気出してつて声掛けであげればよかつたよ。ああ、まだ私つて人の心を受け止めてなんていなあ。まあいつか。とにかく、今度はあきよくんに別のことで、気持ちよい話してあげようつと。

なんといつても彰子のモットーは、「私の周りにいる人はみんな、いい人ばっかりなんだもの！」である。今までそれを覆す出来事はひとつもなかつた。

特別何事が起つるわけでもなかつた。担任の菱本先生は五月の遠足について、やけにのりのりだつたし、いつものように同会を務める評議委員の立村くんはあいかわらず冷静にまとめていたし、二D女子一丸の意志「影のリーダー」たる羽飛くんは、

「じゃあ、やつぱりさあ、他のクラスと一緒に集団鬼ごっこやつづけ。ほら、手つなぎ鬼とかだつたら、結構燃えるだろ！」

と、いさむか楽しい案を出してくれた。ソフトボールとかドッヂボールとか、球技系でないとこがみそだ。彰子のよつた、走るとすぐ息切れしてしまつタイプの人間には非常にありがたい。鬼ごっこだったら、捕まればすぐに手をつないでついていけばいいだけのことだ。思いつきり拍手を送りたかつたのだけれども、やつぱり慎

重派の立村くんが言い出した。

「でも、手をつなぐのがいやだとか、走つたりするのがいやだとか、そういう人がいるかもしれません。どうでしょうか」

「氣を遣いすぎるよね、立村くんは。せっかくみんなで盛り上がりつて話をしているんだから、ここで話の腰を折らないであわせればいいのにな。一生懸命、つちのクラスのためにがんばつてくれるのには伝わつてくるから誰も言わないんだろうな。いい子だからなおさら、こんなずれているところが目立つてしまつて、損してるんじゃないかなつて、思う。」

「なあにまたよけいなこと心配してんのだ、立村。ほらほらあつさりと手を挙げて決を取れ。おーいみんな、遠足のゲームは手つなぎ鬼でいいか？」

羽飛くんが立ち上がり、ぱんざいしながら手をひらひらさせる。不意に目が合つた。照れることもなく、そらすこともなく、にやつと笑つたままだつた。

「賛成！」

「じずえちゃんの声と同時に男子女子次々に右手が挙がつた。中には数本、左手を挙げている人もいる。左利きの子だ。

すぐに教壇の高いところから指差し式で数えているのが美里ちゃんだつた。立村くんは数を数えたりするのが非常に苦手だから、こいつは野鳥を計算するように素早い美里ちゃんの本領發揮となる。しつかりしている。一年連続評議委員。呼吸はぴつたりだ。

「あれ、全員じゃない。立村くん、これで決まりね」

「ありがとう。それでは、全員一致で、手つなぎ鬼をすることにします。特別準備も要らないようなので、あとはバスの席順だけを決めることにします」

今日の美里ちゃんはブレザーの襟に細い矢印のブローチをつけていた。濃いグレイ色に溶けて見えないから、たぶん校則違反にはなつていなかろう。こういうところが美里ちゃんの可愛いところだし、「評議委員なのに嫌われない」ところだらう。彰子も美里ちゃん

んは大好きだ。

教壇から降りて美里ちゃんは羽飛くんに小さく何かをつぶやいていた。聞き取れないけれど、指先でつんつんつつく真似をした羽飛くん。からかうか何かしたのだろう。

「もう、やあだあ。貴史つてばあ」

ちつとも媚びている風に見えない。物心ついた頃からの幼なじみとは聞いていたけれど、今だにそんな仲良しこよしでいられる」と。他の人からすれば珍しこことなのだろうけれど、彰子にとつては目の保養でもある。

しうがないよね。美里ちゃんにだつたらな。

羽飛くんはアイドル好きの面食いかもしれないけれど、美里ちゃんだけは別だもんね。やきもち妬いたつてしうがないもん。こずえちゃんには悪いけど、羽飛くんはもうあきらめるしかないとことよね。

「いい子」「やさしい子」と「子」を使ひかせる彰子が、唯一使用しない相手。「人」と呼ぶ相手。

それが、羽飛貴史くんだつた。

水口くんが毎日のように見せびらかしにくる、「人体解剖図」を一緒に楽しみ、お互いに、

「今夜は、カツオの解剖する予定なんだ！」

「そつか、じゃあ私はあじの解剖をしようつと

約束しあい教室を出た。心なしか水口くんは、医学部への夢を口にしてからというもの、ちょっとだけ大人びた風に見えた。一年の頃みたぐ、転んでもすぐに泣きじゃくることが少なくなつた。彰子が、

「お医者さんはね、身体が丈夫でないとできない仕事だから、今のうちにたくさん食べておかなくちゃね」

と話したのがきっかけなのか、給食を全部食べるようになつたとか。

菱本先生にも、

「奈良岡のお言葉は偉大だなあ。すい君、お前大人になつたなあ」と双方にお褒めの言葉をいただく始末。水口くんによけいなお世話してしまつただけなのかもしれないけれど、やつぱり明るい顔してくれていたら、青大附中の生活も楽しくなる。エリートだか優等生だかわからないけれど、とりあえずはみんなが笑顔でてくれる。もう「もとよりの小学校黄金時代」が戻つてこなくたつて、彰子は十分満足だ。

「奈良岡さん、奈良岡さん」

あきょくんだな。

放課後直後の一時間は、それぞれの「委員」顔をしているもの。校則違反の嵐少年・南雲くんも同じだった。まぎりなりにも規律委員様。何か、チェックされそなとこりあつただろうか。言つてくれたら直すし、まあいいか。

「どうしたの、あきょくん。これから委員会?」

「うん、ほら、これぞ」

いきなり抱えているごぶりのスケッチブックを差し出した。ローマ字で、「SYUSEI AKIYOO」と綴られてい。ペンのイタリック体でだ。凝つていて。さすが一年D組の王子さま。

「今度、青大附中のファッショングブック作るんだ。ほら、俺、描いたんだ」

「ファッショングブック?」

確かに規律委員会は、服装を正しくするための一環として、毎年限定でイラスト入りの規定集を作ると聞いていた。あまり興味がなかつたので見ていなかつた。なにせ彰子は、「どふりふり」ものでなければ十分というタイプだ。要はウエストが入るものならなんでもいい。南雲くんは前髪を何度も書き上げた。話している最中に三回くらい。長すぎるから邪魔なんだろう。今度、はさみ持つてきて切つてあげようかとふと思つた。

「今年から年四回発行になつたんだ。んで、俺が今回イラスト担当で、たくさん描かれてるんだ。でも、委員会の連中ばっかりだから今ひとつピンとこないから、奈良岡のねーさん、ちょっとだけ見てもらえないかなあ」

「いいなあ、私も見たいな、あきょくんつて絵がうまいもんね」素直に彰子は答えた。せつかくだつたらゆつくり観たい。めぐりたいとは思つ。ファッショントリニティはよくわからないけれど、きれいな物を見るのは好きだ。でも。

「あ、でも今日はだめなんだよね。ごめんね。今度、教室でゆつくりみんなで見たいな」

独り占めするのは、やはり「青大附中の南雲くんファン」に失礼だつ。

よつやくフリーになつて、たぶん水面下では争奪戦が行われているであろうから。彰子が誤解を招くことをやらかそうものならば、きっと迷惑になるに違ひない。

「みんな、つて？」

「だから、あきょくんの絵の巧さは私もよくわかつてゐるから、クラスのみんなでじつくり楽しみたいんだよね。あ、できれば、『ペーしてほしいな。うちの父さん母さんにも見せたいから。この前話したと思うけど、うちの母さん、レースやフリルがどつねりついた可愛い服が大好きなんだ。よかつたら今度、あきょくんに書いてほしいな。もちろん、可愛い女の子の絵でね。まかり間違つても私みたいなおでぶさんじゃなくつてね！」

ぽんと、腕のところを叩き、スケッチブックを押し返した。

「今日、これから、だめ？」

「これから予定があるんだ」

「あのや、もしかして、あの自転車の」

相当強烈な印象だつたらしい。ナックキーの金銀まだらのペインティングチャリは。

「いいや、違うよ。これから、友だちが青大附中の校門に迎えに

くるんだ。一緒に病院に行くんだ。耳鼻科に「デートなんだ！」

もちろんしゃれである。時にもちやんと「一緒に病院で「デート

しょ」と言つた言葉そのものだ。これを誤解する人はいないだろう。

「耳鼻科、つて？」

「もう、やだなあ。この前私に彼氏いるかいなかつてこと聞かれて爆笑もんだつたつて言つたの、覚えてる？ その子なんだ」

「その子つて、男子なのか」

心なしか冷たい響きだ。ちょっと機嫌を損ねたきらいあり。

「うん、そうだよ。でもね、彼氏とかそんなんじゃないんだよ。ちよつといろいろあつて、私が母さんにいい病院を紹介してもらつたんだ。早く病気が治つて、その子が元気になれるようになつて。卒業してから離れ離れだけど、やっぱり大好きな友達にはいつも元気でいてほしいからね」

「病院？ 紹介？ あの、ねーさん、よくわからないですが」

不機嫌はだんだん疑問にすりかわつていく様子。南雲くんは耳にカバーをつけるような感じに手をかざした。たぶん詳しく説明しないとわかりづらいだろうとは思うが、残念ながら時間がない。時也が迎えにくるはずだ。

「ほら、うちの母さん、医者だから、そういうのに詳しいんだ。どの病気にどのお医者さんに行けばいいかつてこと、こつぱい教えてくれるんだ。たまたまその子の病気にお選めのお医者さんが見つかったから、この前新しく行くことになつてね。その時にせつかくだつたらつてことで、一緒にデートみたく耳鼻科に行こうかつてことになつたんだ」

「なんで？ あの、奈良岡さん、病気とデート？ 病院で？」

「だつて、私にはいわゆるデートつて一生ありえないつて思うんだ。遊園地とか、喫茶店とかそういう可愛いこと似合わないもん。でも、大好きな友だちと一緒にしたら、病院の待合室だつて絶対楽しいよ。小学時代の栄光の日々を、せめて思い出させてねつてことで、だんだん混乱の極地に陥つたらしい南雲くん。本当はもつと「紹

介状について」「紹介状と診断書とは違うこと」「自分がなぜ医者になりたいか」「友だちがいつも笑顔でいてくれるにはどうすればいいか」などなど語りたかった。南雲くんは見た目よりもずっとひたむきでまじめだとわかっているから、思いつきり話したかった。でも、時間がない。

「じゃあ、また明日ね、ばいばい！」

走らないと間に合わない。彰子は素早く背を向け、後ろ向きに手を振りながら玄関に急いだ。

「彰子、おせえぞ」

靴を履きかえる前から、誰が来ているのかすぐに見分けがついた。まだ夕日が落ちない黄色い光。まばゆい物体がひとつあり。

「ああ、ナッキーもいるぞ！ 時也、今日は私とふたりっきりやなかつたのかなあ」

時也は無表情で頷いていた。学生服のままだった。白い縁取りをした、一発でどこの中学生かわかるというあいだ。

「夏木が、勝手についてきた」

「あつたりめえだろ。彰子とデートするんだつたら、俺も一緒だろ。な、時也」

頷く時也。もし、これが「デート」ならば、両手に王子様つてことだらうか。これは贅沢だ。思わずにやけてしまふのをこらえつつ、彰子はふたりの肩にゆっくりほおずりした。右、左と頭を乗せただけだけど。わすがに青大附中の連中にはできないけれど、このふたりには許せる。

「検査はどうだった？ なんも痛いことされなかつたでしょ」

「今は手術できなって言われた」

ぼそりとつぶやく時也のポケットを覗いた。薄い。つぶれている。ちゃんと使用済みティッシュを入れるためのビニール袋を持参しているらしい。ナッキーの提案だろ？

「じゃあ、トリブルデートに出発！ でも、待合室が込んでたら私

とナツキーは別のところにいた方いいよね

「予約だから」

前をすんすん歩き出す時を追いかけ、彰子は急ぎ足で自転車置き場へ向かった。ひゅうと口笛を吹くナツキー。何もかもがくつりと見えるふたりの言葉。身体のすみすみまで気持ちよかつた。

時也の慢性的鼻炎の原因はそれなりの病名だつたらしい。手術を必要とするほどではないといつ。成長期の間はまだ手がつけられないの、しばらくは薬で様子を見よつとのことだつた。なんで彰子がそんなことまで知つているのか。

決して時也を絞り上げて白状させたわけでも、診療室までナックーとふたり押しかけていつたわけでもない。三日後、時也のお母さんが彰子の家に来て大きなバウンドケーキを手土産にペラペラと話してくれたことだつた。もちろん彰子の母と同じくどふりふりのピングドレスを纏つて。母よりもほつそりしているからフランス人形のようでかわいらしい。

似合つ人がうらやましいな。

ふと、そんなことがよぎつて慌てた。

当然、手土産のケーキは母に取り上げられ、全部父に食べさせることになつてしまつた。残念だ。自分の体重増が将来三大成人病に影響するからだと母に聞かされても、やはりむなし。

「悔しかつたら、少しさは意識しなさいよ。彰子だつて愛嬌だけで売つていくだけだつたら、これから勝負できなによ。世の中の目は、厳しいんだから」

勝負？

首をかしげてみた彰子に、母はぱりぱりの南部せんべいを皿に盛つた。耳がしゃきしゃきして美味しいし、こま味もなかなかのもの。でも、甘いケーキの方がいいのも確か。

「あんたつて子はほんと、人を疑うこと知らないからねえ。今まではそれでもよかつたけど、お姉さんになつてくるとそういうかなくなるんだからね」

お母さん、人のこといえるの？

さりに首を反対側にかしげた。もう母は返事をせず、自分用のケ

一キをぱくついている。仕方なく彰子も、そのままかぶつてしまにした。

例の耳鼻科トリップルデータにて聞いたところによると、ナツキーが精一杯、時也のためにクラス女子と対峙しているらしい。その辺は心配していなかった。まあ女子だって、時也の病状がよくなつたら文句を言うネタはなくなるわけだから、これ以上不潔扱いすることはないだろ？

父からはクラス情報をあまり聞いていなかつた。話もしなかつた。彰子も無理に聞き出す必要もないと思っていた。

何か困つたことがあればナツキーあたりから連絡がくるに違いない。

彰子にはよつやく、青大附中一年D組内の「気になること」を整理する余裕ができた。ナツキー、時也と出かけた耳鼻科へのデータ、あればじく普通のおしゃべりと、帰り道母からのお菓子配布つきでめでたく終わつたけれども。

あきょくん、まだあの時のこと、怒つてるんだなあ。

あれから一週間、南雲くんは口を利いてくれなかつた。

もちろん朝の挨拶はいつも通り、

「あきょくん、おはよ！」

と彰子の方から声をかける。

軽くうなずく感じで答えてはくれる。しかし、それだけだ。妙に言葉が少ない。

「今度、例のイラスト見せてね」

通りすがりに一声かけても、妙にびくつと肩をこわばらせ、頷くかよそ向くか、そのどちらかの行動を取る。一週間続いてよつやく避けられていることに気がついた。

まずいなあ。あの口は時也を待たせていたから、スケッチブックの絵を見ていく余裕なかつたんだもんない。一応、あきょくん

には説明したけれど、確かに一方的に断つちゃつたようなもの。友だちだつたら、そりやいやよね。反省しなくちゃ。

彰子は次の授業の教科書を机から取り出した。理科の実験が、教室で行われる予定だつた。本当だつたら教科書を持参の上、理科実験室へ向かうのが筋だ。でもこの日は、教育実習生の授業が入つていて、一日貸切になつてしまつた。仕方ないので一年D組の教室で、アルコールランプを持ち込み、マグネシウムを熱して酸化させるという実験を行うことになつた。火を使うのでめつたに教室でやるなんてことはないのだけれども、しかたない。机をそれぞれ班ごとに向かい合わせて、場所を広く」しらえていた。彰子の席は角の方だつた。椅子の背を向けたら、隣りの班、南雲くんたちのところにぶつかりそうだつた。南雲くんが隣りの立村くんの席と一緒に動かしているのが見えた。

「南雲、悪い。ちょっと手伝つてくれ」

近くで声がすると思ったら、学習委員の男子だつた。

いつもは評議委員が先生の教科書を運んだり、細かい道具を持つてきたりするのが常だ。

めずらしく今日は違つらしい。立村くんもいない。美里ちゃんの姿も見かけない。

「あん、なんだよ」

愛想良い声で答える南雲くん。機嫌は悪くない様子。

「実験室、やたらと細かいものが多くて運び切れねえよ。悪いんだけど、南雲手伝つてくれねえか」

ははあ、どうやら、南雲くんに実験道具運びを頼んでいるらしい。

「いつもだつたら立村に頼むんだけどさあ、逃げられたよ」

「さつさ、三年の教室に行くつて言つてたなあ。まだ戻つてないつか」

どうやら学習委員の彼は、アルコールランプとか三脚とかを六セツト一人で持つてくるのが不可能だということを認識しているらし

い。そばで聞いていた彰子も想像がついた。いつも理科実験室で用意する際は、平べったい木の箱にまとめて、一緒に運んでくるのが常だった。

ふと一案が思いついた。ちらりと南雲くんに視線を送り、目が合うのを待つた。ぴくりとしているのがわかる。

「じゃあ、私が手伝おうか？ あきよくん」

もうひとりはあらり、という風に顔を向けられた。

南雲くんの方は無言だった。田をこわばらせ、笑顔なく彰子を見つめていた。今日の髪型はおしゃれな南雲くんにはまれながら、少し生え際が崩れている様子。たぶん寝癖が取りきれなかつたのだろう。

「うわっ、奈良岡のねーさん、まじで手伝ってくれる？」

手もみしつつ近寄つてくる学習委員の君に頷いた。この子の気持ちも察するに、ひとりじゃあいやだろ。

「どうせ私の筋肉だつたらあつといつ間に運んでこれるし、いいかなって思ったの。」ここで少し、余分な脂肪を減らさないとね」「

「うはは、言えてる、感謝しますよねーさん。じゃあ俺も先に、先生のところへ行つてやばい薬品ないかどうか聞いてくるからよ。できたら、六セツト、持つてきてくれるとうれしいぜ」

「うん、わかった。じゃあ、あきよくん、一緒に行こつか」

学習委員の君との軽い口調。ふだんだったら南雲くんとばかやつている時と同じのはずだった。

南雲くんが何も言わず立ち上がり教室を出たのを、彰子は大急ぎで追いかけた。とりあえずは荷物運びを手伝ってくれそうだ。扉が閉まりそうなところもう一度開いて反対方向の職員室へ走つていつたのは学習委員の君だった。

ふたりつくり。あやまるにはいい機会だ。

前回のことは南雲くんに時間を取つてあげなかつた彰子が明らかに悪い。

話せばわかってくれるよね。大丈夫。

ひとりですたすた歩く南雲くんに追いついたのは、理科実験室前だった。

戸口で振り返り、冷ややかなまなざしで彰子を見つめていた。

意外に根に持つ性格かもしれない。

うわ、本当に怒ってるかも。

彰子は思いつきりほつぺたのところをやわらかいままにして笑顔を振りまいた。

「待つてくれたんだね。ありがと。じゃ、お手伝いするね」無言で扉を開いた。中には誰もいなかつた。消毒した後の黄色い匂い、口から空気を吸つたら咽をいためそうな塩酸っぽい匂い、ガラス戸に納まつた理科実験道具の数々が迎えてくれた。

「アルコールランプは、どこだつたつけ？」

あえて気づかない振りをしながら反対側の戸棚を開ける。三角フラスコ、ガスバーナー、いろいろな長さの試験管一覧。ホルダーもさわると刺がささりそうな木製のものが並んでいた。横に細い小箱はリトマス試験紙。大抵実験で使う時、一、二枚くすねる奴がいた。

「ほらほら、あきよくん、リトマス試験紙あるよ。もらつてくれ？」返事が返つてこない。すでに南雲くんはアルコールランプの揃つている棚の前に立つっていた。鍵を開け、木製のおぼん型入れ物にひとつひとつ並べた。六セツト用意しなくてはならない。あとは三脚だろうか。

「あきよくん、何か用意するものあとある？」

さすがにこれ以上沈黙が続くのはまずいだろう。決して無視しているわけないといふことは、彰子にもわかる。時折ちらちらと、振り返る様子を感じる。彰子が口を開くごとすると慌てて目を逸らす。たとえが悪いかもしれないけれど、立村くんのじぐさに似ている。今までの南雲くんにはない様子だった。

こう言う時は、こっちから「めんなさい」というかな。

彰子は「危険！ さわるな！ 薬品あり」の張り紙がされている別の

戸棚の前を通り、アルコールランプの並んでいた棚に近づいた。ついでにピンセツトを六本掴んで。

無視はしていない。確かに南雲くんは彰子の方を無表情で見つめ続けている。一切相手にしてもらえないのならばしかたないけれど、まだ脈はある。だいぶ古い木製おぼんの上に、ひとつひとつピンセツトを並べた。ひとりで十分運べるだろう。

一呼吸、二呼吸、置いた後に彰子は南雲くんの顔を見上げた。やはり背は高い。

「あきょくん、先週はごめんね」

笑顔は絶やせない。まずは話だけ聞いてもらひるよう急いで続けた。

「せつかく、イラスト見させてくれるって言つてくれたのに、私の都合で無視しちやつた形になつちゃつて。友だち待たせてたのはほんとうだけど、あきょくんをないがしろにしたと思われても、仕方ないよね。反省します」

できるだけ軽く、おしつけないよう。母が父の機嫌を取る時いつもやつているように。大抵は、バーゲンでどふりふり服を買い過ぎた時によくするやり方だ。

南雲くんはすぐに横を向いた。へらへら口調ではない。

「別に、そんなこと」

「ほんと? 私、あきょくんに思いつきり嫌われたかと思つてひそかに焦つてたんだ。よかつた!」

過剰なくらい、「よかつた」を繰り返してみる。どうもまだひつかりが取れたわけではないだろうが、決定的に「お前とはしゃべりたくねえよ」と言われるよりはまだ、友情の脈はある。

「嫌われる?」

皿をアルコールランプに向けたまま南雲くんはつぶやいた。語尾は上げている。疑問形だ。

「やっぱりみんな仲良しな方がいいに決まってるもん。ね」

「仲良し、だけかよ」

やはりまだ、許してくれてなさそうだ。いやはやと肩をすくめたくなる。でも彰子が話をすればなんとかなりそうだ。滑らかに言葉を緩めた。

薄いあめ色のアルコールがランプの底で揺れている。キャップが揺れていた。マッチがないことに気づいて慌てて引き出しから取り出した。

「そうだよ。あきょくん。いつも思うんだけどね、私ははつきり言つて一生ミスコンテストには縁のない顔してるし、親にはいつも痩せろ痩せろって言われてるけれど、でも誰よりも得してるとてね」「得?」

今日の南雲くんはずっと語尾を上げっぱなし。

「うん、私の身の回りにいる人つて、みいんない人ばかりだつてこと。この前、小学校の友だちが私を迎えてたつて話したよね。私、男子も女子もみんない人ばかりがそばにいるから、安心して話ができるんだ。お母さんにも、私が人を信用しすぎるつて言われるけれど、だつて信じられる友達ばかりだもの。ほら、あきょくんだつて私にとつては、いい友だちだよ」

一番わかりやすい言葉だらう。彰子のわかる範囲内で、一番南雲くんに伝わると思う言葉だった。

「友だち、かよ」

「そう。だから、そうでなくなつてしまつたらやだなあつて思つてたの。怒つてないつて分かつたから、もう私も安心したな。よかつた。じゃあこれ持つていくな。戸を開けてください」

もう大丈夫だ。まだ機嫌を直したとは思えないけれど、友だちとしては問題なかろう。安心して彰子は両手を木のおぼんにかけた。持ち上げようとしたが押さえられた。右手側を抑えられた。小指だけ、南雲くんの掌に触れていた。

「あ、持つて行つてくれるの?」

答えはない。力が入つていて。持たせようとはしていない。

「早く行かないと実験の準備が終わらないよ。いひつて。私が持つ

ていからね

もう一度持ち上げようとしたが、さりに押さえつけた。彰子の右肩に、南雲くんの顔が乗つかりそうだった。髪の毛が少し耳もとに触れた。

息遣いが荒い。疲れているんだろうか。

「俺のことは、友だちなのか」

耳もとに、息をたつふり込めた言葉が流れてきた。

気配が違う。

「そうだよ。それよりどうしたのあきよくん。具合悪くなつたの？」

答えてくれ。俺のことは、それだけなのか

「それだけって、何が？」

「金銀のまだら自転車の奴、あいつよりも、俺は友だちなのか？」

ナツキーのことだ。

金銀まだらの自転車は趣味でなかつたのだろう。思わず笑いたくなつた。そういえばナツキーも南雲くんのことを「なんとなくむかつく」と言つていたつけ。

「そうだよ。ナツキーはそうだね、あつひやこ時から友だちだよ」

「この前迎えに来ていた奴は？」

時也のことだろうか？

調子が狂いそうで彰子も懸命に答えた。

「見てた？ 時也も、友だちだよ。だから一緒に耳鼻科にお付き合いしたんだよ」

そつと、横目で南雲くんの顔をうかがおうとする。うつかり顔をすらしたら顔と髪の毛がべつとりくつつきやうになる。そりやあ、嫌だらう。できればもう少し、離れてほしいのだけど。でも下手なこと言つたら返つて怒られそうだ。ただでさえ南雲くんの『機嫌は斜めなのだから』

困つたなあ。逆効果だつたかも。私つてほんつと、ばか！

思い切りため息をついた後、彰子は軽く木製おぼんを持ち上げた。

「ほら、早く行くよ。うつかりここで落したら、アルコールがふ

んぶんで先生に怒られちゃう」「もちろん笑顔を絶やさなかつたつもりだった。」口へ向かねりとつま先を出した。

「行くなよ！」

鼓膜が破れるかと思つた。まだ南雲くんの口元は彰子の耳もとに残つていた。

「俺の話、まだ終わつてないだろ、奈良岡さん」

「だから、どうしたつてのよ。あきょくん」

耳を押さえきれず彰子はもう一度、アルコールランプを実験机に置いた。

「俺は、あんたのことを友だちなんかだと思つてなんかねえよ。」「え？」

力が抜けそつになる。思わず指先を離した。あれだけあやまつても、ダメだつたらしい。

何を言つていいかわからない。彰子は首を振つていた。

「あきょくん、『ごめ……』

「違う、聞けよ！」

自分の手がいきなり厚く覆われた。指先が動かない。南雲くんの指先がしつかと押さえてくる。握り締められたと気づいたのはまだ後だつた。

「ちよつとちよつと、あきょくん、なんかとんでもない」とこ掴んでるよ。ほらほら、離して。また噂されちゃうよ。私なんかと……」「されるなら本望だ！」

逆効果。完全に彰子は読みを誤つた。手の甲からにじんでくる湿り気は汗だらうか。顔をのぞけず、だんだん心臓の鼓動が指先のぬくもりと重なつてくる。いつもの南雲くんの口調ではない。いつものように

「あれ、ねーさん、どうしたつすか」と声をかける明るい「あきょくん」ではなかつた。

視界に入る南雲くんの顔に笑顔はない。彰子が分かるのはなんかわからないけれど南雲くんが本気だつてことだけだ。

「本望つたつて、そりや困るでしょつて」

「好きな相手に好きだとつてどこが悪いんだ！」

「は？」

手が離れない。完全に南雲くんの中のモーターが暴走している。

彰子の中の精神的鼓膜が破れていく。

好きな相手に好きだとつて、つて、あきょくん、まずいよそれは。

南雲くんの言葉は途切れず、まだ手を離してくれない。状況が把握できないまま、言葉が続く。

「奈良岡さん、俺、軽いと思われてるだらつけど、今言つたことは嘘じやない。ほんと。それだけは信じりつて」

「だから、あきょくん、ちよつと待つて。頭の中が混乱してるんだけど」

「話は一言だけだつて。奈良岡さん、俺は本気だ。付き合つてぐだれい」

「付き合つて、でもあきょくん、言いたくないけど確か、先週」

「彼女と別れたんじよ、言つつもりだつた。遮られた。

「好きな子ができたから、別れた」

「好きな子つて、今の話だと下手したら私のことになつちやうよ、

日本語文法上、それはまずいでしょいくらなんでも」

「まづくないつて言つてるだろ！」

南雲くんの顔を見ないようにして、彰子はひたすらアルコールランプのふたを数えていた。さすがに心臓がとくとく言い出してきた。繋がらない。南雲くんと「告白」の意味がわからない。

第一、「付き合つてぐだれい」つたつて、いきなり言われても困る。

彰子が知りたいのは、南雲くんが彰子のことを「友だちじやない」と言つたのに、なぜ「付き合つてぐだれい」になるのか、そのつな

がりだけだ。一生懸命彰子があやまつても許してくれなかつたのに、なぜ、今になつていきなり「付き合つて」と言い出すのか、わからぬ。

「どうして、彰子あればあきよくんを冷静にさせられるんだわ。

きっと、私がまだ怒らせるかなんかしてゐるかも。だつて、今の話からすると、私と付き合いたいつてこと言つてゐるにちやうよ。それだつたらいくらなんでも、あきよくん、いやでしょ。

「奈良岡……彰子さん、俺と」

さすがの彰子も黙るしかない、混乱を制する一言が、南雲くんの口からこぼれた。

「南雲秋世と、付き合つてやつてください」

おやるおやる横を見る。目が合つた。からかい調子だつたら笑つてしまかそうと思つた。でもだめだつた。彰子の目からみても、南雲くんの瞳は少しだけつるみ加減、笑みは目尻一滴残つていなかつた。

なんで？

あらためて指先の神経を震わせてみる。じわつと南雲くんの手のひらから熱いものがにじんでくる。

「もし、あの自転車野郎と付き合つていたとしても」

「ううん、それはなによ。ないけど、ちょっと待つてね。あきよくんちょっと」

失神しそう、つてきつとこの瞬間のことを言つのだ。

いいかげんな言葉を返したら、何が起こるか分からぬ。アルコールランプに火がついてしまつたのだろうか。少しだけ底のアルコールが揺れている。あめ色に光つてゐる。

どうして……。

ちょうどチャイムが鳴つた。足早に駆け出す気配あり。廊下に誰かがうるつてこるらしい。急いで教室に戻らなくてはならない。

頭の半分で冷静に考える彰子がいた。

まだ「あきょくんの前では笑つてあげなくちゃ」と命令する自分

がいた。

「あきょくん、今のこと、また、あとで聞くね。『めんね』  
『めんつて』

「いや、そういう意味じゃなくて、ごめん、私、なんかまた変なこと言つちゃいそまだから、ちょっとだけ時間ちょうどいね。あの、とにかく」

精一杯両腕に力をこめて実験セッター式を持ち上げた。やつと南雲くんの手も離れて落ちた。

「とにかく、教室に戻ろうね。私持つていいくね」返事は待たない。とにかく理科準備室を離れないで、またとんでもない言葉を口走つてしまつ。

奈良岡彰子の人生において生まれて初めて聞かされた「付き合つてやつてください」という言葉。

どう調理していいのかわからなかつた。

言葉をおさかなかばくように解剖する時がほしかつた。  
付き合つて、つて。

「奈良岡さん、俺は」

南雲くんの追いかける声が何を言つて居るのかわからない。開けるのを待たず、背中で戸を押して彰子は廊下に出た。あぶなく転びそうになり、バランスを取つた。もう人通りはない。一年D組の教室は同じ階だから階段を昇らないですむので急ぎ早に歩を進めた。風が窓から砂埃を巻き上げている。咽にひつかかりそうで咳が出た。背中越しに南雲くんがついてきているかと振りかえつたが、いなかつた。

「どうしよう、とんでもないことになつちゃつた。

教室の扉に佇んだ時だった。

「おい、聞いたか聞いたか？」

「まじかよ、ほんとか？」

確かに扉越しすじい騒ぎになつてているとは感じた。誰かにドアノブを開けてもらいたかったから、戸口席の誰かに合図するつもりで立ち止まつただけだつた。盗み聞きなんてしようと思つていなくて、勝手に聞こえてくる。誰がしゃべつているのかなんてわからない。男子と女子だと、わかるだけ。

「えー、南雲くんが彰子ちゃんに告白しちゃつたの？」

「うそでしょ！ だつて南雲くんには彼女がいたくせに！」

「ううん、別れたつてこの組の子からは聞いたよ。彼女ショックで泣いちやつたらしいけれどね」

早口だ。息を継がないで事実関係をどんどん積み上げていくのが女子のしゃべりだ。

手元のアルコールが揺れている。

「おいおい、それほんとかよ」

「だつて今、理科準備室で死ぬほど恥ずかしい」と、あいつが言つてるんだぜ。信じられるかよ

「なになに？」

「付き合つてくれつて。奈良岡のねーさんが露骨にいやがつてゐるにさ、南雲の奴、手を押さえつけてさまるでなんか脅迫してゐるつて感じでさ」

「ちょっと待つた。本当に相手は奈良岡だつたわけ？」

「だから俺だつて信じられないんだつてさ」

うるうる、前側の戸に移動してみる。あまりにもタイムリーな話題に飛び込めない。さすがに彰子でもそこまでクラスの注目を浴びたくなかった。

この組側の位置からは、同じく勢いよく盛り上がる声が飛び込んできた。やはり女子だつた。「聞いた？ 今この組の男子が話してゐる聞いたんだけど、……ちゃんの彼がとんでもない女とできちやつたんだつて」

とんでもない、女？

口の中にセメントを流し込まれた感じだ。身体の節々が堅く、こわばつてくる。耳だけがそよいでいる。聞き取ろうとしている。廊下にはまだ誰もいない。先生がくるかこないかの瀬戸際だ。

「ほらD組のすつこく太つた子いるでしょ。あの子だつて」

そりやあ、私のことだらうなあ。私より大きい子つて男子もそういうもんなあ。

「知つてる知つてる、保健委員やつてる、すつこく性格いい子でしょ。ああいう子大好き」

「性格はいいかもしないけど、あの顔とあの体型だけで、私は絶対いや！見ると暑苦しくつてつゝとおしいよね」

彰子は一步ずつD組側に横歩きして移動した。ずっと両腕で抱えているからじうじょうもなかつた。

彰子は後ろを振り返つた。よつやく南雲くんが廊下の向こうから現れた。

「気ままずそつに、つつむき加減で、でも目をそらさず」。

「あの、さつき」

「あ、じ、じめん。ちょっと私、おなか痛くなつちやつたみたいなんだ。今日の実験、パスするね。やだなあ。もう、なんか変なことばつかり言つてるね。じゃあ、これ、お願ひします！」

真つ正面に向かい、両手で差し出した。ランプの中のアルコールが、右左と揺れていた。

「俺、本気だからな、それだけは信じて」

言いかけた南雲くんに小さく首を振り、目一杯笑顔をこしらえた。かなり無理していた。

「ほら、私は気にならないから。ね。私はただあきよくんの友だちでいたかつただけだから」

がしつとおぼんを押さえてくれたのを確認してから、ぱらつと手を離し、一步、一步と後ろずさりした。

「ほんと、変なこと言つてごめんね！」

髪がぱぱぱさきしんでいる音が聞こえる。心臓が壊れそうだ。こう言つた時こそ、青大附中の保健室は守つてくれる場所だと思つ。保健委員だつて身体と心の調子がよくない時はあるのだ。今、利用しなかつたらどうするつていうのだ。

全く冗談めいた風に南雲くんの表情は崩れなかつた。だから怖かつた。手に残つた汗ばんだ感覚が、今ごろになり蘇つてくる。彰子は急いで階段を下りた。保健室は一階の職員室隣りにある。

「いやあっ」

保健室に入つてみると、白いカーテンの後ろ側では修羅場の展開中だつた。相手の顔は見えない。保健の先生および、他の先生がそばについているらしい。悲鳴じみた泣き声が聞こえた。何かがあつたらしいけれども、カーテンで隠さなくてはならないくらいのことらしい。なだめる声、落ち着かせようと叱りつける声。自分が割り込んだらお邪魔虫になりそなのは田に見えていた。

「ちょっとこんと顔をのぞかせた時の、保健の先生は穏やかだつた。彰子だと氣づくと突然笑みを浮かべた。切り替えが早い。」

「あら、奈良岡さん、どうしたの」

「ちょっとおなかが痛かつたから、寝たかつたんだけど、無理そつ、ですね」

「あらめずりしー」

直前まで

「ほら、もう三年なんだから大人なんだからー。」

とわめき散らしていた先生とは違う。もともと保健の先生はそんなに声を荒げない人だつた。「今のうちにベット占領しちゃいなさいな。胃腸に来る風邪なのかな？ 季節の変わり田は風邪引きさんが多いからねえ」

「かも、しれないです。今日は患者さんになつちやつていいですか」健康体そのものだとわかつてゐるから、嘘をつくのも罪悪感あり。おなかが痛いと感じてみると、なんとなく横つ腹がちくちくしてきた。

全く嘘、つてわけではないよね。と言ひ聞かせた。

彰子はカーテン越しの修羅場に耳を済ませながら、横たわつた。

保健室のベットは全て白いけれども、とにかくどうパープのベンキ

がはげている。人が見ていないことをいいことに、ちょこっとだけ乾いたペンキ跡を爪ではがしてみた。ぱかっと、落ちた。

「どうやら三年の女子が、授業中に何か騒ぎを起こして保健室に連れてこられたらしい。いささかパニック状態。でも彰子が来てから五分くらいで落ち着きを取り戻したらしく、ばさばさと何か物音の後静まつた。たぶんベットに寝かしつけられたらしい。白いカーテンのシルエットが、人の形したままゆっくりと倒れていくのを彰子は見ていた。

保健室つて、自分で使ったこと初めてなんだよね。よく、クラスで貧血起こしたりした子を連れてきたりしたけどね。こうやって、みんな天井を見上げてるんだ。緑色なんだ。鶯色の天井に、明るい陽射しが陰をこしらえ、ふらふらと丸く揺らめいている。天気がよくても教室・保健室の中では電気をつけなくてはいけないらしい。明るすぎる空気には、彰子は少し目を被いたかった。

あきよくん、どうしてあんなこと、言つたんだろう。何度も「俺は本気だから」と繰り返す南雲くんの顔と口元が忘れられない。

「付き合つてください」と一回も口にした南雲くん。  
私があきよくんと友だちだつて分かつてゐるのに、どうしてだらう。

わかんないよ。どうしてだか。どうしよう。

あらためて天井の丸い揺らめきを追つてみた。ひとつ、ふたつ、みつと灰色の勾玉がさまよつてゐるようだつた。夜中に見つけたら、きっとこれは人魂だ、どうでもいいことを考えた。

彰子にとつて、まだ南雲くんは「子」と呼べる相手でしかない。同じ年の男子で「人」と呼べるのは羽飛くんしかいない。入学式の時初めて、羽飛くんと話をした時は確かに、「こいつはすっごくい奴だ」と思い、もつとおしゃべりしたいと願つたものだつた。南

雲くんと口を利いたのはいつだつただろ？。ずつとずつと後のはずだ。たまたま「秋世」という名を「あきよ」と呼んでしまった時に、「いいよ、俺、ガキの頃からずつとあきよっていわれてたから」と、ぱつかり笑顔で返してくれてからだろ？。

青大附中に入学してから、自分が小学校時代いかに男子に人気あつたか、いかに自分がそれに甘えてたかってことがよくわかつた。母が口癖のように、

「あんたは愛嬌で生きていく子なんだからね」と言い聞かせていたのも、今なら通じた。

何があつても、自分は笑顔を忘れてはならない。自分の武器は、それだけだつたと知つたから。どんなに逆立ちしたつて、彰子は美里ちゃんや「ごえちゃんたちのように可愛いとは思われないのだからと。

そう、羽飛くんの視界には入つてないのだからと。

羽飛くんの好みが「アイドル歌手鈴蘭優」的幼い感じの美少女だと知り、それ以上に幼なじみの美里ちゃんを大切にしていることにも気づいた時。

たぶんこの段階であきらめてしまつたのだろう。

辛いとか哀しいとかは思わなかつたけれども、かつてのように男子たちがガチャガチャのおもちゃを貰いでくれたり、電話をしちゅうかけてきたりとかする友だち付き合いはできないと覚悟した。

そうよね、私つてすつごく、いやな性格してたのかも。

もし、黄金時代が続いていたら、もつといやな子になつてたかも。

例の「大悪口」「バス」「デブ」の洪水は浴びなかつた。「ビール瓶」とのお言葉を水口くんから温かく頂戴した程度。自分の容貌がおかちめんこだと彰子がよくわかつてゐる。小さい頃から気づいていた。でも、それで辛いと思つたことなんてなかつた。みんなが彰子のことをお姫様扱いしてくれたからなおさらだつた。魔法のかつたまま、小学校を卒業し、初めて解けたのが青大附中だつた、

それだけのことだった。

なら、魔法のかからない今まで、精一杯笑顔を振り撒いていこう。  
今までの自分は魔法でげたを履かせてもらっていただけなんだも  
の。

その分、みんなが楽しくいられるように、気持ちいいことで補お  
う。

一年半、彰子はそれだけを考えていた。

「ひつらひつらじてこるひつひ、隣りのベットで騒いでいた女子の  
親が迎えに来たらしい。なにやら娘をしかりつけてい。ヒステリ  
ックに悲鳴をあげる隣りの影。

「だからあんた三年のくせにどうして…」

「だつて、だつて」

しばらく泣き崩れるものの、この場において置けないとわかつて  
いたのか、母親らしき人の声で「ご迷惑をおかけしました。申しわ  
けございません」と一回繰り返し、娘を引っ立てるように出て行つ  
た。

すぐに迎えに来ることができる家の子だつたんだ。

うちのお母さんは今じる、手術かな？ 每日手術のない午後  
はないつて話してゐるもんね。

南雲くんに実験道具を押し付けて逃げ出してきたことつて、やつ  
ぱり「逃げ」だつたのだろうか。

隣りのベットを整頓しているらしい保健の先生に、カーテンを開  
けて一声かけた。

「先生、保健日誌に私のこと書くんでしょ

「そうだ、そうね。奈良岡さん、熱を測らなくちゃね」

体温計をもらい、脇に挟んだ。たぶん平熱だとわかりきつてゐる。  
右肩に手を置いて中世の騎士がポーズを取るような格好で上半身を  
起こした。

保健の先生はまだ若い。二十代後半で恋人ありとの噂あり。よく保健委員会の帰りに「先生の彼ってどんな感じ?」とからかつたりすると、真っ赤にして、でも語りてしまつ。明るい人だ。彰子もたまに、いわゆる一般論で「恋愛」について聞いてみたりする。自分と重ねる話題はなかつたけれども、

「もし、彼、彼女が出来て困つたら、すぐに相談しなさいよ」と言われている。保健委員、男女問わずそれは何度も耳にしているはずだ。

「先生、いい?」

「あら、平熱ね」

「やつぱりそつか

ため息をつく。すぐに気づいてくれたのか、薬を一袋取り出して水を用意してくれた。

「勉強のしすぎ? それともストレス?」

「ストレス、かもしだれないなあ。これでも結構落ち込むことがあるんです」

さすがに「クラスの王子様に告白されて逃げ出した」なんて言うつもりはない。変に口にして、さらに話が膨らんでいつたら大変なことになる。いい先生だとは思つけれども、秘密を守ることはできそうにないだろう。この人は。

「言われてもかまわないことだけ聞きたかった。

「先生、あのね、自分の顔とかを意識したのって、どのくらい?」

「え? 顔?」

可愛い感じでソパージュに髪の毛を膨らませてている。もちろん保健室にいる時は一つにまとめているけれども、帰り際見ると思いつきり解いているのを保健委員はみな知つていて。「そうね、五年生くらいかなあ。その頃になると、顔というよりも身体が、みな変わつてくるでしょ。だから身体検査の時に胸見たり、おなかが出てないか見たり、結構チェックしまくつてたなあ」

「あの、うちの中学校の身体検査で全然そういうの気にしなかつた私

つて、やつぱり変ですか。体重だけはつちの母に怒られるのでもちやんとチェックするけど」

「ああそつか、奈良岡さんのお母さん、お医者さんなんだもんね」  
「げらげらふたりで笑い合ひ。

「奈良岡さんは天真爛漫だもんね、無理に意識したくないなら思わなければいい」とあって、自然に任せるのが一番よ

「そつかなあ」

天井の人魂ゆらめきをもう一度見上げた。こまこまと動き回つて、

いる先生に、もう一声かけた。

「先生、もうひとつだけ。私みたいに太つてて、不細工な顔つて、いるだけでむかついちゃいますか？」

「「なんで？」

「うつとおしいとか、そう思いませんか」

口に出していくと、本当の傷口がぱっくり開いてきて、泣けてきそうになる。南雲くんの「俺、本気だから」という言葉が全く耳に入らなかつたのも、最初に染み込んだざわめきがあまりにも、濃かつたから。

「そんなこと全然。誰がそんなこと言つたの」

「言われたわけじゃないけれど」

本当のことなんていえるわけがない。C組の女子が口にしていた言葉、

「見るだけでもいや」

南雲くんの元彼女と友だちだったから、慰めるために言つただけなのかもしね。できればそう思いたい。それに誤解なのかもしれないと彰子がまだ受け入れてない。

どんなに笑顔でみんなに接しても、この顔、この体型だけは変えられない。

もちろん母の言つ通り、甘いケーキをあきらめておせんべいだけにすれば、もう少し体重そのものも減るるだろ。でも、整形でもしない限り変わらない自分の顔立ちを否定されたら、どうすればいい

いんだね。」

「奈良岡さんにそんなこと、真っ正面から言つ奴いるの？ やだねえ、それって。そういう奴は無視よ、無視。見る目ないねって笑つてやればいいのよ。男子？ 一年生くらいの男子つてねえ、はつきり言つて生意氣だから、無視してけつと笑つてやればいいのよ」

違う、男子じゃないよ。先生。

「女子は、どうのかなあ、先生」

保健田誌に名前を書き込みながら、もう一度先生は顔を上げてじつと彰子を見つめ直した。「女子？ はつきり言つて自分に自信のない子ばかりだと思えばいいのよ。でも、そう言われるようなあつかけ、何かあつたの？」

「こればかりはいえない。彰子は首を軽く振つて、にっこりと微笑んだ。

「ううん、なんでもないです。じゃあ、ちょっと患者さんの気持ち、感じて寝ていいですか」

薬はおなかのすく胃散だつた。これなら副作用がない。おなかが猛烈にすぐだらうけれども、あとでこつそりおせんべいをくすねよう。

う。

一十分くらいたつた頃だらうか。

三年女子の大騒ぎが終わつて、先生と語つた後、ぼんやりとゆらめきを眺めていたときだつた。

「せんせー、悪い、患者一人連れてきたわ」

聞き覚えのある、声変わりが完全に終わつた奴。反射的に起き上がつた。同年代でここまで声が野郎ものに出来上がつた奴はそういうない。

「もしや、その声は東堂くんかな」

先生が返事をする前に彰子はカーテンを開けた。二年D組の男子保健委員。彰子ともコンビをくんで一年連續。面食いなのが玉に瑕だがなかなか、話の分かる良い奴である。

「よ、奈良岡のねーさん、こんなところにいたんですねかい」「久しぶりに患者気分を味わいたかったのよ。あれ?」

軽い返事で受けようとしたが、次の瞬間固まつた。東堂くんのがつちりした肩にもたれて、今にも死にそうな顔してうなだれているのが約一名。顔は半紙の白をそのまんま。足を引きずっている。

「あらら、立村くん、どうしたの」

一種、保健室の常連化している、評議委員立村くんが運び込まれてきた。

ふわっと顔を上げて、彰子の顔をじっと見た。少し挑戦的なまなざしにも見えて戸惑つた。

「実験してる最中にさ、いきなり椅子から滑り落ちて氣を失つてやんの。いつもの貧血だろ、な、立村」

頷きながら、それでも足を引きずりつつ保健の先生に迎えられた。立村くんが夏にしょっちゅう貧血を起こして倒れているのは、周知の事実だし、最近はクラスでもみな驚かなくなつていった。かならず誰かが立村くんを担いで連れ込むか介抱するかのどちらかだつた。羽飛くんあたりがいつもそうだったのだけども。保健の先生はまず、椅子に座らせて体温計を渡そうとしたが、気が変わつたのか、

「あんたは平熱でも貧血起こすこと多いものね。足を高くして少し横になつていきなさいね」 すでに「あんた」扱い。立村くんがいかに「保健室の常連化」しているかがよくわかる。彰子の隣に並んでいるベットに、横たわった気配がした。カーテン越しに映るのは、男子にしてはやたらと細い腕と首だった。影絵芝居を観ているようだつた。

「給食はちゃんと食べたの?」「朝は具合悪くなかったの?」「風邪引いてない?」

先生の質問には答えていらじりだが、彰子の耳には聞き取れなかつた。東堂くんが帰ろうかどうじょうかと何度も保健室内を覗き込んでいる。授業をさぼりたいに違ひない。起き上がってじっと見つめ返してやると、相手はにやつと笑つた。

「ねーさん、教室に戻るか？」

当然のようすに声をかけてくるのは、東堂くんも彰子がする休みしているとわかつて、いるからだ。「」で「やあよ」なんて答えたら、突つ込まれそうだ。どちらにせよ今日の放課後は保健委員会でまたいろいろな話し合いがあるのでから。

「しようがないか、戻るね。でも立村くんも大変だね。夏苦手なんでしょう？」

本音を言わせてもらえば、隣りに男子が、特に彰子的に苦手なタイプの立村くんが寝て、いるといふのは、どうも落ち着けなかつた。天井のゆらめきを眺めていたおかげで、たぶん大丈夫、そう思えてきた。

「奈良岡さん……」

声が、しつけ糸状態で切れ切れに聞こえる。立村くんの話し方はいつも語尾が消えそうだ。彰子や他の女子に話し掛ける時はいつもそうだ。彰子が返事をする前に、東堂くんが答えた。

「ほんと、今日は塩酸とかやばい薬の実験じゃなくてよかつたぜ。ま、寝てろよ。あとで迎えに来てやるからさ」

「ありがとう、助かる」

電話が鳴り、先生が受話器を取つて、いる様子だ。東堂くんは最後に彰子へ、

「しかし災難だなあ。ねーさんも。水口泣いてたぞ」

思うに、彰子とともに話をしている男子はあまり、さつきの話を気にしていないところいらし。

まあいつか。東堂くんはとりあえず、まともに話ができる人でいるらしいしね。ああ、しそうがないつか。戻ろうつと。

隣りの立村くんに、もう一度声をかけた。カーテン越しなのもなんか悪くて、直接顔をのぞくことのできるところまで戻つた。すっかり汗びつしゆりで真つ白い顔。化粧しているんでないかと思つくらいだ。

「じゃあ、私は戻るから、早く元気になるんだよ。立村くん」

「あの、さ、奈良岡さん」

田がだんだんうつろいでいる。口元が半ば開き加減で、言葉を発している。なんだろう、早く離れたいのに。でも顔には出さず、彰子はかがみこんだ。手で招くしぐさをする立村くんは、片田で先生の様子をうかがつた。まだ電話から離れられないようだ。やたらとお辞儀をしている。

「どうしたの？」

「さつきのことなんだげど？」

「さつき？」

立村くんの口から出た時はぴんとこなかつた。

「あの、南雲のことなんだけど」

なんで、立村くんがそんなこと言つわけ？

やはりばれていのだろう。立村くんにまで情報が流れていると、ということは、教室に戻るやいなやひゅうひゅう攻撃は覚悟しなくてはならないということだ。思わずため息をついた。「あれは、あきょくんが悪いわけじゃないからね。これから、ゆっくりみんなに誤解を解いていかなくっちゃ。立村くん、あきょくんと仲いいでしょ。ごめんなさいと伝えてくれると嬉しいな」

「そういうんじゃなくつて、あの」

テレビドラマの臨終シーンを思い浮かべるよつた、末期の言葉。そんな雰囲気。かなり大げさだけど、真面目に話している以上は無視できない。彰子はもう一度首をかしげて耳を澄ませた。まだ保健の先生が受話器を離していないのを確認し、半身起こしてもう一度、「南雲は、本気だよ。隣りで見ててそう感じた。けど、今戻つたらまだクラスの中、妙な感じになつてるかもしれないんだ」

言つている意味がわからない。じつと聞く。黙りこむ。立村くんが咽奥であえぐように、必死に何かを伝えようとしているのだけがみしみしと、染みてくるだけだった。

「だから、奈良岡さん、しばらく大変かもしれない。けど、俺がクラスの方はなんとかするから、とにかく南雲と、直接話した方がいい

い。大丈夫だから

クラスの方はなんとかするからって、立村くんが？

はつきり言つと、彰子には全く理解できない言葉の羅列だつた。立村くんが真剣に、彰子へ何かを訴えているのは読み取れる。南雲くんと仲が良いといつることもあつていろいろ気を遣つてくれるのもわかる。しかし、なぜそこまで言おうとするのか。確かに、理科の実験が始まる直前に見た女子たち、男子たちの言葉には打ちのめされた。特にC組の女子が口にした「いるだけでいや」という言葉。自分をすべて否定された、そんな重みがあつた。だから逃げ出してきた。南雲くんに押し付けて保健室に避難した。

でも、それは彰子の責任であり、決して誰のせいでもない。

彰子はただ、自分で覚悟を決める時間がほしかつただけだ。

南雲くんがどうして自分に「告白」めいたことをしたのか、それはわからない。

もしかしたら本気なかもしれないし、もしかしたら別の事情があるのかもしれない。どちらにせよ彰子は南雲くんを「あきよくん」と呼ぶことに変わりないだらう。教室に戻るとこには、南雲くんと改めて顔を合わせること。もう一度、自分のどじがまずかつたのか、どうしてほしいのか、話そうと決めていた。

なにも、立村くんが心配してくれることはないのだ。

どうしてそんなことまで気を回してくれるのだろう。いくら一年D組の評議委員だからといつても、少し干渉しそぎなのではないだろうか。もちろん立村くんが人一倍思いやりのある、やさしい子だといつのはクラスメートとしてよくわかるつもりだ。男子たちが立村くんを、羽飛くんや南雲くんよりも支持しているのにはその辺にも理由があるのだろう。

どうしてもわからない。立村くんの言いたいことが、彰子にはわからない。

唯一、受け止められることだけ、お礼を言おう。

「ありがとうね。立村くん、やさしいんだね」

めまいがひどいのだろう。彰子の言葉が終わると同時に立村くんは田を閉じた。臨終です、と言いそなのりだった。いつのまにか後ろに保健の先生が立っていたのに気づいたらしく。

「ほら、立村くんなあに、奈良岡さんを口説いてるのよ。ほらほら、無理しないで。氷枕で頭を冷やしなさいよ。全く、思春期なんだか無理しないで。氷枕で頭を冷やしなさいよ。全く、思春期なんだか無理しないで。氷枕で頭を冷やしなさいよ。全く、思春期なんだか

ら

彰子に田配せで、「早く行つた方がいいよ」と合図する先生。きっと先生も、立村くんのように氣の回りすぎる男子は苦手なんだろ。好みのタイプはさつぱりきつぱりしたサーファータイプ、と話していたことを思い出し、彰子は笑いをこらえた。

天井の揺らめきは、ほのかに続いていた。

階段の踊り場で二回、もう一度一年〇組のドアでラジオ体操形式の深呼吸を繰り返した。

さあ、行くぞ！

「」と隙間から顔を覗かせた。班ごとに机をつけたままだった。マグネシウムリボンのこげた匂いやアルコールランプ使用後の臭さがいっぱいだつた。日常的理科室実験室の匂いだろう。空気入れ替えしたいなあと誰もが思つだらう。

彰子に氣づくや否や、一気に女子たち、男子たちがざわめきたつた。もう戻ってきたのか？ という疑問の雰囲気ではない。そこにはにがあつたかを探ろうとする、ねめつとしたべたつきを感じる。特に女子たちの視線は、友だちとは違う別のものを見つめているようだつた。「奈良岡、具合よくなつたか？ めずらしいなあ」

「ご心配おかけしました！ もう大丈夫です！」

わざと明るく答える。自分の席に戻り際にちらりと南雲くんに田を向けた。向けなくてもぴたつと合つた。隣りの席が空いたままのは、立村くんがいるから。南雲くんは無言でじつと、彰子を見詰めていた。

「やだあ、見てるよ見てる」

「つたく、南雲もやるよなあ」

幸い、彰子に対しての「ブス」「デブ」攻撃は一切なかつた。すでに終わつた実験の後始末を彰子は引き受けた。後ろから水口くんが、泣きそうな顔で手を振つてゐる。振り返してあげるのはいつものこと。少なくとも彰子だけは、今までと同じに振舞つたつもりだつた。羽飛くんが反対側の席から、機嫌悪そうに南雲くんを見つめているのにも気づいた。やはり相性が悪いんだらう。

授業が終りもつて一度、おぼんにアルコールランプを持つていつた。たまたま隣り合わせになつたのは羽飛くんだつた。南雲くんと同じ視線を向けられるかと思つたが、違つた。

「奈良岡、ひでえめにあつたな。ほんつと、災難だよな」

はつきりと、聞こえるように羽飛くんが言い切つた。

「え？」

「やり方がきたねえよな、南雲もな」

もしかして、氣にしてくれてるのかな？

思わずときめいてしまつたけれど、すぐに消えた。

「氣のない相手をからかうなんて、男として最低だぜ。いいか、奈良岡、これ以上なにかされたら、俺たちが『紳士として』奴を許さないからな。めげんなよ」

「はとば、くん？」

じゃあな、と羽飛くんは勢い良く彰子の背中を叩いて、おぼんを運んで出て行つた。

たぶん背中に手跡がのこつてゐるかもしだい。けど、ちつとも、痛くなかった。

あと一時間だけ授業が残つてゐた。六時間目は国語だつたが視聴覚教室にて「明治文豪の歴史ビデオ」で時間がつぶれるはずだつた。二階へ教科書だけ持つて移動した。立村くんはまだ眠りつづけてゐらしかつた。姿はなし。

「彰子ちゃん、彰子ちゃん」

周りに同じクラスの女子たちが集まつてくる。やはり聞き出したかったのだろう。自分が反対の立場だったらきっとそういうだつて、彰子も思う。腹なんて立たない。ただ、羽飛くんが南雲くんへ見当違いの怒りを向けているようすが気になつてゐるだけだ。

カセットレコーダーがセシットされている机に、テープを押し込んで、彰子は振り返つた。

「さつきびつくりしたでしょう」

「そうよね、彰子ちゃん、驚くよねいくらなんでも」

「おなか痛くなっちゃうよね」

口調はどこか慰めの一コアンスあり。やはり保健室に向かつたのは、いろいろな誤解を招いてしまつたのかもしない。クラスの子たちがどのくらい本当のことを見つけているのかはわからないけれど、少なくとも女子は彰子のことを嫌つていないうらしかつた。ほつとして彰子も口を開こうとした。

みんな、ありがとつ。心配してくれるなんていいクラスだよね。二年D組つて。

「でさあ、彰子ちゃん。私思つんだけど」

突然声をひそめてひとりがかがみこんだ。周りの子たちをこいこいと集めた。

「ほら、南雲くんの前の彼女、C組にいるでしょ。あの子の友だちから聞いたんだけどね」

顔は見たことがある。髪の毛がショートで、目がまん丸で可愛い子だつたつけ。

「南雲くんつて、遊び人に見えて実はすつじく家族思いなんだつて」

それは前から知つてゐる。おばあちゃんつ子らしことも、向こうが良く話してくれていた。

「彰子ちゃん、知つてゐるんだあ。そつそつ、おばあちゃんのことすつじく大切にしてるんだつて。でねえ」

廊下側に南雲くんたちが席を取つてゐる。男子たちの群れもビニ

となく半分に色分けされているようすだ。遠くから水口くんがおろおろと、彰子へ手を振つて合図しているが、無視するしかない。

さりに小さい声だつた。みな耳を膨らませている様子。

「で、南雲くんのおばあちゃんつて心臓が悪いらしいよね。知つてる？ 彰子ちゃん」

聞いたことがある。頷いた。

「だから、前から病氣のことについて誰か詳しい人いないかなとか、話していたんだって」

想像はつぐ。見た目よつもずつと、あきよくんはやさしく手に消した。

大きく頷いた。ゆづくつと、語る子ひとつ、にやつと笑い、すぐ

「私、彰子ちゃんのために言つただけど、あつと南雲くんは、彰子ちゃんにおばあちゃんの病氣とかそういうことを相談したくて、それで、告白した振りをしたんだと思うんだ。これ、この組の女子たちもさつき話してたんだ。だつて、そうでなければ、考えられないもん。彰子ちゃんになんで、いきなり南雲くんが変なこと言い出すのかつて！」

頷くしかなかつた。ばかにされたなんて思わなかつた。ほんと、それが一番しつくりくる、考え方だつた。そつと南雲くんのグループがたむろう廊下側席を見やると、じつと視線を向けてくるのがわかる。優しく受け止めて、返事をしたかつた。

あきよくん。きつと、そつだよね。

言葉の響きは確かに、「付き合つてください」だつた。

もしそうだとしたら、彰子はどう答えていいのかわからなかつた。でも、もし、南雲くんのおばあちゃんに何かしてほしいからという理由が隠れているのならば。

私は、あきよくんと友だちでいられるはず。付き合つとかなんとかつてことじやない。

「せうよね、彰子ちゃん」なら、正攻法で相談すればいいのにね。  
どうしてこきなり告白なんてわざとらしいやり方するんだろ? うね。  
納得いかないよ。ね、彰子ちゃん。これは抗議すべきだよ。せうき  
羽飛もすい君も、他の男子も信じられないって顔してたもん。立村  
くんなんかいまだに貧血起にしてひっくり返ったまだもんね。ほ  
んつと南雲くんつて真面目でいい奴だと思ってたけどね。いくらな  
んでも彰子ちゃんに告白のまねなんてして、利用しようとするなん  
てねえ……」

女子たちの会話はまだ続いている。みな、勢いづいて南雲くんの  
ことを誇っている。それに加わりたくはなかつたから何度も、  
「うひん、あきよくんは私を利用しようだなんて、絶対思つてない  
よ。でもそれならそれで私はかまわないもの」と  
と言い返したけれども。

「だって、そうでなかつたらなんで南雲くんが彰子ちゃんに付き合  
いかけたのか、説明つかないもんね」「  
やつぱり、そつか。そうだよな。

顔をかみ締めてじつと見つめる視線をほおに感じながら、彰子は  
うつむいた。

南雲くんとはあれから話をしなかつた。視線だけの訴えだけだった。

向こうは掃除当番だったし、彰子はすぐに保健委員会に出かけなくてはならなかつた。別に無視したわけではないけれども、泣きついてくる水口くんの面倒も見なくてはならなかつた。非常に信じがたいことだが、水口くんもしばらく、「一緒に解剖してくれないかもしぬれない」と周りの男子に脅されたとかで、何度も「週刊メディアカルイン」のバックナンバーを丸めて叩いてよこした。『両親の読み終わつた分だらう。

頭を撫でなだめているうちに、今度は立村くんが戻ってきた。さすがに掃除はさぼつたらまずいと思つたのだろう。だまつてごみ箱を片手にぶら下げ、南雲くんへ廊下に出てゆく声をかけているのが聞こえた。

保健委員会でも、帰り道でも、すれ違つ女子たちみなに言われる言葉は、

「彰子ちゃん、大変だつたよね。でも大丈夫だよ。きつと何かの間違ひだからさ」

だつた。

「そうだよね。きつとそなんだよ。でもね。

男子たちだけが無言のままでいるのが意外だつた。女子たちの態度の方がはるかにあつけらかんとしているのは、ふたりの間のストーリーが見え見えだつたからだらう。

彰子に南雲くんが大真面目に告白したといつのは本当のことだ。嘘はないと分かつていてる。

でも「彰子ちゃんと付き合いたい」「ホール、彰子ちゃんのこと

好きで好きでなんない」とこいつとではないと思つ。

他の子たちが言つよつに、

「きつと南雲くんは彰子ちゃんと、もつと真面目な話をしたかつただけだわつ。付き合いたいとこりのはその場ののりに過ぎず、額面どおり受け取つたら今度は彰子ちゃんがもつと傷つくることになる。だから誤解を解いてあげなきや」

一番近いような気がする。

何よりも、南雲くんの祖母にあたる人が、循環器系の病気を持つているといつのは、一年の頃から聞かされて了一ことだつた。

そうだよ、あきよくんのおばあちゃん、動くことはできるけれどもいつもベットに横になつてゐるつて聞いたよ。心臓だけじゃなくて、難聴、白内障、その他いろいろなところが悪くなつてゐつて。だからあきよくんは学校帰りに、自転車でいろんな病院を回つて薬もらつてゐるんだつて。偉いよね。でも、確かにそうだよなあ。おばあちゃんの病気の具合つて、なかなか同じ年の友だちに話してもあんたなに?つて言われそつだもんね。心配なんだよきっと。だから、私と。

一番納得いく答えたつた。でもその陰に、髪のモ一本程度の違和感が残つていた。

そうだよね。私の「」面相じやあ、ふつうそう思われるよね。一年D組の王子様だもんね。並んだら、私つてば護衛の人みたい。

自転車で家に戻り、誰もいない部屋でクラスの集合写真を開いて眺めた。

去年の遠足写真だつた。みなブレザー制服姿でそれぞれ並んでいるけれども、一枚だけ羽飛くんと隣り合つたものが真ん中に張られていた。趣味だ。もちろん他の男女子も混じつてゐるけれども、わざやかながらの主張。

なんか私つてつりあい取れないなあ。わかつても。

別のアルバムを開くと、そちらには小学校六年の修学旅行写真がいっぱい並んでいた。台紙に八枚、キャビネット版で並んでいる。フィルムの重なる面積が少ないので、実質写真を保護する役割を果たしていない。べつとめくれたまま落ち着いた。

ナツキー、時也、その他の男子たちとそれぞれツーショットがたくさん並んでいる。女子もいるけれども、みな男子たちの表情は笑顔だった。肩を組んだりしているものもある。彰子はひたすらにここにこしている。クラスには美人さんもたくさんいたのに、どうしてみんな男子たちは彰子に懐いてくれたんだろう。

結論は見つからなかつた。

彰子はもう一度、青大附中バージョンのアルバムをめくり、南雲くんの写真を探してみた。あまり気にしていなかつたからどういう顔をしているか覚えていなかつた。真ん中で人懐っこい笑顔を振り撒いていることには変わりないが、周りに映る女子たちがつんと澄ましてているのが目立つっていた。一緒にけらけらしているのは彰子くらいのもの。

いわば、小学校修学旅行バージョンの彰子と南雲くんが入れ替わつたようなものだった。

こう言う時相談するのは、全く青大附中の内部事情を知らない友だちに限る。

さつそく三人に電話をかけてみることにした。

最近全然連絡を取っていないけれども大の仲良しばっかりだ。父の担任している子は、いない。話す内容はひとつだけだ。

「今日ね、クラスの仲良しの男子にね、付き合つて欲しいって言われたんだ。ううん、きらいじゃない子だよ。すつごくやさしくて思いやりのある子。見た目は『パール・シティ』のボーカルに似ているんだけど、家族思いなんだつて。嫌いじゃないんだけど、ただ、付き合うとか付き合わないとか、そういうことをその子相手に一度も考えたことないのよね。どうしよう。どうやって、返事すればいい

「と思つへ。断つて友達付き合ひできなくなるのはこやだよ。仲良しでやつぱりいたいもん」

やはり女子同士が一番相談しやすいと思つ。

三人とも電話で捕まつた。塾に行く直前だといつことで、ゆつくりと説明はできなかつたけれども、三人それぞれが素直な感想を述べてくれた。

彰子ちゃんは小学校の頃からもてだつたからねえ。やつぱり青大附中でベタぼれされるのは時間の問題だと思つてたよ。今度その彼の写真見せてよ。「パール・シティー」のボーカル似? すつじく美形じゃない! いいなー、彰子ちゃん、絶対それOK しなよ。

奈良岡さんは真面目な人だから悩んでるんだね。私だったらあつさりと付き合つてみちやうけどなあ。きっと相手も深い意味もつて付き合つてつていつてるわけじゃないと思つよ。もともと友だちだつたんでしょ。今、そう思えなくとも、一応彼氏彼女になつてみれば、ね。ああ、でもいいなあ。「パール・シティー」かあ。超かつこよすぎ。

私思つんだけど、人は顔で決めるもんじやないと思つんだ。もし「パール・シティー」似の彼が本気で彰子のことを好きだつたら、外見なんて気にしないでアタックしちゃうと思つよ。でも彰子はまだいまいちなんでしょ? つていうか、夏木のことどうするのよ。夏木、今だに「花散里の君ファン俱楽部会長」やつてるよ。好きでないなら断る、好きだつたら付き合つ、これだけでいいじゃない。ただし、付き合つんだつたら夏木の怒りは覚悟すべきね。以上!

好きになつてもらえる要素はある、つてことだらうか。気づいて

はつと赤くなる。ひとつで困惑。

やだなあ、やつぱつ私って性格が悪いなあ。

あきよくんが好きになつてもらえるよつないといつりがあるつて、無意識のひりに信じ込んでたんだもんなあ。ロ組のみんなが言ひとおりあきよくんはただの友だちとして、「付き合」たいつてことだと、理屈ではわかつてゐるんだけ。でも、他の子たちの言つとおり、私のことを好きだつてことになるんだつたら……ちよつと嬉しいつて感じたりする。

自分のことを認めて欲しいなんて、ああ、なんかいじましくなあ。私。

もし、告白してきたのが羽飛くんだとしたらどうしてただひり。改めて考えてみる。ただ素直に、ありがとうと言えただろう。なぜ南雲くんなのだろうか。全く、恋愛の対象外として扱つてきた男子が、いきなり豹変して想いを告げるといつのは。よくしていいのか悪いのか、それ以前に自分は羽飛くん以上に南雲くんのこと好きになれるのか。いやいやまだいうなら南雲くんは本当に彰子のことを好きだと想つてゐるのか。周りの意見を聞けば聞くほどわからなくなつてきた。

彰子の本音は「今までどおり、消しゴム忘れたらあげちゃひへり」といの仲良し」どころだけでいい。

でも南雲くんは、「友だちだなんて思つてねえよー」と断言した。彰子の求める甘つたるいぬるま湯づきあいでは満足できないといつことだらう。あくまでも、南雲くんの言葉を五パーセント信じれば。

夕焼け空が黒っぽくなるまでずっと、ベットの上で膝を抱えていた。シーツカバーがずれて落ちていた。そろそろ父に料理を作つてあげよ。時期が早いけれども、この前送られてきた海草入りそばをゆでてあげよ。解剖が必要な料理は、今の自分だと指まで切つてしまいそうで危険だから。

彰子は部屋から下りてなべにたつぶりと水を汲んだ。時刻は夜五時半をさしている。

電話が鳴った。父からだつた。

「彰子さん、悪いが今日は遅くなるからな。食事は用意しなくていいよ」

手短に切れた。急いでいるよつだつた。父の背後から気配がなかつたところを見ると、たぶん中学校の職員室からだらう。この時間帯でまだ動けないというのはきっと部活かなにかの付き合いだらうか。いつものことだしあまり詳しく述べかなかつた。一人分ゆでるまで良かつた。少し減らし、扇形にそばを散らした。きもちよくなべに納まつていく。ちよつと早いけどさつと食べよう。

と、同時だつた。呼び出し音が続いた。

「はい、奈良岡です」

ガスの火を見ながら出る。じほんと咳、またすすり上げる声。じゆるじゆる言つてゐる。

「あの、俺

「時也？ あれ、どうしたん？」

鼻水の音だけで判断してしまつ自分も自分だけ、ある種、時也のトレードマーク化しているのもまた確か。電話で判断する限り、薬が効いているとは思えない。咽にたんを詰まらせた風な声がした。

「奈良岡、今、お前、ひとりか

「うん。ちょっと待つてね」

まずは火を止めた。そばが伸びるかもしれないけれどしかたない。

「今、そばゆでてたんだ。でももう火止めたから大丈夫」

「今、塾

そうだつた。あのどぶりぶりお母さんの命で、時也は一年の頃から塾に通わされてゐるのだつた。

「あれ、じゃあ今、あんた授業中なんぢやないの？ まづいよ」

「まづくない。今から電話たくさん鳴らす」

「は？」

言つ意味がわからず問い合わせる。

「奈良岡のうち、留守伝入つてゐるか」

「入つてゐるよ。もちろん、けど」

時也はもう一度咳をした後、こつんと告げた。

「じゃあ、今から五回電話鳴るが、絶対に出るな。留守電かけたままだ。わかつたか」

偉そうな口調はくせなのだ。思わずほころぶ。

「はいはい、わかりました。何か、たくさんでるのかなあ」

答えず切れた。腑に落ちない点はあるけれども、ナッキーならともかく時也がそれほど深いことを考えているとは思えない。すぐに留守伝ボタンを押した。赤いランプがてかてか光った。

三十秒後、鳴りつづけた。本能でとつてしまいたくなるのをこらえ、彰子はそばをゆで直していた。幸いのびてはいない。水にさらして美味しくいただけそうだ。実は一人分、自分のためにこしらえている。母にばれたらまた怒られるかもしれないけれど、今日はなんとなくやけ食いしたい気分もある。

呼び出し音を五回鳴らして誰も出なかつたら自動的に留守番電話が作動する。後片付けが終わるころには五回目の電話も終り、留守電の入つてゐる合図のランプが黄色に変わつた。

いたずらだつたら、あとで時也に文句を言おつひとつ。

自動再生ボタンを押した。特製そばつゆをおちょこに移しながら利いていた。瞬間、手が震えてほんの少し、こぼれた。

時也、みんな……。

頭の中が、すうつとしてきた。回りがぼやけてきた。

あの、名倉です。今から奈良岡への伝言を、こいつこいつの男子一同から録音するから、ちゃんと、聞くこと。

受話器を置く音。連続再生。

あ、もしもし奈良岡さん？ お久しぶりです。いろいろ大変みたいだけど、がんばれ。じゃあ。

もつしー、彰子かあ。青大附中のバカ野郎どもにいろいろ苦労しているようだが、もしかしたら俺たちに言えよ。ナツキーだけじゃねえってこと、覚えとけよ。

彰子ねーさん、こんちは。相変わらず俺たちもやつてます。もしかんだつたら俺たちとダブルデートつて手もあるぜ。やばい相手はきつちりと俺たちがチェックしてやるからな。じゃあ。

三人の声は、聞くだけでわかる。小学校時代いっしょのクラスだった男子たちだつた。いつも、消しゴムや給食の揚げパンやプリンをくれた子だつた。中には彰子が仲を取り持つてカップルになつた子もいた。

最後に締めた声は、時也だつた。

以上。聞き終わつたらすぐに消すこと。先生に見つかれないようにすること。いいな。

そばが伸びてしまつ。そんなのかまわなかつた。何度もマイクロテープを巻き戻し、時也たちの声を聴いた。後ろからは「おーっす！」とか「授業はじまるよ」とか、大人の声が聞こえたから、たぶん時也の通つている塾からかけてきたものだとは思つた。でも、みんなが十円を握り締めて、たぶん赤電話からかけてきている。彰子の家に、一聲録音するためにだけ、かけてくれてている。どうしてなのかな、わからない。でも、時也がまとめて声をかけてくれたことだけは、確かだと思った。

時也、ありがとうね。私みたいな思い上がりつた子と友だちでいてくれるなんて、すごいことだよ。みんな、ありがとう。

自分の性格がすごぶる悪いことを思い知らされてついた時、あまりにもタイムリーだつた。みんなが味方でいてくれたこと。どうして、時也がそんなことしてくれたのかわからないけれど、彰子はただ「みんながいい人ばっかり」だと思い続けることができそつた。

そうだよね、みんな、私の身の回りの子はいい奴ばっかりな

んだもん。

そばをすすり上げながら食べた。たれを付けなくても美味しかった。留守電テープを消さずに、また繰り返し聞いて、泣いた。

約束どおり留守電を消した後、彰子は母からの電話を受けたりなりしながら後片付けをしていた。水の音とこっしゃこ、自分のことばと答えが出た。

あきょくんには、ちゃんと、友だちでこよつて「えよつ。ひよえよつ。もちろん、おばあちゃんの循環器系のことが心配だつたら、いつでも相談に乗るからつて。

まだ私は、あきょくんのこと好きだつて、言えないもん。  
「付き合いたい」つて言つくらい、言えないから。

あきょくんが利用しようだなんてそんなこと思つてないよ。  
みんな他の子たちは、私のご面相が不細工だから、心配してくれたけれど、きっとあきょくんなりの真実で、私に声をかけてきたんだつて、私は信じる。だから精一杯、きつちりと答えなくつちや。そして、ありがとうつて言わなくちや。

父が帰つて来たのは十時過ぎだつた。彰子が部屋に上がつている時にいきなり電話がかかってきた。ナッキーのお母さんからだつた。  
「彰子ちゃん、先生はいらっしゃいますか？」

恐る恐るという雰囲気。本当はナッキーとも話をしたかつたけれども、言葉の端々にまづいものが混じつている様子だつた。すぐに父へ渡した。父も無言で受け取り、何度も短い言葉で受け答えしていた。笑みはない。

「……はい、宗くんとは明日、ゆっくりと話をさせていただきます。はい、はい、はい。私の不行き届きで申しわけありません。この件についてまた、ゆっくりと」

ふだんは「ナッキー」と呼ぶのに、なぜ「宗くん」なのか。  
電話を切り終わつた後、彰子は尋ねた。

「ねえお父さん、どうしたの。ナッキーになんかあつたの？」

父は無言だつた。彰子をじっと見つめると、おもむりに、

「彰子さん、いいかい」

ひょわそくな父の言葉ではない静かな響きだつた。彰子も頷いた。テーブルについた。

「たぶんこれから、宗くんの周りが騒々しくなるだろ?。周りの友だちも、あの子のことを悪く言つ子が増えるだろ?。でもな、彰子さん」

「何があつたの・お父さん」

首を振つて、父はゆつくりと言葉を継いだ。

「外見や、目に見えるものや、そんなものだけで判断してはいけないよ。お前はあの子のいいところをみんな知つていてるから、それだけを信じてやってほしい。これから何を言われてもな」

「だから、具体的になにがあつたのかわからないと。今からナッキーに電話してみるのもだめ?」

首を小さく振り、観念したかのよう口を開いた。

「一週間の自宅謹慎だ。クラスの女子に手を挙げてしまい怪我させてしまつたんだ」

「ちよ、ちよつと! ナッキーが? なんでなんでなんで!  
さつき電話した時誰もそんな話してくれなかつた。時也も、誰も。口を数回動かした。言葉がなかなか出てこない。

「ナッキーは理由のない暴力なんてやらかさないよ! お父さん。知つてるよね。父さんのクラスでナッキーが時也をかばつていてこと。私もわからんけど、クラス大変なんですよ。父さんはナッキーのこと知つてるでしょ。先生になる前に、ナッキーの性格知つてるでしょ。ね、お願ひだから教えてよ」

父は沈黙したままだつた。ただ彰子を見つめて、頷いた。

「父さん、言わないんだつたら、私が聞くよ。ナッキーがどうするのかわからんけど、理由がわからんんだつたら、私だつてかばいよつないよ!」

止めなかつたのはきっと、父からのOKが出たということだらう。彰子は小学校時代の友だちでかつ、仲の良かつた女の子にもう一度電話をかけた。

「あ、彰子、『パール・シティー』の彼とはどうするつもり?」

「そんなのどうでもいいから、ナッキーのこと、分かつてることだけいいから教えてよ。お父さんも話してくれないの」

「なら先生、いるんだよね」

「いるよ」

友だちもやはり沈黙していた。彰子の背から父の気配が消えた。自分の書斎に戻つたのだろう。ふたりで話せつてことだらう。

「ううん、でも父さんいなくなつた」

ほつとした吐息が聞こえる。彰子は友だちの言葉が返つてくるのを待つた。

「誰がいいか悪いかなんて、わかんないからね」

頷いた。友だちに一人でしゃべらせておいた。相槌打つとめどがなくなつてしまいそつだから。だつてナッキーのことなんだから。

相変わらず夏木が名倉のことをかばつてているのは彰子も知つてるよ。たまたまその時に、夏木がかつとなつてその女子をひつぱたいたのよ。でも、まあねえ。そのひつぱたき方が本氣だつたんだ。拍子に頭を教壇にぶつけて、血が出てしまつて。その子のお母さんが文句をいいに教室に飛び込んできて、なら先生に食つてかかるんだ。その時、まずかつたなあとと思うんだけど、そのお母さんがね、夏木のお父さんのことについてきついこと言つちやつたんだよね。完全に夏木がぶつちぎれてしまつて、手に負えなくなつちやつて、あやうくそのお母さんに殴りかかりそうになつたんだ。

夏木の父さん、なんとかつていう右か左かの政治結社つていふところに入つてるでしょ。でほとんど、家にも顔出さないでしょ。みんな知つてるけど、これは暗黙のお約束つてことで内緒にしてるでしょ。でもそれを一気に、お母さんがまくし立てちやつたもんだ

から、もう騒然。あれは名倉をかばったんじゃないくて、夏木のプライドそのものの問題だったんじゃないかつて思つんだ。今の夏木は怖くて近寄りたくないっていうのもわかるよ。

彰子は受話器を置いた。

父が話さないのも当然だと思った。

小さい頃からナックキーが彰子の家に入り浸っていたのも、中学入学の時にあえて父が、自分のクラスに入れてもうよう頼んだらしいといふことも知っている。ナックキーの家が、彰子の知る限りかなりややこしい状態だということとも。もちろん、政治結社関係の問題でしおりながら警察のお世話になつてゐるらしいことも。

ナックキーは、ナックキーだよ。私はナックキーの味方だよ。

「お父さん、自宅謹慎って、別に私が遊びに行く分には問題ないんだよね」

階段の下から声を張り上げた。返事をもらひに階段を昇った。

「あした、ナックキーのうち行くなら、私も一緒に連れてつて。五時間で授業終わるんだもん。大丈夫、よけいなことなんて言わないから。いいですよ。お父さん」

ドアを開けて、父は彰子の頭を軽く撫でた。

ケーキにするか、それともクッキーにするか。母が帰つてくる時くらいまで彰子は迷つていた。ナッキーの場合、味がどうであると「食べればオッケー」だと言つていいから、特別に気を遣う必要はないのかもしれない。でもできれば、好みに合つたほうがいいではないか。結局、母に相談して、

「クッキーの方がたぶん、みんなで分けて食べられるからいいんじゃないか」

という結論に達した。夜中一時過ぎまで、たっぷりバターのきいたクッキー生地をこしらえ、冷蔵庫に入れた。学校に行く前に焼いておけばいい。

家中が香ばしいクッキーの匂いに満たされている。食事を焼きたてのクッキー六枚で終わらせたのは、とにかく後片付けが大変だつたから。ラッピングして、家に戻つたらすぐ出発できるように準備を整えた。

昨日は本当にいろいろなことがあった。

南雲くんには告白しきものをされてしまふし、時也はなぜか心配してくれて男子たちから愛のメッセージを送つてくれたし、ナッキーにいたつては、まさかの自宅謹慎。

ずっと悩んでいたことばかりだつたけれども、彰子にとつては最後の「ナッキー自宅謹慎事件」で一気に最重要課題が現われてしまつたという感じだった。正直なところ、南雲くんがらみで女子たちにさわやかれたことなんて、どうでもよかつた。

あきよくんとはいよい友達でいましょう、でいいよね。

なんか、ナッキーのことを考えると、私のちょっとしたことなんて、どうでもいいなって気になっちゃうな。ナッキー、どう

してだらつ。時也が電話くれたのは、その辺りにも事情があつたのかもなあ。

学校に到着した。鈍感だと自覚している彰子だが、なんとなく三年生方面からの視線が突き刺さってきた。いつもだったら「おはようございます!」と挨拶する程度なのだけど、いきなり向こうから、

「ねえ、南雲くんと付き合つてゐるの、

と聞かれるとは思わなかつた。

「いえ、あの、

も」も」と言葉を探すと、

「あ、ごめんね、そだよねそだよね、違うよね」と自己完結して去つていつてしまつ。彰子の場合、あまりいやがらせとかリンチとか、そういう恐ろしいこととは縁がないらしい。南雲くんが全学年の人気を博していることは、よくわかつた。

まずは保健室に向かい、先生に挨拶した。ちょうどソバージュをまとめてこむところだつた。鏡に向かつていたのだが、彰子が映つたのだらつ。すぐに振り向いて、

「奈良岡さん、早いねえ」

「昨日はどうもありがとうございました!」

ちょっと多めに焼いておいたクッキーを手渡した。

「先生こつそり、後で食べてね」

「サンキュー! 奈良岡さん家庭的なんだよねえ」

ちらつと見た後、彰子を手招きして耳にさせやいた。

「なんかねえ、昨日、三年の女子たちがパニックになつていていた理由なんだけど、聞いてあきれちゃつたよ」

「パニックなんてあつたんですか?」

彰子個人としては結構いろいろあつたけれども、他学年まではわからぬ。

「一年で人気のある男子がいるらしいんだけど、だれかに付き合いをかけてしまつたことがすぐにばれて、ファンの子たちがショック

を受けてしまつたらしいのよ。なあにが、ねえ。奈良園さん。クラスの男子たち見てて、そんな心ときめく奴いる？」

「一年女子の間では羽飛くんが圧倒的人気らしいけれども、そうか、三年は南雲くんなのか。彰子はさすがに言えなかつた。

「よくわからないけど、大変だつたんだあ」

「歳を取ればわかるのよ。男は顔じゃない、ハートだつてね」

先生もそれなりに恋していんだらつ。重みあるお言葉だつた。

廊下途中まではクツキーと一緒にハイテンションで軽やかに歩いた。でもさすがに、一年D組の教室へたどり着いた時には妙にフランクショバックしてしまつそうになつた。D組よりも、隣りのC組だらうか。やはり聞こえてくる。もともとC組は女子たちの力が強くて、男子たちがおとなしい。教室の前を通るたび、ぞわめくのは甲高い嬌声だ。

「……がねえ、あの太つた子」

「……絶対なんかの間違いだよね」

相変わらずの言葉が飛び交つてゐる。傷つかないわけじゃない。いつもボタンがはちきれそうになるジャケットを、そろそろ買い替えないままずいなとは思つ。

ま、いつか。あんまり暗い顔してると、あきよくんだつて辛いもんね。

気持ちを切り替えて、扉を開けた。

「おはよう！ あれ、すい君いたの」

ちょうど待つてましたとばかりに水口くんが立ち上がりつた。男子たちの集団はほとんど揃つていた。もちろん南雲くんもこちらを向いた。女子たちだけがそれぞれに、

「彰子ちゃんおはよ！」

と、いつものような声をかけてくれた。答えようとしたら、いきなり水口くんが飛びついてきた。まさに赤ちゃんそのもののりだ。

「ねーさんねーさん、学校やめないよね」

なぜ、すい君そこまで発想が飛ぶわけ？

頭を撫でながら彰子は答えた。

「やめないよ。でもどうして？」

「よかつたあ、それならいいんだ」

ぴょんぴょん飛び回って喜ぶすい君を誰もからかう奴はない。いつのまにか近づいていた立村くんが水口くんの肩を叩いて、「そ、すい君席に戻ろうな」

と促している程度だった。男子たちも、またやつてるかとばかりにちらりと見るだけだった。南雲くんだけが黙つて彰子を見つめているのが分かる。同じく隣りの席に付いた立村くんが、朝自習のプリントを開いて何か尋ねている。どうやら、数学の文章題が載つているらしい。

朝びっかりの天気は昼間過ぎると一気に下り坂とはよく言つたもの。授業が終わる頃には雷が轟きしばらく外は黒い雲に覆われていた。傘は持つてきているけれども、きっと折れてしまいそうだった。

「しゃあねえなあ、雨宿りしてつか

帰りのホームルームが終り、それぞれが教室を出るのを見計らつて、彰子は声をかけた。南雲くんがまだ、無言で座り込んでいる。いつもだつたら男子同士の仲のいい連中と、レコードを片手にまだしゃべつているのだろうが。たぶん、昨日のことでからかわれたかなんかしたのだろう。表立つての悪口やひがみは聞かされないけれども、それは彰子が一年D組にこもつていたからだ。元の彼女がいるC組からも顰蹙は買い捲つているだろうし、もつというなら三年生グループもかなり、衝撃を受けているはずだ。告白された彰子よりも風当たりが強いのは想像がつく。

でも、きちんと言わないと。

あきょくんとは友だちですらもいられなくなるからなあ。

まだ教室には何人か男子がたむりつている。

「あきょくん、ちょっといい？」

改めて、でも笑顔は忘れないようになつた。彰子は顔を覗き込んだ。

「奈良岡、さん。俺、さ」

「いいから、ちょっと隅っこに来てください」

お願ひする時はきちんと敬語を使うこと、彰子のお約束だ。

窓辺の隅に立ち、彰子はもう一度南雲くんの顔を見上げた。こうしてみると、結構背が高いらしい。羽飛くんと同じくらいだ。「パール・シティー」のボーカルよりはもちろん低いだろうけれども、背景の黒い雲を通して見ると、いかにも舞台受けしそうな雰囲気だ。ネクタイはきちんと結んでいる。髪型も今日はあっちつとまじまつている。ちつとも、だらしなくない。

「あきよくん、あのね。私」

ここで息を継いだ。今まで視線をきちんと向けていなかつたから、その分たっぷり見つめ返そつと決めていた。

「昨日のこと、私はすごくうれしかつたよ」

「え、じゃあ、いいの？」

いきなり緊張していた表情が笑顔に変わる。まあまあ押さえてと

彰子は首を振つた。

「でも、今私はまだ、あきよくんを友だちとしか思つてないんだ。なんていうか、私は男子と『付き合つ』つてこと、一度もしたことがないんだ。だからなおさらなのかな」

「でも今は、好きな奴いないんだろ？」

だんだん彰子もわからなくなつてくる。ちらつと、羽飛くんの顔が浮かんで消えた。好きつてわけではないのだと、思い直す。

「小学校時代の子で大の仲良しつていうのはたくさんいるんだよ。でも、まだそういう気持ちになれないんだ。あきよくんがしてほしいような付き合いつて、私、赤ちゃんだからわかんないんだうなあ。身体と頭がつりあつていらない典型的な例かもね」

ちょっと自虐的なことを言つてみる。

「そんなことねえよ。あのわ、奈良岡さん、俺のこと、嫌いじゃな

いんだよな。それだけはほんとだよな。あの、驚かせてしまったのは本当に『ごめん、つて感じなんだけ』

妙に力がこもっている。身体を斜めに傾け両手を握りしめている。

彰子の中で、周りの女子たちの言葉を信じなくてもいいという実感が湧いた。大丈夫。この子とは友だちでいられる。よかつた。

「そうだよ。私はあきよくんのこと、友だちとして大好きだよ。もし、あきよくんがクラスの中で問題起こして自宅謹慎になつたとしたら、すぐにクッキー持つて駆けつけるし、電話であきよくんのファンの子たち集めて、電話で励ましの声を送つてあげる。そういう感じで、本当にあきよくんはいい子だと思うんだ。でも、まだ『付き合つ』つていうのがね、ピンとこない」

外の雨は激しい。窓ガラスをぬらしている。南雲くんはじつと彰子を見つめていた。言葉が返つてこない。

「きつとあきよくんには、私よりももっと可愛くて美人さんがたくさん好きでいると思うんだ。私なんかと付き合つとしたら、きつと大変だよ。並んでつりあい取れないし。私はこの顔と十四年間お付き合いしてるとから、ま、いつかと思つてるけど、あきよくんに迷惑をかけてしまうのはなんかやだなあ。だから、友だちとこいつことで、いかがでしようか」

後ろの方で一年D組の男子たちが、様子をつかがつている。ふたりつくりのところで言えばよかつたと思う。言い方は悪いけれども彰子が南雲くんを振つたという形にはなるのだから。

「奈良岡さん、俺の言いたいこと、言つていいか」

笑顔になつたり驚いたり、ありとあらゆる感情が顔の中を駆け抜けていた。彰子はそれを眺めていた。やはり、こういう気持ちいい表情にみんな女子たちは惹かれてはいるのだろう。

「いいよ」

「奈良岡さん、ぶつちやけた話、『付き合つた』経験、ないんだろ

は?と口をあんぐりあけてしまった。

?」

「ない、けど。だつてこの『面相』じゃあねえ」

「デートしたこと、手がないことも、ないんだろ」

「あるわけないじゃない！ もつ、あきょくんやだなあ。想像するだけでも大笑いだよ」

手つなぎ鬼をやるならともかく、俗に言つてデートなんて経験なし。少女漫画に出てくるような、夕焼けに向かつてキスとか、そういうのを言つんだらどうか。誰もいなかつたら腹抱えて笑い転げたいところだ。

「キスしたこと、ないんだろ」

口呼吸はよくないと分かつていても、彰子は完全に凍りついた。

口で呼吸するしかない。

「あきょくん、あるの」

「うん、経験はあるよ」

大人すぎる。うわあ、なんかすごいこと言わせちゃつたよ。

あやづく「ねえ、どうだつたどうだつた？」と聞いてしまいそうなのをがまんした。残つてゐる男子たちも同じく凍り付いているらしい。キス経験者、零だらう。きっと。

「うわあ、すごい」

「だから、俺は付き合つてゐるつてことのだいたいどんなものかはわかつてゐつもりなんだ。もちろん、いきなりなんて俺は言わないよ。でも、一度も付き合つたことないんだつたら、一度くらい、真面目にやつこうことしてみるのもいいと思わないか？」

「いや、あの、キスはちょっと」

「それは例えだつて」

笑い転げたいのを彰子は必死にがまんした。そりやあ、南雲くんは恋愛経験豊富だから、唇を触れ合わせることの一度や一度はあるだろうし、別にそれがどうとは言わない。だが、相手が自分だと想像するだけで、ほとんどギャク漫画の「コマ」にしか見えない。

「あきょくん、ごめん、もう限界。笑い死にそつ」

しゃがみこむとしばらく彰子は笑いつづけていた。困つたように

見下るしていいる南雲くんには悪いと思つ。でも、『うしょりもない。しばらく落ち着いたところで立ち上がり、もつ一度答へることにした。

「あきょくん、本当に好きな子に『うしょり』のは言つてあげなよ。私がそんなことしているなんて想像するだに笑えるじゃない」

「なにも『きなり』、キスだなんて言わないけど。でも、もし俺のことが嫌いじゃなくて、付き合つたことなくて、今好きな奴いないんだつたら、一度試してみませんか」

「試す?」

「わう。奈良岡さんが『友だち』として『うしょり』のがよかつたらもちろんそれに合わせる。とにかく一度、デート申し込んでいいつか

空気が湿つてくる。彰子は見竦められた。

「デートって、いつたい」

「今度の土曜午後、青鷗こども公園でどうでしょ?」  
また噴き出しそうになった。小学校三年生くらいの子しか喜びそうにないティーカップとか、あつとこつ間に終わるジオラマコースターとか、そういうのしかない。南雲くんだったらもつと、大人っぽいライブハウスだとそういうところに連れていかれそうだと思つたけれども、さすがデートなれしている。彰子の大丈夫そうなところを瞬時に選び取つたらしい。「あきょくん、うまいね。私の受けそうなところ選んだでしょ」

これだけ一生懸命言つてくれてるんだから、ね。友だちなんだから。みんな誘つて楽しく行きたいなあ。

顔に出たのを素早く読み取つたに違ひない。南雲くんは最後に付け加えた。

「でさ、デートっていうのは基本として、一対一なんだ。それだけ、お忘れなく!」

「別に、それでもかまわないけど、淋しくない?」

とんでもないとばかりに手を大きくふる南雲くん。彰子の見る限

り、すっかり「機嫌は元に戻ったようすだ。それだけが心配だった。数人の男子たちが沈黙で見送る中、

「じゃあ、詳しくはまたあらためて！ これから規律委員会あるんだ。最高ですよ。もう」

最後に他の男子連中へ「じゃあな」と言い残し、教室を飛び出していった。

「奈良岡のねーさん、あのなあ」

最初から最後まですべて目撃していた、男子のひとりが近づいてきた。なんとなく南雲くんグループの一派だった。一年D組の男子は大雑把に三グループに分かれている、羽飛くん、南雲くん、あと水口くんを中心とする派が並んでいる。ドライバーで髪が枝毛っぽくなっているところみると、どうみても南雲くん派だ。にやにやしながら寄ってきた。

「ああ言つてるけど、南雲つて結構まじな奴だぜ。あれでも次期規律委員長だもの」

「え、そうだつたつけ？」

初耳だった。相手も当然のごとく頷いた。

「うちのクラスで委員長がふたり立つってのも笑えるけどさ、でもいいんじやねえの」

「困ったねえ、あきょくんどうするんだわい。委員長になつたらもうおしゃれできなくなっちゃうよ」

「ねーさんさあ」

頭をかきながら大笑いした後、男子三人は手を振つて言い残した。

「人間は見た目じやねえから、そのへんよろしくな」  
なんか私のこと、誓めてくれてるのかなあ。

本当はお付き合いを断るつもりだったのに。なんか負けてしまった。

こんな気持ちよく笑つてしまえるなんて思わなかつた。

つきあうかどうかは別として、今週の土曜日は彰子にとつて初めて

ての「デート」になりそうだった。

だからみんなで行けばいいのになあ。あきよくん。

彰子はすばやく頭を切り替えて、校門へ急いだ。駆け出した。外はすでに黒真珠色。雷が鳴り響いている。でも帰らなくちゃ。南雲くんと話している間は忘れていたけれど、もつともつと大切なことが待つている。

ナツキー、『めん。今行くからね！

びしょぬれで家に戻り、髪を乾かした後、大急ぎで冷蔵庫からクッキーの残り生地を取り出した。焼きためたものは缶に入っているけれども、やはり焼きたての方が美味しいだろう。すばやくオーブンに油を引いて準備をし、火が入っている間にラッピングの準備をする。母のお気に入りブランドで配っている花柄の包み紙を拝借し、口が花びらのように見えるべくぎざぎざに切る。焼き上がるころには完全にお誕生日モードのプレゼントが完成した。

母は昼から学会があるとかで、出かけていった。半分クッキーがなくなっていたところみると、他の先生や事務室のみなさまに配るのだろう。

しかし、全く電話は鳴らなかつた。

父にもしつこく「絶対行く時は電話してね」と釘をさしておいたのに。

あいまいに頷いていたから忘れてしまつたのかもしれない。

それとも会議か何かで忙しいのかもしれない。とにかく彰子は待つことにした。ちゃんと制服を干して、カレンダーの「土曜」に丸を付けた。

待てども暮らせど連絡は来ない。

待ちくたびれて新聞を読んだり、テレビを見たりしているうちにソファーで軽く居眠りしてしまつたみたいだ。気が付くと、電話

が鳴っていた。赤ランプが点滅していた。

「彰子さんか？」

やつぱり父だった。忘れていたらしい。

「お父さん？」「

電話の向こうがやけに騒がしい。女の子が泣き叫んでいる声はたぶん、ナツキーの妹だろう。修羅場なのかもしない。様子を聞きたかった。

「私、行くけど大丈夫？」

「今から時也が迎えにいってくると言つてる」

「ちょっと、時也もいるの？」で、ナツキーは？「

父はしばりく無言でいたが、口の中をちかちか鳴らして言つた。

「彰子さんに、聞きたいことがあるんだそうだ」

がしゃつと受話器が千切れそうな音。耳が痛くなりそう。だれかが受話器を取り合っているのかもしれない。耳に当たたま待つた。はつ、はつ、息遣いが荒い。

「おー、彰子いるんだろ？」

「ナツキーじゃない！」

あれだけ心配させたくせに、声が明るすぎる。クッキーの匂いに包まれて思わず涙が出そうになる。いつも通りのナツキーだ。自宅謹慎なんてへとも思っていない、正義感強いあのナツキーだ。

「とにかく、すぐ来い！俺もお前が戻つてくる前にけりをつけるからな」

「けり？」

電話の向こうが父に代わった。何度かナツキーの「なら先生、わかつた。うん」と話し掛けた声だけが聞こえている。

「詳しいことはついてから話すよ。それと時也の分のクッキーも、貰れるなよ

もちろん貰ってはいけない。彰子は受話器を置いた後、大至急包み紙をそろえた。

時也が到着したのは十五分後だった。自転車が雨のために使えないというのを考えると、そのくらいかかるだろう。急いでてきたのかもしれない。口ではあはあ呼吸をしている。白いラインの入った学生服姿だった。

「今から連れてく」

それだけ言つと、また鼻をかんだ。

「ほら、ポケットに詰め込んでる分、うちで捨てていきなよ」

ためらつているのを彰子は素早く取り去つてやつた。かわりにクッキーの袋を詰め込んだ。

「今、焼きあがつたばかりなんだよ。あとで食べようね」

「母さんのと同じ紙」

つまり、時也のお母さんも大好きなブランドの包み紙だといいたいらしい。傘を持って彰子は並んで歩いた。

「昨日、電話かけてくれて、ありがとな。うれしかったよ

「奈良岡に聞きたいことがある」

「なあに?」

表情が硬く険しいのに気づいたのは、横から覗いた時だった。  
「変な奴に変なこと言われたのは本当か」

「変な奴?」

一瞬、ぴんとこなかつた。

「塾の女子が言つてた」

「ちょっとちょっと、もしかしてみんな、あのこと、言つづら  
してたなんて言わないよね!」

思い当たるふしある。もちろん、南雲くんとのあの事件だ。  
でも、三人にしか話していない。青大附中に通つてゐる子もやつ  
いないはずだ。

「信じられないって話してた」

「なにが? その変な奴に私が変なこと言われたことが?」

心がまた、冷たく濡れていぐ。時也はじつとこりみつけるよつこ  
続けた。

「『パール・シティ』のボーカルって、あいつだろ？」「は？」

「夏木にも言った」

今、出かけた時に言ったのだろうか？　話が見えてこなくて彰子はもう一度聞き返した。

「夏木に、奈良岡が変な男に追いかけまわされている」と、部屋の前で言った。そしたら、すぐに連れてここへ命令した

「はあ？」

最後にとどめ。

「今、うちに夏木、なら先生と一緒に、殴った女子の家に謝りに行

くつて言つてた。だから先に食べていいと思つ

混乱、しちゃうよ、時也。どういうこと？

時也の武士を気取った口調が、似合わない。

「何を？」

「これ」

ポケットを指差した。クッキーを早く食べたい、とこづかひじい。

時也の、ぶつ切れ言葉をつないでいくと、大体状況が見えてきた。すなわち、担任の奈良岡先生は放課後、まっすぐ生徒夏木宗の家に向かつたらしい。彰子を連れて行くという約束はあっさり破つてだ。なぜか時也もついてきていたがその辺のつながりは説明してくれなかつた。

夏木家に到着してみると、そこにはナッキーが部屋にこもつたまま出でこないとのこと。そりやそりや。お母さんも妹の明日香ちゃんと一緒に氣をもんでいたところ。

「でも、言つこと伝えないとあとで、夏木に怒鳴られる」「何を言つたの？」

時也の表情は変わらない。寡黙そでがつちりした、いかにも柔道やら剣道やらやつりそうな身体つき。武士に一言はなし、と言いた

げだ。

「奈良岡に一大事が起こった。つて」

「私に何が起こったってこと?」

ひたすら質問ばかりしている自分にあきれながらも彰子は尋ねた。

「青大附中で奈良岡が大変なことになつたつて言つた」

時也は立ち止まり、じつと見つめて、

「ナッキー、それ聞いてふすま開けて飛び出してきた。なら先生に、すごい勢いでくつてかかつてた。それから、謝りにいくつて言い出した」

「あやまるつて、ナッキーがけがをさせた子に?」

「絶対悪いことしてないから、あやまらないつて言い張つてた。でも、心境の変化あつたみたいだ」

棒読みで、音読するように時也はつぶやいた。

彰子はそれきり黙つた。

時也のポケットにもう一枚、ポケットティッシュを入れてやつた。クッキーの入つていない反対側のポケットにだつた。

やがて田の前に長屋風の木造住宅が見えてきた。だいぶ色あせたその家は、入ると奥に広く決して貧乏くさい雰囲気はしなかつたこと。ただ近所の家と違うのは、祝日でもないのに年がら年中日の丸の旗が立てられていることだけだつた。

六畳の部屋に、四角い漆塗りの机がでんと居座っていた。ナツキーのお母さんがほつとした表情で彰子と時也を迎えた。とりあえずは、丸く収まつているらしい。

「彰子ちゃん、雨の中、つちの馬鹿息子のためにありがとうね」

時也の肩がずぶぬれなことに気づいたらしく、すぐにタオルを持つててくれた。

「時也くんも、本当に、ありがと。で、風邪引くからどうだ」

明日香ちゃんの気配はない。彰子はまず、明日香ちゃん用にこしらえたクッキーの包みを差し出した。

「今、ちょっと興奮気味だったから寝させたの。やつと落ち着いたところなの」

ナツキーのお母さんはきっと、彰子が何から何まで分かつていると思つてゐるのだろう。話をあわせるにこして、まずは机の端にふたり並んで座つた。部屋のあちらこちらに、日の丸を背負つて腕組みしている学生服姿の男性写真が飾られている。ナツキーのお父さんだ。非常におつかない人だと周りでは言つけれども、彰子の知る限り「一月に紅白のお饅頭を持ってくれる、やわしこおじさん」という印象が強い。ナツキー曰く、「

「また捕まつちまつたんだよなあ、うちのおやじ」

とぼやいてたりもするけれども、別に主義主張が違つてたつてい人はいい人なんだもの、いいじやないかと思う。現在は、政治結社の関係で遠征かなにかをしてゐるらしい。詳しいことはわからない。

「ナツキー、大丈夫だったんですねか？」

まずは心配だったのと、出してくれた大福餅をいただきながら尋ねることにした。

「「心配かけちゃつたみたいね。わざまで宗もずつと部屋にこ

もつていたんだけど、時也くんが説得してくれて、なんとか、ね  
時也を見てにっこりと微笑む。体型がつちりした時也が軽くうつ  
むいて頷く。

「時也が説得したの?」

「そうなの。彰子ちゃんのお父さんと一緒に時也くんが来ててくれた  
ね、いくらしても宗が出てこなってことで、部屋の前まで説得に  
行つてくれたの」

「説得した、わナジヤ、なニナビ

からからと笑つお母さん。息子が自モ謹慎してこる身とは思えな  
い。

「彰子ちゃんがピンチだから出ておいで、つてね。宗とつて彰子  
ちゃんはお姫さまなんだなあつて思つちやつたわよ。あの馬鹿息子  
もやはり、好きな子には弱いのねえ」

好きな子? まあいいけどナツキー、なんで?

今ひとつぴんとこなくて、彰子は相槌を打ちつづけた。隣りでじ  
つと見つめていた時也は、彰子が渡したクッキーを取り出し、いき  
なりパクパク食つ始めた。人のうちでそれをやるものひとつとな  
彰子は思つたが、まあ自信作のクッキーだしいかと思つて直した。

「ね、おいしい?」

「もつとほしー」

それだけ答えた後、時也は花柄の袋に手を突つ込んで、ひたすら  
食べつづけた。袋が空になつた頃、もう一度玄関がざわめいた。

「かあちゃんただいまー」

甲高い声。ナツキーだ。

「しーー、明日香やつと寝たといなんだから。ほら示、彰子ちゃん  
いるわよ

玄関で迎えるお母さんの声がする。時也と顔を見合わせて、彰子  
はすばやくもうひとつ袋を用意した。ナツキー用のクッキーだ。  
父もいた。一緒にずぶぬれになり戻つてきた。いろいろ考えると  
いろもあるのだろうが、何も言わなかつた。彰子を見るなり、

「おこしゃうだなあ。私にもあるかい？」

「じめん、父さんははつちにあるんだ」

非常に淋しそうな表情を見せた。まだ言い争う声がするけれども、さつと着替えるか、ぬれているの拭いてもらつていてるかしているのだろう。

よかつた。ナツキーいつもどおりだ。

白線が施された学生服姿。それも裾が長い。背が低いせいもあるけれど。

口を真一文字に結んでナツキーは、堂々と入場した。まさに「入場」そのもの。応援団が入つてくる時の雰囲気だった。おかしいのを感じるのに苦労した。

「なにはともあれ、彰子、ちょっと俺の前に座れ」

お母さんが慌てている。彰子を見るなり口調と田つきが険しくなつた。となりで父が困つたように彰子の肩を叩いた。まあ、言つ通りにしろつてことだらうか。

「失礼なこと言つんじやないの。あんたが頼んで彰子ちゃんにきてもらつたんだしょ」

「事実関係を確認するんだ。黙つてろ」

「ちょっと親に向かつて言つ言葉じやないでしょ」

「つむせえつたらうるせえんだ。母ちゃんは明日香のところ行つてろ。俺は彰子に話があるんだ！」

言い出したら退かないナツキーの性格を彰子もよくわかっている。「いいです。いいよ。ナツキー、真つ正面に座るからいい？」

細長い机を挟んで、少し戸口からずれた。父を時也の隣りに座らせて、彰子はナツキーの真向かいに座つた。ちゃんと、大福も一つ持つて。上座にためりつことなくナツキーが向い、じつと見下ろし、あぐらをかいた。ナツキー流に言わせると、あぐらは家長の威儀を示すものらしい。時也が心配そうに指をくわえて、なんどか鼻の下をこすつている。

大きく深呼吸した後、ナツキーは自分のお母さんに手でおつぱら

うじぐさをした。なかなか動かないのを無視して、次に彰子の父へ、「なら先生、これから俺が話すこと、全部聞いていいからさあ。まずは事実確認する。自分の娘のこと、少しは知つとけよ」

「うわあ、どうしようナッキー、全然しょぼくれてなんかないじゃない。もう心配した私つてばかみたい。ま、いつか。落ち込んでるよりもこうこうナッキーの方が、私は大好きだけどね。

父が苦笑いしつつも、時也と顔を合わせて頷いている。ある程度彰子の知らない部分を把握しているのだろう。彰子はあきらめてお白州の場に出ることにした。

「まず、ひとつめだ。彰子、お前、この前青大附中の変な奴に追いまわされてるつて話してたよな」

変な奴？

話が全く読めない。斜め前から時也が助け舟を出してくれた。

「耳鼻科で会つた奴のこと」

「追いまわされてはいないと思つなあ」

くすりと笑う父。思いつきりナッキーににらまれて黙つた。父も本気出したナッキーにはさからえないらしい。

「じゃあいい。次だ。彰子、その変な奴がお前にこの前ちよっかいだしてきたつて本当のことか？」

「ちよっかい？」

父がひたすら笑いをこらえている。まああと田で合図しつつ彰子はこたえた。

「ちよっかいつていうのかなあ。クラスで仲いい子がいてね、その子からお付き合いを申し込まれたつてはあるよ。一応断つたけど。でも」

「付き合いを申し込まれただと！」

時也とナックキーが同時に身を乗り出した。父が、ほう、という顔をして様子をうかがつた。どう答えるか迷つたけれども、嘘をいうとどつぼにはまるので素直に答えることにした。「だつてね、その

子性格はいいんだけど、見かけが私とつりあわないのよ。ほら、時  
也知ってるでしょ。『パール・シティ』のボーカルにそつくりだ  
つて子のこと。たぶん私と友だちとして仲良くしたいということを  
いいたかったのかなあ。ただ、私がそういうのに慣れてなくつて思  
わず、いかにもの『お付き合い』と勘違いしちやつて、パニックに  
なつたつてのはあつたよ。だからきっと、時也もその話聞いて、心  
配してくれたんだと思うんだ。ありがとうね。ナツキー』

南雲くんのことがあそらく時也の方からもれたのだらう。時也の  
通つている塾で、彰子の相談した内容を女子たちが話しているかな  
んかして、それを聞きつけた。時也は心配して大至急、彰子の仲  
良しである男子たちに声をかけて留守電応援メッセージを送つてくれ  
たと。ついでに自宅謹慎中のナツキーにも報告したと。なんだ、  
時也が彰子のことを心配してみんなやつてくれたことだ。もう一袋  
時也にクッキー用意してくればよかつた。

ナツキーはしばらく両腕を組んだ。お父さんの写真に似た格好で  
だつた。ほんと、ナツキーはお父さん似だと思つ。写真を見上げな  
がらのんびり、そんなことを思つた。

「彰子、お前なあ」

いきなりじつと、彰子の顔をにらみつけた。素直に感謝したのが  
帰つてまづかつたらしい。ちょっと読み違いありだろつか。身構え  
つつも笑顔を忘れないよう、彰子は答えた。

「なんか、悪いこと言つちやつたかなあ」

「お前なんも分かつてねえよ！ ばかやうううー」

漆塗りの机にばしんと両手を叩きつけた。

どうしよう、ナツキーに怒られちゃつたよ。私つて男子にどう  
うも、逆なでしちやうこと言つちやうくせあるみたい。

父だけが落ち着いたまま、時也の分のクッキーを一枚もらひ食べ  
ていた。

ナツキーの怒号は父譲りだとつくづく思つ。

「いいか、彰子。お前、自分の立場がどれだけ大変なことになつてるかちつとも理解してねえよ。彰子のことをばか女どもがさんざんこけにしていること、どうして気づかねえんだよ！ あんな奴らにお前がなんで、そこまで言われなくちゃいけないんだよ！」

「私のことをこけにしているって、どういうこと？」

時也に田線を送るナックキー。『ほんと咳払いして、時也が答える。

「奈良岡のことを話していた女子たち、最低だ

「は？」

「『あんなデブにどうして、パール・シティー』みたいななかっこいい彼ができるっていうわけ？ 絶対変だよ』って言つてた」

なにも時也、そんなにリアルに言わなくたつて。

止められない時也は更に続けた。

「『小学校の時から男に媚びるのが得意だった』とか

「私、媚びてた？」

「『青大附中では全然男子が相手にしてくれないって話してたけど、やつぱり顔が命だもん、当然だと思つてたけど』とか」

「いや、私、この辺はそつだつて思うけど」

「『絶対からかつてるんだよ、それ。青大附中の子たちも言つてたけど、あんなブスに相手がいるなんて絶対変だつて！』とか。うちの塾、青大附中の女子が何人かいたから聞いてる』『時也、教えてくればよかつたのに。私の友だちかもしれないじゃない。紹介してあげたのに』

父が笑いをこらえきれずうつぶして声をもらしている。彰子からすれば時也が報告する彰子への悪口は、否定できないことばっかりだし、もうあきらめていることだらけだつた。周りの人々が南雲くんの「理科室告白事件」についてかなり冷静な見方をしているのは知つていて、でも南雲くんが「友だち」としていい付き合いをしたいと真剣に言つてくれたことだけは確かだと思う。だから彰子なりに誠実な答えを返したつもりだつた。ブスだとかデブだとか言われて言い返す気はない。健康面の問題さえクリアすれば、今の自分の顔

も身体も、まんざり嫌いじゃない。

とうとい、ナツキーが立ち上がった。

「なり先生！ 自分の娘がこれだけこけにされてるんだぜ！ 頭の悪いばか女どもにここまで罵られてるんだぜ！ なんで笑つてられるんだ！」

「夏木、『めん』めん、時也と彰子の漫才が面白すぎたんだ

「笑い事じやねえ！」

両手を腰に当て、彰子を見下ろした。

「いいか彰子。ばか男がさんざん彰子を追い掛け回していたのはわかる。その気持ちはよく、わかる。だがな、こんな奴らをのさばらしておいていいと思つてるのか。いいか、俺はな。そんな奴らを許しちやおけねえ！」

「うん、そうだ」

合いの手、時也だ。

「なら先生、ここで言つとくべ。父ちゃんが日本を守ると同じく、俺は彰子を守るからな。絶対に、ここに手を出す奴は許さねえからな！」

なんか、怒られにきてしまつたみたいだなあ。

ぽんやり、見上げながら彰子は答えた。

「うん、ありがとう。ナツキー、『めんね

本来の目的「自己謹慎中のナツキーを勇氣付けるためクツキーを渡す」ではなく、結局は「青大附中の馬鹿男に追いかけられて、周りでは不当な評価をされている彰子を、ナツキーと時也が守りうと宣言」のための集まりになつてしまつた。まあ、これでもいつか、とにかく彰子はおとなしく大福を三つほどおぼつていたし、父も荒波をこれ以上立てないよう、ナツキーのしたことについては何も言わなかつた。クツキーがあつといつ間になくなつたのはきっと、それなりに美味しかつたからだろう。彰子は満足だつた。

もつとも根掘り葉掘り、

「セイツの顔はどういう感じなんだ？」とか「まさか、連れ込まれ

よつとしてるんじゃないだろうな」とか、あまりにも南雲くんに失礼な内容を突っ込まれるのには困ってしまったけれども。一応、

「土曜の午後に、友だちとして遊びにいくことにはなったんだよ。青鴎こども公園。ちつとも、デートっぽくないよ。ナツキーが騒ぐほどのことでもないと思つなあ」

とだけは、伝えておいた。自宅謹慎期間が過ぎたら、「あけましておめでとう」記念にどこかナツキーたちと遊びに行つてもいいだるい。

夕方過ぎに辞去することにした。

「彰子さん、わつき、宗くんが言つていたことなんだがな」

一緒に並ぶとなにか変。父が骨ばった手で彰子の髪に触れた。

「ナツキーつてばもう、私なんかぶさいくもいとこなのに、すぐかばつてくれるんだからね。ほんと、ありがたいなつて思つよ」

周りの奴の悪口を告げ口されたので傷ついていると思つたのだろう。彰子としては外見のことを言われるのならばしかたないと割り切つている。性格が救いようないとか、人間的に存在価値がないとか言われたら傷つくかもしれないけれども、

「私、自分の顔、結構好きだよ。お母さんにもちつちやい頃から言われてたもん。『みんなに覚えてもらつためには、いつもにこにこしてればいいよ。そうしたら、あそこのぼっちやりしていつもにこにこした子つて、みんなが記憶してくれて、友だちたくさんできるからつて。美人さんだつたら近づけないかもしれないけれど、私みたいなタイプだつたら、みんな安心してお友だちになつてくれるからね』って」

父はかすかに口元をほころばせると、時計を覗いた。

「そういえば彰子さんに最近、洋服買ってやつてなかつたなあ

「いいよそんなの」

「その辺でいいのがあつたら、教えなさい。お父さんはあまりそ

「いつのわからないから」

なんかやだなあ、お父さんも。どうしたんだろ。

でもラッキーかも。あまり洋服にこだわる性格じゃないんだけどね。ただ、お母さんのおふるはちょっと、恥ずかしきるからなあ。スカートの裾いつぱいにフリルがたくさんついているフランス人形みたいな服はちょっとなあ。

少しだけ考えて彰子はありがたく、父の申し出を受けることにした。

「じゃあ、今度、気合入れて洋服屋さん回つてみるね」

だれかおしゃれなことに敏感な友だちを誘つて出かけたほうがよそそうだ。

美里ちゃんあたりにいつのことは相談してみるといいかもな。

父は母に、ナッキーのことをあまり詳しく説明しなかつたらしい。とにかくクッキーが満足だつたことと、相変わらず彰子が男子連中に愛されていることを報告したにとどまる。彰子も照れくささありとはいえ、

「ねえねえ、言つてくれればいいのに。彰子に申し込みした男子いたの？ どうするのよ。ねえねえ」

大きなフリルがたくさんついている花柄エプロンをした母。南雲くんについてひとつひとつ聞き出すのだけはやめてほしかった。

「そりゃあ、ナッキーショック受けるよね。そうか、彰子にとつて青大附中に入つてから初めてのデートかあ。お母さんがいい服、選んでおくからあとで着て見なさいね。お父さんも別にいいから。うちにたっくさん、古い服あるんだからね」

父のまなざしさはかなり、同情を含んだものだつた。大丈夫、なんとかなるわと、田で答えた。

いやあ、しかし、あきよくんと遊びに行くのはいいけど、お母さんのどふりふりを来て出かけるわけ？ わああ、どうしよう。

「うひの方があつて恥ずかしいよ。

娘の初デートは、母にとっては心ときめくものだつたらしい。たぶんウエストが入らないという理由で下げてくれたのだろう。百合の花がおおぶりにプリントされた真つ赤なワンピースに白い「ロサージ、かなりだぼだぼのボレロ、最後はフリルたつふりの白い靴下とスニーカー。信じられないくらい自分には似合わない格好をさせられそうだった。

鏡に映る自分の姿を見るなり、ふうとため息をついた。

これって、なんかさあ。

母の嬉々としている様子を見ていると、さすがに「こんな恥ずかしくてやあよ」なんて言い返せない。かといって、南雲くんが呆然とするところを見るのも、悪いと思う。たぶん一瞬にして、南雲くんは彰子に交際の申し込みをしたことを後悔するんじゃないだろうか。「彰子はね濃い色が絶対似合つのよ。あんた赤とか苦手だとか言つてたけどね。でも、男の子と会つんだつたら思いつきりおしゃれしないと、損よ。どうせその男の子に振られてもね、ナッキーや時也くんがいるじゃない。そつよ、時也くんならこういつ服、お母さんの方で見慣れてるわよ」

いや、あのふたりにこの格好見られたら何言われるかわからぬいよ。

きっと、普段の白衣でたまつたストレスを、こうこう派手なもので発散しているのだろう。さらにコーディネートを楽しんでいる母を見下ろしつつ、彰子は思いつきり脱力した。

やつぱりあした、美里ちゃんたち誘つて、いい服見繕つてこよ。まあいつか。土曜日はお母さんのリクエストにお答えするとしても。

次の日、彰子が教室に入るまでの間、やたらと視線がびしひと当たつたのを感じた。急いで避難すべく一年D組にもぐりこんだ。

なぜか、ここだけは安心して話ができるのだった。彰子にとっては気楽な場所だった。いつものように水口くんと解剖の話をし、他の女子たちとテレビの話や宿題の「写し合」をし、南雲くんを始めとする他の男子たちには「おはよー」と声をかける。不自然なほど、ふつつの空気が流れていた。

「彰子さん、これ、あとで見ておいて」

美里ちゃんたちと「砂のマレイ2」の話につきあつていると、南雲くんが机に一枚、レポート用紙を置いていった。

「他のみなさまの『』意見もいただいていいよ」

ちらつと美里ちゃん、いざえちゃんたちの方もみて、頷いた。彰子の性格をよく掴んだ様子だ。南雲くんの態度は、理科実験室事件前とほとんどかわらなかつた。デートを受け入れたことがかなりいい方向に進んでいるらしい。

「ねえねえ、見せて見せて」

「彰子ちゃん、結局どうしたの？ 付き合いつの？ 南雲と」

「付き合いつかどうかわかんないけど」

「も『』も『』言いながら、許可の出たレポート用紙を一枚覗き込んだ。

一 青鴻駅前にて集合。

二 青鴻駅→バスで「青鴻」→公園まで十分。

三 休憩室にてただのお茶をもらしながら、お弁当を食べる。

四 遊ぶ。

五 ないしょ。

五の「ないしょ」というところが妙に受けた。項目の間には、それなりにお奨めスポットなどの記入もある。宿泊研修の時作るしおりによく似ていた。文章は少なかつたけれども、あいているところにはいろいろな音楽系のイラストが書き連ねられていた。鉛筆書きのもの。たぶん、バンド関係に詳しい人なら一発でわかるのだろう。

「彰子ちゃん、つまり、土曜日会うの？」

「うん、公園だつたらいいかなと思つて。みんなで行つた方がいいと思うんだけどね」

「それはダメだよ！」

強く美里ちゃんが訴える。

「よくわかんないけど、これは彰子ちゃん一人で行くべきよ！」

「美里も何一人で力こめているのよ。全く、自分がかなわないからつて」

「こづえ！」

真っ赤になりつつも、美里ちゃんは一生懸命にしゃべっていた。

「お弁当は必要かなあ。休憩所だから。作つていつた方がいいのかなあ」

「彰子ちゃん料理巧いからそれは当然よ！」

「それと、お茶も水筒に入れて用意したほうがいいよね」

「遠足と一緒に！」

「公園でだつたら、あまり派手な服はまずいよね」

「でも可愛くなくちゃ絶対だめ！」

頭の中に浮かぶのは母コーディネートの派手なワンピース。

可愛くないとは言わなが、着る相手を思いつきり選ぶ。

「洋服選ぶんだつたら私が付き合つてあげる！」

そうきた。よかつた。言い出す前に美里ちゃん、強く受けてくれた。

「頼もうと思つてたんだ。ありがとう美里ちゃん」

「私も付き合つていい？」

もちろん。こづえちゃんもいれば鬼に金棒。彰子は手と手を取り合ひ、レポート用紙に質問事項を書き込み、もう一度南雲くんに持つていった。

「あきょくん、お弁当のことなんだけどどうかなあ」

「あ、それ大丈夫」

立村くんとふたりでテープの交換をしているところを邪魔してしまつた。あつさりと南雲くんは受け取り、ぱかつとした笑顔で答え

た。

「ちゃんと、料理は用意してるんだ。まかせといて！」

立村くんがわけのわからなさそうな顔をしつつも、知らん顔してテープの入れ物をいじくっていた。南雲くんはこくつかレポート用紙にチェックを入れた後、

「じゃあ、後は俺が全部プランニングするから任せといて！」

と胸を叩いた。

「あとね、ひとつだけ」「解いただきたいんだけど」

「なに？」

「当日、諸般の事情で非常に、つれて歩きたくない格好をしてくるかもしれないけれども、その時は」「めん。洋服あまり、そういうの関心ないもんだから」

「全然、そんなの気にしないよ」

いや、うなされなければいいな。

彰子は両手を合わせておいた。

しかし不思議だ。一年D組から一歩出たとたん、空気がにじる。

五月の風が、湿つていく。

あまり季節を感じない彰子ですらも、

うわ、息苦しいよ。

思つくらいなのだから相当なものだらう。立村くんが顔色青くして机にうつぶしていた。南雲くんが軽く背中をさすつてやつていた。羽飛くんが美里ちゃんに、

「あいつまた倒れるぜ。つたぐ、何考えてるのこいつ」

指差して肩をすくめていた。

彰子が思つに、どうもいろいろな空氣をよけいに察知してしまつ体質の持ち主らしい。憑依体質、というのがある。一緒にいる人が「気」を出して、「おなかがすいた」とか「外に行きたい」とか「ぐあいわるい」とか考えているのを、普通の人はあまり感じない。しかし、憑依体質の人はそういうのをよけいに感じとつてしまい、

おなかすいていないのに思いつきり食べててしまつたり、つられて具合悪くなつてしまつたりする。バスの中で一人が酔つてしまつと、連鎖反応で吐いちゃう人が連續するのと同じだ。教えてくれたのは母だ。もちろん、「あなたは神経すぶといからいいよねえ」とため息をついて、ダイエットについて説明してくれた時だ。

「立村くん、保健室、行こうか？」

心配そうに美里ちゃんがそばに寄つて声をかけていた。やはり同じ評議委員だから、気遣つてあげているんだろう。ほんといやせしい子だ。

「大丈夫、じめん。少し落ち着いたら帰るから」

身動きせずに立村くんは、か細く答えていた。

彰子も保健委員の立場上、気になるところあつて近寄らうとした。とたん、美里ちゃんが勢いよく近づいてきて、手を引っ張つた。

「じゃ、行こつか。じずえと一緒におしゃれの勉強、しに行こ！」

南雲くんがきょとんとした顔で彰子を見つめている。羽飛が美里ちゃんに、あきれた顔して片手を上げている。立村くんは相変わらずつづぶせたまま。「じゃあ、お先にね！」彰子はじずえちゃんに背中を押されるように、美里ちゃんに手をひっぱられるようにして教室を出て行つた。ふたりの「気」が守つてくれているみたいだつた。C組、および他のやつかみらしに「気」が跳ね返されたみたいだつた。やっぱり自分は守られている。

どうして私の周りつていい人ばかりなのかなあ。

「一応、希望だけ言つとくけど」

「デパートの中を歩きながら、彰子は前もつて母の愛好ブランド名を告げ、避けてもらつよう頼んだ。

「え、そんなふりふり、着たりするの？」

「たぶん、着なくちゃいけないと思つんだ。お母さんの立場上」  
「じずえちゃんが噴き出したといふみると、相当イメージと異なつたらしい。

「それって彰子ちゃん絶対まずいよ。美里に任せときなつて。美里はくやしいけど私よりずつと、野子が田からつるじ落つるよつな口一ティネット決めてくれるから！ 相手は南雲でしょ。奴なりきっと、今時のしゃきっとした感じが好みだと思つから。あまりぶりぶりした感じは好きじゃないと思つんだ。ねー、美里。どこのだれかさんとは違つてね！」

「「じゅえ、うるせこつー！」

なぜか美里ちゃんは顔を真つ赤にして「じゅえちゃんの肩を思いつきりふつていてる。いつもそうだ。美里ちゃんといじゅえちゃんの会話は、「砂のマレイ2」のキャスト好みにしろなににしろ、「だれか」の存在をちらつかしてはからかい、相手が本気でくつてかかる。そんなりだつた。しかも「じゅえちゃんは引かないで、傷つかないで、平氣で言つてのける。

「正統派のトラッドファッショング、それとも氣品のあるドレスとか、そういうのを氣に入つてゐみたいよ。あいつはね。羽飛とは大違い。羽飛の好みは美里も知つてゐよね」

羽飛くん？

思わず口からもれた。

「羽飛くんの好みと違つのは想像つくけど」

にんまり笑つて「じゅえちゃんは無理なウインクをしてみせた。顔がつっぱつていてる。

「あのね、彰子ちゃん。美里はひそかに、彰子ちゃんのお母さんが大好きなブランドの服、着たがつてゐに違ひないんだ」

「うん、美里ちゃんんだつたらああいつふわふわしたのつて似合つと思つなあ」

素直にやつ思つ。

「やついうんじやないつてばー！」

「ほりほり無理しないでさ。彰子ちゃんも聞いてやつてよ。この子のダーリン候補つてばねえ、美里の好きなおしゃれ系どずれててさ。すつじくジレンマ感じてるみたい。形崩さないできちんとした格好

して、ブレザーと「一トでびしつと決めて、今は絶対シャーロック・ホームズ風「一トつて感じの奴だからさあ」

羽飛くんじゃない？

「いつちやなんだが全くイメージが異なる。彰子はもつと尋ねてみたかった。

「そういう子を、美里ちゃん、好きなの」

「「うえ言わないでつてば…」」

通路の真ん中で完全に泣き顔を見せながら美里ちゃんは「うえちゃんを捕まえよつとする。逃げながらぐるぐるぱーしてみせる」「うえちゃん。軽くかばつて、

「「うえちゃん、いいよ。やめときなよ」」

声をかけた。だんだん、輪郭が見えてきたものがある。

「全くさあ、美里つてば好みが変よねえ。そばにさ、羽飛みたいな奴がいるのに、なんでよつにして」

「「うえにはわかんなくていいの！ もう、知らない！」」

「ううと美里ちゃんはエスカレーターの方へ駆け出してしまった。

「ちよつとまづくない？ 美里ちゃん、行つちやつたよ」

「うえちゃんもさすがに、姿が見えなくなつたのを見ていてあせつたらし…」

「じゃあちよつと待つてて。美里を捕まえてくるからさ。彰子ちゃんもよさやうなものあつたら田屋つけとおことよ。どつせ買つわけじゃないんだからさ」

でもちつともあせつてない風に、舌を出した後に「うえちゃんは、

「みあとー、待つてよー」

叫びながら駆け出した。平日の午後、人通りのないデパート。販売員さんたちが田の笑つていない顔でお辞儀をしている。一人取り残された彰子は、同じ年頃の子たちがたむろつている店に入り、自分が着れそうにないブラウスを広げたりしていた。白も黒もいろいろあつたけれど、ほとんど選んでいなかつた。指先で触れながら、

わつかの「ずえちゃんが口走った言葉を思い出していた。

「の子のダーリン候補つてばねえ、美里の好きなおしゃれ系とずれててさ。すつ「ぐくジレンマ感じてるみたい。形崩さないできちんとした格好して、ブレザーとコートでびしつと決めて、冬は絶対シャーロック・ホームズ風コートつて感じの奴だからさあ。

そばにさ、羽飛みたいな奴がいるのに、なんでよりによつて。

羽飛くんではない。ブレザーとコートでびしつと決めるタイプじゃない。同じ理由で南雲くんでもない。もつと「な、シャーロック・ホームズ風コート」という言葉。特定される一人しかいない。

美里ちゃん、まさか。

立村くんの「こと、好きだったの？」

マント風のいかにも田立ちそつた格好で教室に入ってきた時、みなが呆然として指差したこと覚えていて。彰子が立村くんについて記憶しているのはそのあたりだ。だから覚えていた。似合わないとは思わなかつたけれども、学校ではちょっと田立つだら。

美里ちゃんと立村くんは同じ評議委員だし、もちろんそういうのがありえないとは思わない。でも、彰子は最初から羽飛くんの存在を意識していたから想像だにしていなかつた。

何よりも、クラスで人気者、可愛い美里ちゃんが、なぜ、評議委員とはいえ地味で目立たない立村くんを好きなんだろうか。

羽飛くんと、幼なじみなのに。

羽飛くんとだつたら、お似合いなのに。

私だつたら、絶対羽飛くんを選ぶのに。

「彰子ちゃん、捕まえたよーー！」

背中を叩かれた。恥ずかしそうにうつむいている美里ちゃんと、そばでけらけら笑いこけてくる「ずえちゃんがいた。すぐに見つけ

て、探してくれたらしき。

「ほり、美里も機嫌なおしなよ。私が悪いひじれこました。今日は彰子ちゃんのために「一デイネイラーしてあげるんでしょ。ほりほり」「まだむくれてこる様子の美里ちゃんをなだめるよ」、『すすむ』やんは彰子へいひやり、「ねつーわかったでしょ」と歯を突き出すしぐれをした。

「うん、わかったよ。

動搖したところを見せたくない、彰子はもつ一度、いひくつ頷いた。

「どうしよう。

美里ちゃんが選んでくれたコーディネートは、幾分白と黒の直線がカッターで切ったようでなかなかおしゃれだった。値段もそう高くなかったし、彰子も気に入った。ワンピースで、一応試着してみたら一番大きなサイズで問題なかつたし、あとは父に買つてもらえばいい。しかし「彰子の初デートに着る服を選ぶ会会長」の母により、あっさり却下された。

「あんなぴつたりした服着たら、彰子、あんたおながが目立つてしょがないわよ。食べた後おなががたぬきみたいにぼこっとでたらしゃれになんないわ。いい？」こういう時にはね、ウエストは全部「ゴム」とだめなのよ。いい？」

父に助太刀を頼んだのが間違いだった。

「お父さんは黙つてて。女の子はね、洋服でいくらでもかわいくなれるのよ。彰子は笑顔でずっと勝負きた子なんだから、可愛い赤のワンピースなんて着たら、絶対男たちはいけるよ。ね、そうでしょ？」

頷けない。絶対に嘘だと思つ。

でも、母が楽しそうに新しいブラウスを広げてみたり、わざわざ彰子のために、ブランドのプレミアムハンカチをプレゼントしてくれたりしたら、もう観念するしかなかつた。父の懐が痛まず、母のご機嫌がよくなるとしたら、彰子がどふりふりの真つ赤なワンピースを着て、南雲くんがうなされるといつパターンを甘受するしかなかつた。

ま、いいか。あきよくんがつて、友だちづきあいをやめるとまではいわないだろうしなあ。

土曜の朝からずっと彰子に笑顔を向ける南雲くんに、彰子は曖昧に頷いた。

お願ひだから、卒倒しないでね。あきよくん。

四時間田が終わってからまづはつひに帰り、一時に駅前で待ち合わせ。

まつすぐバスに乗つて「青潟こども公園」に向かい、そこから南雲くんの立てたプラン通りに行動すればいい。彰子はデータといつものがどんなものか皆田見当がつかないけれども、回数を重ねて南雲くんに任せたければいいだろ。その辺は心配していなかつた。

むしろ、駅で待ち合わせした時に、どうして顔をするか、それが問題だ。

大きい着替えのバック持つて行つて、駅のコインロッカーに入れて着替えるのが一番いいような気がするなあ。何度見ても、この格好つて。

白い百合がたくさんプリントされていて、可愛いくて可愛い。ただ、着る相手を選ぶと思う。なぜ母はこうこうデザインの服を選んだのだろう。母がいなければそれなりに別のものを選ぶのだが、今日に限つて医師会の会議があるのでいつ。母も着替えてから、出かけるといつ。もちろんスーツだ。どふりふりではない。

「彰子、ほり、あんたそんなに不満そうな顔しないで

「第三者から見て、お母さん、私に似合つと思う？」

真面目に尋ねるが、母の目は曇つているらしい。眼科医のくせ。「いいわよ。やっぱり彰子は赤とかはつきりした方がいいのよ。もともとほわつとした感じだから、甘い色を入れるとね、なおむりほつちやりして見えちゃうのよ」

「別に、それでもいいんだけど」

「だめよ。あんたは少しでもほつそり見えたほうが得なのー。」

わざわざバックも、小さめのおそろいポシェットを用意された。観念。もう逃れられない。

時間はまだある。せめてもの抵抗に、着替え用ボストンバックを

用意しよつとした時だ。呼び鈴が鳴つた。桃色のスーツ姿で玄関に走る母。そしていきなり叫び声。

「彰子ちやーん、お友だちよーーー！」

全身、完全に硬直した。

なむさん。どうか、あきよくん、冷静でいられますよつじ。見てている自分でも受け入れられないこのふりふり度。ファッシュショノに詳しく述べられな彼が、冷静でいられるとは思えない。

父がいないのが幸いだつた。

母はすっかりはしゃいでいる。自分のデートじゃないんだから。どうも母親というのは娘のデート相手には異常な関心を持つらしい。ナッキー や時也と同じ扱いでいいと思つたが、妙にハイテンションだつた。

「あきよくん、わざわざ」

「うん、最初だからやつぱり、と思つて」

南雲くんは玄関で、白いシャツに水色のパーカーを羽織り、髪型を丁寧すぎるほどきれいにまとめている。目がはつきりと前髪から出でている。彰子の家族に会つため、規律きつたりとしたんだろつか。

「パール・シティー」な彼だもんね。

彰子はそつと南雲くんの顔をうかがつた。

「あの、あきよくん。実はね」

「大丈夫。俺は平氣だよ」

聞く前に反応したつてことは、かなり南雲くんも心中衝撃を受けたに違いない。彰子は見た。上から降りてきてまず、最初に南雲くんの顔によぎつたのは、

なにこの格好。

そのものだ。いや、責める気はない。彰子だつてそつ思つ。

母がなにやらはしゃぎながら奥に引っ込むのを待ち、彰子はまたやくこととした。

「私もかなりこの格好に抵抗があるんだけど、母の趣味なの。だか

ら、公園で一回、ふつつの服に着替えるつもつなんだけど、それまでがまんしてね

「いいじゃん、これで

あきよくん正気?

上から下までちらりと眺め、すぱっと答えた。付け加えた。

「俺、すげえいこと思つよ。あそこのブランドだろ? 俺もたまにメンズもの覗きに行くけど、高過ぎて手を出せなかつたんだけどさ。彰子さんがそういうのを着るんだったら、今度、小遣いためて」

「それだけはやめようよー。」

何か世界がずれてこる。南雲くんが彰子に気を遣つて、似合つといつてくれているならわかる。しかし今言つたのは「おそろいでもいいよ」つてことじやないだらうか。それだけは彰子自身がご遠慮したい。メンズブランドは、ふりふりものを男の人の服にくつつけた、それこそバンドの舞台用としか思えない内容なのだ。南雲くんが正真正銘の「パール・シティー」だったら話は別だが、一緒に歩くなんてしようもんなら、青鴎中の噂になるに決まつている。

「とにかく、行こうか

母が慌てて出てきて、この前こしらえたクッキーの残りを持たせてくれた。ナツキーにこしらえたものが残つていたのだ。余りものとは言えない。

「わあ、ありがとうござりますー。」

「彰子がこしらえたのよ」

田の輝きが尋常じやない。続く言葉に彰子は罪悪感でつぱつになつた。

「俺のために作つてくれたんだよねー。」

田で「そうこづこ」とこしきなをこ」と合図する母には逆らえないとつた。

ふつつのつかひ、いつこつ時まつここと文句を言つひりいつきてきいたなあ。うちが変なのかな。そんなことないよね。ま、友だちだし、ナツキーや時也とおんなじことしてるだけだよね。

い。

いひじうことあるから、周囲からは「彰子ちゃんのお父さんとお母さん、先生やつてるのにどうしてそんなに面白いの」と聞かれるのだ。

### いざ出陣。

少しふかぶかの花柄付スニーカーをはいて後、彰子は何度か戸口にぶつかりながら外に出た。もちろん扉を南雲くんが押させてくれていた。その辺はさすが慣れている。お姉さま気分になるのも無理はない。こちらとしては申しわけないのだけれども。通りかかる人々の視線が妙に痛いのは、やはりいでたちのためだろう。これからバスに乗るのだ。公共の迷惑を掛けまくっている。やはり駅前で着換えたほうがいいような気がする。

南雲くんはすっと笑顔のままで話し掛けってきた。嬉しくて嬉しくてならないという風にだつた。その点はありがたいと思う。彰子ももちろんしゃべりつけたのだが、いかんせん重ねたスカートのペチコートが重くてならない。足が絡みそうだ。

「「めん、やはりなれない格好するのはよくないね」  
ひとしきり自分で大笑いしてから、彰子は頷いた。

「彰子さんのお母さん、お医者さんなんだっけ。俺んとこは両親ともども会計士」

何度か聞いたことがあるけれども、初めて聞かされたような顔して促した。気づかないのか南雲くんはにこやかに続けた。

「だからうちの両親、いつも事務所にいずっとばかりなんだ。うちから離れているとこだから、帰るのはすげえ遅くつて。多少俺も遅く帰つても文句言われないんだ。うちにいるのはばあちゃんだけだし」

「確か、妹さんもいらしたんだよね。

「口に出かかつたけれども、聞かないことに決めた。彰子の直感だつた。何かまずいような気がした。

「だから、結構俺、青潟の遊び場つて詳しいと思うんだ。みんなから遊び人だつて思われても、まあしゃあねえよな。でもさ、公園と

かそういうところも嫌いじゃないから、彰子さん、気を遣わなくていいからさあ」

言い訳しているらしい。なんだか彰子も、自分の服のことばかり考えていたのが申しわけなくなってきた。きっと、今時のライブハウスとかおしゃれな喫茶店では彰子が萎縮してしまってあらうことを探していたのだろう。思いやりのある子だ。自分がクラスでさんざん「軽い奴」「いいかげんな奴」と思い込まれているのを気にしているのかもしれない。羽飛くんがさんざん、罵っていたんだから。

「ううん、気にしないよ。楽しみだよ！」

バス停で百五十円払い乗り込んだ。時間帯が高校生の帰宅时刻にぶつかつたらしく、やたらと混んでいた。満員バスの中にただでさえ場所を作るのは大変なのに、さらに輪をかけて分厚い服着ているつてわけだ。嫌な顔をされないわけがない。

耳元に「なんだよこの“デブ”」「似合わなね」などとの悪口を耳にしながら、彰子は小さくなっていた。南雲くんはさすが細い、するすると奥に追い込まれている。当然、手なんてつないでいいのではバスの中ではばらばらだった。

約十五分揺られた後、だいぶ少なくなつた車内から降りる。目の前にはさびた鉄柵に寄り添うつつじが咲き乱れていた。白、濃い桃色、匂いはないけれども花びらがピンと張り切つていた。

「やつと生き返つたつて感じだね」

無言ながらも笑顔を絶やさない南雲くん。早く行きたいらしい、たつたと競歩の感覚で歩き始めた。付いていくのがやつとだった。

「とにかく、中に入っちゃおう。それから説明するよ」

急いでいるらしい。手首を袖の上からぎゅっと捕まれた。驚いた。そうしないと南雲くんのスピードについていけない。素直に任せてひっぱられていった。

入場料百円、財布を取り出す間もなく南雲くんが全部用意してい

たらしい。受け付けに一枚をつと渡し、そのまま彰子を引きずつていく。もちろん手首は離さない。受け付けのお姉さんが彰子を見てくすっと笑つたような気がした。そりやあそつだろ。」

「急がせちゃつて」めん。まず、腹ごしらえしよう。匂い飯、食べてないよね」

「うん」

実はかなりおなかがすいていた。一口でもいいから何か口に入れなかつたけれども、母に「絶対だめ!」と禁止されていたのですつと空腹のままだったのだ。

「よかつた。じゃあまつすぐ休憩室に行こう」

きつと、ハンバーガーとかおにぎりとかが売つているのだらう。それでいい。ジユースとおにぎりだけでも十分だ。

「あのね、あきよくんいいかな

「ん?」

「手首、離してくれると、うれしいな」

彰子としては「あまり握り締められると痛い」と思つていたからにすぎない。しかし南雲くんにとつては思わぬことだつたらしく。いきなりぱたつと離し、じつと彰子を見つめた。

「「」、「めん。びっくりしてた?」

「ううん、ちょっと痛かつただけだから。でももう大丈夫だよ。さ、連れてつてください!」

南雲くんの目が少し安心したように緩んだ。

「うん、じゃあ行こう。今度はゆっくり歩くから

小動物公園と、遊園地が別々に分かれている。南雲くんのプランによると最初は動物公園でりすとかオウムとかやぎとかボニーを眺めたのち、「一ヒーカップに乗つて、最後には観覧車を予定しているらしい。その辺はお任せだ。まずは食べたいそれだけだ。

「じゃあ、入りましょっか

軽く、乗りよく、南雲くんは「公園休憩場」と書かれたベンチを指差した。食堂席奥席には年配の女性陣がずらつと陣取っていた。

天気もいいし、外でいい。

「いいよ、外の方が気持ちいいし」「食べるの外でいいんだけど、ちょっとだけ付き合ってほしいんだ」

強引だった。袖ではない。手をいきなり握り締めてきた。全身にびくつとするものが走る。有無を言わさない握り方。しめつてきた。一瞬理科準備室のことを思い出してしまいそうだった。

「ほんのちょっとだけ。」「めん」

引き戸を開けて、一身に視線を浴びる。

グループは年齢的にだいたい六十才後半から七十才くらいのご婦人たちだった。めがねをかけている人もいる。オレンジ色の花模様を纏っている人もいる。髪の毛が紫色の人もいる。六人くらい。驚くなかれ、みな笑顔だった。

「しゅうせいくん、来たの」

すっかり忘れていた。南雲くんの本名は「あきよ」ではない。「しゅうせい」だった。

「お久しぶりです。なんかあつたらまた言つてください。えつと、それから」

肩で呼吸し、ちらつと彰子の方を真面目に見つめ、もう一度「」婦人たちに顔を向けた。

「こちらが、俺の、一番好きな人なんで、連れてきました。奈良岡、彰子さん。これからいろんなところで会うと思うんで、よろしく」

絶句。言葉が見つからない。彰子がしたのは意識のもうろうとしたまま、

「初めてまして、奈良岡彰子です。どうかよろしく」

笑顔を仮面にして頭を下げたことだけだった。

あとは覚えていない。周りのご婦人たちがにこやかに、

「あらあ、しゅうせいくんの彼女なの？」

「元気そなめお嬢さんね」

「可愛い服ねえ」

彰子を評する声に硬直していた。

「と、いつことで、いただいてつていいですか」

南雲くんがそばに置いてあつたらしい、豪華なお弁当の箱を一折抱えて、片手で彰子を守るようなじぐさをした。

「じゃあ、俺たちは外で食つてます。ありがとうございました！」

ふわふわと笑い声に見送られ、彰子は南雲くんに連れられて戸口のベンチに並んで座つた・座らされた。大きな木目のテーブルに紙のお弁当箱が並んだ。見た目漆塗り調の入れ物で、結婚式の引き出物に良く似ていた。

「豪華なお弁当、ね」

これしか言えなかつた。

「うん、うちのばあちゃんが今日、婦人会の人たちと出かけるつて言つてたんだ。で、ここのお弁当がすごく美味しいから、もし俺が来るなら用意してくれるつて言つててさあ。で条件が」

「条件？」

彰子は問い返した。

「俺の好きな人を紹介してほしいつて。自慢したいんだつて」「好きな人つて？」

桜の花に形をこしらえたご飯、鮭、たけのこ、卵焼き、みかん、黒豆。いかにもおばあちゃん好み。でも美味しい。彰子はほおばりながらも言葉を失つた。

「うん、彰子さんのこと」

「……美味しいね、ごちそうさま！」

だつて、それしか答えようがなかつた。

話すことほたたくさんでんこもりだつた。なにも「デート」だからといってかしこまる必要はないし、南雲くんも絶え間なくクラスのこととか、規律委員のこととか、得意なイラストのこととか、ペラ

べらどじゅべりつづけていた。彰子はとにかく笑顔で相槌を打つよう心がけていただけだった。実のある話、全然していないという気持ちがないわけじゃなかつたけれども、南雲くんがとにかく楽しそうだったので、いいことにした。

「でさあ、彰子さんのところ、保健委員会の委員長どじなるのかな。ここだけの話なんだけど、俺が次期規律委員長になつてしまふんだよなあ。みんな、あつに取られるだろくなあ」 「ほんと、イメージに合わないよね。この前もみんなで言つてたよ。あきよくん、規律委員長になんてなつちやつたらおしゃれできないねつて」

制服関係をびしつと決めないと、やはりいろいろまずいだろう。「うん、でも、そんなに規則規則つてうるさく言つつもりないし、むしろ今度発行する予定の『規律委員会作成・青大附中ファッショングブック』を作ることに専念するんだ。そうだ、彰子さん。今度、俺と一緒に洋服関係の店回るの、つきあつてほしいなあ。野郎関係だつたら平気だけど、なかなか婦人服っぽいとこつて、あやしいと思われそうで嫌なんだ。ほり、今着ているような服のとことか。絶対変態だと思われそうでさ」

頷く。そのくらいならばかまわない。ただモデルがいまいちかもしないけれども。

「よつしゃあ！ じゃあ、今度はそこに行こう！」

一通り平らげた後、南雲くんは手元に無料のお茶が切れているのに気づいたらしく、軽く紙コップを振つてみて、

「彰子さん、お茶、持つてきてあげるよ。ちょっと待つてな」

答える間もなく両手に紙コップを持って、建物の中に入つて行つた。実にまめだ。まさに歩くデーターブック。これだったら女子たちも満足するだろ？ ぎんなんとおしんこをきれいに食べ終え、彰子がお弁当のふたを閉じた時だった。

「ちよつと、いいかしら？」

背中でふたりほどの気配がした。香水の匂いがちよつとばかりき

つい。振り向くと、さつきの婦人会グループの女性が一人、ほほえんでいた。このふたりは大体六十年代くらい。あの中では若い方だろう。

「あ、さつきは失礼しました。それと、『あそつさまでした！』

『駆走してくれたのは実質、このグループなのだ。きちんとお礼を言つた。

「いいお弁当だつたでしょ。こここの店ねえ、いつも私たちの集まりがある時にね、取り寄せるんだけど。今日はしゅうせいくんが気合こもつた初デートだつてことでね、特別にお祝いつてことで、ねえ」顔を見合させて頷きあい、また微笑む。

彰子は慣れてないわけじやなかつた。よく母の付き合いでお医者さんたちの交流旅行に連れて行かれることがあるのだけれども、そこの奥様たちがだいたいそんな感じだつた。品があつて、丁寧だ。

「よかつたら、ちょっとだけ私たちのところにきてください？」

「南雲さんの奥さんもぜひにつておつしゃつてるの」

つまり、南雲くんが大好きなおばあちゃんのことだらう。断るわけにはいかない。こう言つ時は「早く来なさい」という意味として受け取ることが正しい。

あ、でもあきよくんお茶くんでもらつてているとこだし。

「しゅうせいくーん、悪いんだけど、あなたの恋人、ちょっと借りていいくわね」

すでにもうひとりのブルーのワンピースを纏つた婦人が南雲くんに大きな声をかけていた。室内では大笑い。南雲くんはきょとんとした顔で、口をぽかんと開けていた。

「さ、OKがでたことだし、いらつしゃい」

お弁当のお礼は言つつもりだつたけど、どうしよう。

ほとんど気分は「拉致」だつた。彰子はスカートを持ち上げるようにして建物の中に入つて行つた。目があつた南雲くんとは、会話をしたかつたけれどうまくいったかどうか自信がなかつた。

席には五人ほど連なつていて、それぞれが濃い化粧、めがね、口紅、とにかく匂いが食べ物を覆つていて、みな丁寧に箸入れの袋をきれいに折つて、割り箸を乗せていた。おそらく南雲くんのおばあちゃんにあたる人だろう。手を振つてにこやかに彰子を迎えてくれた。なんか、ほつとしたのは相性が合いそうだつたからだらう。一番歳かさの方で、推定年齢おそらく八十歳近く。

「さあ、連れてきたわよ。それにしても今日はおめかしきわわねえ」

答えようがないのでこいつくり頷いた。そりやあ目立つだらう。

「すみません。私も着慣れてないんです。母がこいつの好きなんです。でも私はあまりこいつの苦手かも」

南雲くんのおばあちゃんは目を細めて、手を震わせながら彰子の腕を撫でた。ちょうど南雲くんが握り締めたあたりだらうか。

「本当にあの子はね、あなたのことが大好きみたいですよ。とつてもやさしい子がいるつて、毎日私に話してたんですよ。さつきお会いした時にやつぱり、ねえって思いましたよ」

気品のあるおばあちゃんだと感じた。少し息切れしているようすだった。体調があまりよくないのかもしね。循環器系の病気らしいとは前から聞いていたけれども、手元に市販されている心臓関係の薬が握られているところみると慢性のものなのだらう。耳も遠いらしい。なんだか聞きかえされた。大きな声で話さないとまずいらしい。

「ほらほら、この機会なんだから南雲さん、お嬢さんにどんな質問なさつたら？」

「そりや、どこにお住まいなの？」

「お父さんは学校の先生なんでしょう？　あら、お母さんもめこしゃさんなの？　で、どこのおこしゃさん？」

根掘り葉掘りとはこのことだ。彰子は素直に答えつけた。後ろの方で右往左往しているのは南雲くんで、なんとかして連れ戻そうと思案しているのが手に取るよつにわかる。お茶を置いてから、な

んども戸口を行つたり来たりしている。

「あらそつなの、あそこのめいしゃさんなの？」

どうやら彰子の母に当たつたことのある人がいたらしく、話はいきなり「お互いの病気自慢」にかわった。これは彰子も実際、年配の人と話す時経験している。どこが痛い、ここが痛い、あそこの病院はいい、あの病院はやぶだ、どこどの医者は胃カメラが下手だ、あそこの医者の息子は遊び人、などなどどうしてそこまで知つているのか不思議なくらい盛り上がる。知らない話ではないし、判断もしかねるので彰子は黙つて聞いていた。さすがに大病院とはいえる病院の話は出なかつたので、

すい君のお父さんのお口出ると申しわけないなあ。

少しほつとしていた。かなり、病院としてはひどい噂のあるところだからだ。

話をあわせていくうちに、南雲くんのおばあちゃんは白内障と緑内障を併発し、心臓の手術を経験し、さらには若い頃に蓄膿を経験しているとのことだつた。もちろん現在は補聴器を使用していらっしゃる。

「だから、あの子には毎週薬をもらいに行つてもらつてるんですよ。ああ見ても秋世は真面目な子だから」

「ご婦人たち、何度も頷いている。一年〇組の王子様で、さんざん女子と浮名を流してきたことはあまり知られていないらしい。

「そうなのよねえ。しゅうせいくん、本当にいい男、じゃなくつて爆笑するのでこちらも困る。

「いい男の子よねえ。ほら、この前も私たちの旅行についていろいろ手伝ってくれたことあつたでしょ。私たちが行くところの資料、全部友だちの男の子と一緒に集めてくれてねえ」なるほど。  
「デートどころじゃないよ。あきよくん、おばあちゃんたちのお手伝いもしているからね。そつかあ、すごいすごい。

相槌を打ちながら彰子は耳を傾けた。聞かれること以外には何も

言う必要がない。話を聞いていればとにかくみんな笑顔でてくれる。

「そりそり、奈良岡先生つてあのぼちやつとして、いつもげらげら

笑いながら検査してくれるあの女先生かしら?」

なんてリアルなお答え。大きく頷いた。母しかいない。

「絶対、うちの母です」

「あの先生、帰り道のお洋服みたことあるけれど、ほんと派手な格好しているわよねえ」 納得しているようすなので、彰子もゆっくりと答えた。

「その母のお下がりを、私が着てているんです。うちでも、あんな風に一日中げらげら笑つてます。裏表ないんです」

しばらく彰子のワンピースを撫でながら、他の「婦人たちは洋服および病院ウォッチングに花を咲かせていた。話を聞いているうちに、やはり母の病院評価は正しいのだと思えてきた。やはり時也を別の病院に紹介したのは正しかったのだね。南雲くんのおばあちゃんも今は例の「あまり評判よくない病院」に通つてているようだけど、それはそれでお医者さんと相性が合つといふことで、あまり気兼ねなくお付き合いしているようだ。それはそれでいいんだね。

結局最後に、「今度、お母さんにいい病院の情報などあつたら教えてほしいと言つておいてね」と頼まれ彰子はやつと席を立つことができた。「婦人たちみな楽しげだったし、南雲くんのおばあちゃんも最後まで洋服をなでなでしてくれた。嫌われはしなかつたみたいだ。約九十分間、医療関係の話題で盛り上がった後彰子は戸口を出た。

待ちくたびれたようにぼけつとした顔で、ベンチに座り込んでいたのは南雲くんだけだった。家族連れが数人いないこともないが、やはり野郎ひとりで座り込んでいるのは目立つ。特に「パール・シティ」似の美少年ともあろうお方だ。さぞや視線もちらちらしただろ? すでに空の弁当箱は片付けられていた。

「あきよくん」

「「めん、ほんと、ごめん」

平手ついて頭をテーブルに擦り付ける南雲くん。

「つひのばあちゃんたちにただ、彰子さんのこと、紹介するだけのつもりだったんだ。ほんと、それだけ。まさか、あんなことするなんて俺も。本当にごめん」

平謝りつたらそのことだらうか。風が、せつかく決めた前髪をばわばわにしてくる。

さつとおばあちゃん軍団に連れ込まれたと思つてゐるんだなあ。事実そうでないとも言い切れないのでね。

でも、いやじゃなかつた。

お年を取した方たちの病院うんちくや、その他いろいろな生の本音は聞くに退屈しなかつた。

「つひん、大丈夫だよあきよくん。私も楽しかつたし。ただ、あきよくんをずっとひとりぼっちにしてしまつたのが、ごめんなさいってだけ。せつかく美味しいお弁当ね」「もらつたのに。私こそ、本当にごめんね」

スカートを持ち上げ、彰子は南雲くんの隣りに立つた。意地悪令嬢が美少年をこき使う図と思われそうだけどしかたない。

「続き、お任せします。あきよくん」

おずおずと見上げ、ふたたび元の笑顔に戻つていく南雲くんの表情。ある意味単純だ。男子はナツキーも時も似たところがある、なんとなく彰子は比べて思つた。

「よおし、じゃあ、次だ次！」

勢い良く手首を掴み、急ぎ早に南雲くんはメリー「ゴーランドの方でひつぱつていつた。まだ就学前の子どもたちしか乗つていらない乗り物だ。彰子が乗つたら壊れないだらうか。心配だつた。

幸い乗り物は一切支障をきたさなかつた。南雲くんのサービス精神は全く衰えることを知らず、話も途切れず、スカートの裾を踏まないようしてくれたり、手を取つてくれたりいたせりつくせりだ

つた。たぶん教室で「うう」とやらかしたら、ひゅうひゅう攻撃を受けることは必至。この組の別れた彼女のおともだちに知られたらもつと大変だ。

「あきょくんって、本当にやさしいね」

ひととおりジョットロースターまで制覇した後、最後の締めに観覧車を選んだ。それほど大きくない。上り詰めると青瀬の街と海が見渡せる。南雲くん曰く、

「やはり、デートはこれがないと嘘だよな」

とのこと。さすが、慣れている。スカートを持ち上げながら歩くのがだんだんしんどくなってきたけれども、ナイトがいるとその辺も楽なものだと彰子は改めて思った。可愛くて美人さんの女子たちは、こうこうことに慣れているのだろう。

「中入ると、暑いね」

観覧車の戸が閉められ、一度勢いよく動いてゆっくり進みだす。彰子が汗を拭きながらつぶやくと、南雲くんはわざわざ隣りに腰を下ろした。別に真向かいでもいいのに。お尻が窮屈だらうに。

「うん、今日は走り回ったもんなあ。彰子さん、疲れなかつたかなあ」

「私は大丈夫よ。走るのはだめだけど、ちゃんとあきょくんがひつぱつてくれたからね」

じつと、スカートのフリル部分に手を触れ、いきなり引っ込めたりと、やたら落ち着かない様子だ。そろそろ会話もネタが尽きてきたのだろう。彰子もそろそろ自分のネタを出すことかもしれない、思いつつも出てくるのはクラスの噂話だけになりそうだ。

「私ね、やはり人は見かけによらないなあつてよつとわかつたよ。だつてあきょくんは、一〇にいる時、絶対におばあちゃんたちと話すよりも、女子たちとやいのやいのしている方のイメージが強かつたもん。もちろん、私とかは話をしているから、わかつてるけどね。でも」

今のお礼を言つておひら。決めた。

「今日、あきょくんのおばあちゃんたちが言つてたよ。あきょくんつて、婦人会の旅行とかの計画を立てる手伝いもしてたんだって?」「そんなこと、言つてたかなあ」

「うん。言つてた。他の人も言つてたよ。いつもすれ違うと挨拶してくれて、荷物とかも途中まで持つてくれるって」

聞いててこれはすごいと思つたのだ。バスの中で席を譲るとかはよくあるかもしれないが、なかなかできることではない。南雲くんは頭をかきながら、照れ笑いした。

「だつてさあ、重そうだろ。うちばあちゃんがいるから、そういうの慣れてるからさあ」

「そういうの、きつと一年の組のみんなは知らないんだよ。きつと。だから、あきょくんのことを軽いとかいろいろ言つのかもしれないけどね。でも、今日のことによおぐ、わかつたよ」

だんだん南雲くんがうつむいて、指を何度も絡めては離し、離してはからめを繰り返した。

「俺のこと、みんないかげんだつて言われるのは慣れてるけどさ。羽飛たちにもさんざん言われたけどさ。女つたらしだとか、好きでもない相手にちょっとかいだす馬鹿野郎とか、利用する奴だとか、いろいろ言われたけどさ」

きゅうっと頭をあげた。満開の笑顔だつた。

「彰子さんのお言葉で、そんなのどうでもよくなつた!」

あの、そういうことを言わせるつもりじゃなかつたんだけど。アナウンスで「ここから左手に青鴻市街、また反対側には港が見えます」と流れている。眺めながら彰子は頷きながら、気にかかつた言葉を引っ張り出していた。

羽飛くんと仲が悪いのは知つていたけれど。

けど羽飛くんだって、あきょくんのこんな真面目などいつも見たら少しは見直すんじゃないかなあ。

いろんな意味で、損してるよね。それなら、来週から少しで

もあきょくんのいいところ、人前で誉めてあげたらまた、クラスの男子たちも変わるんじゃないかなあ。特に羽飛くんは。

やうやく閉園時間だ。五時過ぎだ。音楽が「螢の光」。最後までワンピースのペチコートで一苦労だつたけれど、汗だくになりながらも無事過ぎた。「ありがとうございました」と頭を下げる受け付けのお姉さんに挨拶し、バス停に向かおうとした。

とたん、田の前を金銀まだらの風が走りぬけた。

急ブレーキをかけて止まり、すぐに田の前に戻ってきた。ナックキーだ。

まことに、やつぱり、ナックキー来ちゃつたか！

隣りの南雲くんは身を凍らせてくる。じつとふたり、田を合わせてはさつと逸らし、彰子の方に顔を向ける。ナックキーはにらみ、南雲くんは困惑のまなざしだ。そりやそつだらつ。この二人、顔を合わせるのが一回田なのだ。ナックキーも「なんかむかつく」と言つていたし、南雲くんも「あの自転車野郎」とか口走つていた。相性が合つとは思えない。羽飛くんと南雲くんのよつたな関係に近いかもしれない。

危険だ。早く離れた方がよさそうだ。じつちのためにも。

ナックキーのうちではあまり「デート」の予定について説明したつもりはなかったのだが。もちろん「青潟こども公園」で会つとまでは話した。でも、まさか、追つかけてくるとは思わなかつた。

頭には赤いバンダナ、学生服姿で彰子と南雲くんの前に立ちはだかつた。

「なんつて格好させられてるんだよ彰子。時々の母ちゃんみたいじやねえか」

「ナックキー、これつていつの母さんの趣味に決まつてるじゃない

バス停に向かう群れから、声が届く。彰子は聞くともなしに聞い

ていた。

聞きなれた言葉だつたし、あきらめてもいた。

やだあ、あの子似合わないふりふり着てるよね。  
なんかぶたつぽいよねえ。

隣りの男の子は可愛いのにねえ。

ナツキーと南雲くんがその声の方に身体を傾けていく。抗議してくれようとするのか、それとも、やっぱりそうなのかと納得してしまった。彰子はじつと待つた。ナツキーの出方を待つことにした。「お前か、彰子のことをさんざんもてあそんでる奴つてのはー。」「もてあそぶ、つて、失礼だな。名前を名乗れ」

息せき切つてもう一人、バス停から降りてくる奴がいた。やはり学生服姿。白いラインが入つていて。四角い体型と鼻の下を何度もこする姿でよくわかる。

「時也、あんたも、いつたいどうしたの」

口があんぐり開いたままふさがらない。彰子を見つけるや否や、何度も咳をしながら怒鳴った。笑つていない。怖い。時也の声だ。

「なら先生に言われて、迎えに来た。これから奈良岡を、連れて帰る」

「え？ 僕まだ連れて行くところにいっぴあるのに」

きょろきょろ、ナツキーと時也、彰子を見比べながら口籠もる南雲くん。

腕が引つ張られた。バックの柄が横にずれていて。氣をそらされて見ると、時也が墓石の顔して、バス停を指差している。しつかり、バックの底を掴んで離さない。

「時也、なんであんたもいるの。父さんが何言つたつていうの。今田のこと、そりや話したけど、でも」

いきなり時也は指を南雲くんに突きつけた。ナツキーの隣りに立ち、はつきりと、

「耳鼻科で俺に、聞いたのはお前だらつ」

「ええつと、あ、あんときはどつも」

すっかり南雲くんの態勢不利だ。頭に手をやつたり、目をふらふらさせたり、彰子の顔をうかがつたりとかなりのパニック状態だ。

「耳鼻科で俺について、時也、あのどつこつ」とつ。

とつとつ相手が目の前にいるつてことで、時也も胸を張つて答えた。

「俺が前の耳鼻科で待つてこる時、『奈良岡さんに付き合つてこいる人はいるのか』と聞いたのは、じつだ」

あの、それつて、本当にあきよくん?

じつと南雲くんを見返してみた。

嘘じやないとこつ證明に南雲くんはうつむいた。

「事情は俺が聞きます。おい、時也。お前は彰子をうつまで送れ。バスでだぞ。俺はこいつにまだ確認したいことがある」

ナツキーは自転車をけりなおし、きつと南雲くんをにらみつけた。これはちょっとまずい。割つて入りたい。

「ちょっと待つてよナツキー。あのね、今日、南雲くんとは友だちとして」

「こいつの顔がそう見えるかよ。彰子、こいつのまま食われてしまつたら、お前、将来医者になんてなれねえぞ。とにかく、男だつたら来い。言い忘れたが俺は、夏木宗だ。お前を意味なく殴るなんてことはしねえ。とにかく、ええつとなんだつたか、お前の名前」

「南雲、秋世だが、話とは」

横顔が、いきなりクラスの規律委員雰囲気に切り替わつている。

仮面を被つた。両方を見比べながら、彰子はもう一度訴えた。

「ナツキー、変なことを考えちゃだめだよ。あんたが私のことを心配してくれるのはすつごくうれしいよ。でも、今日は私が南雲くんと会つ」とを選んだんだから。ナツキーとはまた謹慎が終わつたら

「彰子、お前は黙つてろ! とにかく、南雲、お前にとことん話が

ある。来い」

再接近。顔を近づけ、腹を突き出し、ナックキーは思いつきり爪先立ちしていた。でないと、南雲くんに背が届かない。

「あきよくな、あの、『めんなさい』。ナックキーは決して悪い奴じゃないのよ。ただ、なにか勘違いして」

息を呑んだようだが南雲くんは彰子に、もつ一度にひとつ微笑んだ。

「彰子さんと一緒にいることは、絶対戦うことがあるって覚悟してた。だから、平気だよ。負けないもんな。今日のお言葉で百人力量だ！」

「よおし、いい根性だ」

一瞬だけナックキーは笑みを浮かべた。が、すぐに自転車をひっぱりだした。「彰子、これ以上謹慎くらうの『めんだもんな。時にも、なら先生にも、ちゃんと後で説明する。俺は』

言葉を切った後、じっと見つめ返した。今まで見たことのあるナックキーの瞳でないようだった。ナックキーのお父さんが写真で腕組みしている時のまなざしがつくりだった。

彰子は時也に無理やりひっぱられ、南雲くんは黙つてナックキーの自転車についてくる。

ナックキー、あきよくな。

とてつもなく自分が、悪いことをしてくる、そんな気がしてならなかつた。ただ南雲くんと友だちとして「『ティー』」しただけなのに。ナックキーにも時也にも正直に、話したつもりなのに。時也がそばで、じつと声の向こうを見据えている。気づかれていない。

あんな暑苦しい格好して、やあよねえ。

似合つ子でないとあのブランク、無理より無理。はつきり言つて、社会の迷惑よ。

ぎゅっと、バックの柄を握り締めて立ちはぐくす彰子に、時也はしつかり背中に寄り添つてくれた。きっと時也だつて悪口の対象になつてゐるだらう。そつと守るよつ、アリタマのカーブを切るたびにくつついてくれた。だんだん、自分の甲がゆるゆるしてきたようだつた。

理由がわからない。彰子はそつと手の甲で甲をこすつた。

「時也、いいよ、私から離れてた方がいいよ」

「いやだ」

十五分間、ぎゅっと、時也は彰子のそばから離れなかつた。

母は夜勤で父はかなり遅く帰つて来た。どうせ食事も終わつていいのだろうし、彰子の顔を見て無理やり笑顔をこじらえるのがやつとの様子。おとなしく部屋にこもることにした。

窓につるしたままの真っ赤なワンピースには百合の花が映えていた。百合は大好きな花だ。きれいだけでなく、花びらがきつちりしていく落ち着いているから。でも、花粉で部屋が汚くなりがちなのでなかなか飾れない。

見ているだけだつたら、可愛い服だと思うんだ。でも。

明日が日曜なのがまだ救いだつた。

ちゃんと南雲くんはうちに帰つているだろうか。おばあちゃんに今日のこと、どういう風に報告しているだろう。彰子のことを大変気に入つてくれたみたいだ。でも、ナツキーと話をしたことによつて、気持ちが変わつたなんてことないだろうか。友だちでいるのもういやだなんて言わないのでだろうか。

いや、ナツキーが彰子の悪口を言つわけがない。

ナツキーはきっと、彰子のことを心配して追いかけてくれたんだろう。一部の女子たちが彰子をかなり、不細工とばかにしていたという噂を真に受けて。みんなはきっと、彰子のことを軽く揶揄する程度だったのかもしれないけれど、ナツキーは親友だと思つてくれているから激怒したに違ひない。同じことは時せにも言える。時也は眞面目だから、言われたことをそのまんま信じて、親分のナツキーに報告してしまう。彰子のことを嫌つていながらなおさら、なんとかしなくちゃと一人で決めてしまう。そういう時也のやせしさを彰子は知つていて。ずっとバスの中でくついたまま、悪口を一緒に受けていたことを、びんびんと感じている。

でも、南雲くんとは関係ないよ。

みんな、いい人ばかりなの。

みんな笑顔で居てくれればいい。やつ思つてしたことなのに、すべてがいいことじゃなくなつてしまつ。

どうすればいいんだろう。

小学校時代の友だちに電話をして相談するのはためらわれた。南雲くんのことを「パール・シティー」のボーカル似一枚目だということしか知らない人たちにはわかつてもられないだろう。おばあちゃんのことを大切にして、一生懸命彰子を楽しませよつと飯を遣つてくれた人だと説明しても、きっと。

私、どうすればいいんだろう。

眠れない。月の光がちらちらする。父のことも心配だし、ナッキーの自宅謹慎期間も気になる。楽しかったはずなのに、たっぷり遊んで疲れているはずなのに、一睡もできなかつた。

日曜日。母が当直先から帰つてくるのは昼過ぎだらう。

父が食器を流し場に置いたまま出て行つたらしい。

休みでも部活の顧問としての仕事はたくさんかかえている。クラスのこと、ナッキー、時也、考えることがたくさんあるのだろう。家族明るいはずなのに、どうしてみな、こうも暗いのだろう。彰子はひとりでパンを食べた。一枚食べ終えた後、電話が鳴つた。

「彰子ちゃん、もつしもーし。古川でーす」

朝まだ七時半なのに。こずえちゃんからだつた。

「朝早くごめんね。ええつと、さつそくなんだけどさ、今日、美里と遊びに行つていい?」いきなりびっくりだが、彰子に断る理由はない。友だちが遊びにきてくれるのは大賛成だ。父の生徒たちがこなくなつたから淋しかつたし、それに話もしたいし。

「もちろんオッケーよ。じゃあ、部屋掃除して待つてるね。何時くらいい?」

「朝十時つて早すぎる?」

父も母も午前中はいないし、別にいてもまた盛り上がりつてケーキとか焼いてくれる程度だ。

「わあい、よかつたよかつた。じゃあ美里と待ち合わせていくね!」

短く切れた。いい子は女子にもたくさんいる。確認できたような気がして、彰子は少しだけ食欲が出た。あまりものクッキーを十枚おかずにつまみながらかじった。

呼び鈴が鳴つたのは九時半だった。早い。

「ごめんね彰子ちゃん。こずえ！だからあんたそんなに急ぐなつて言つたでしょ。人のうちで失礼だつて」

「なに神経細かいこと言つてるのよ、美里、もしかして奴の超神経質つぽいところが移つたんじゃないの？もしかしてこつそり、移るようなことしてるんじゃないの？」

「エッチ！もう、知らない！」

どうやら美里ちゃんがこずえちゃんにひつぱられるような格好で呼び出されたらしい。一人が遊びに来てくれるのは大歓迎だつた。彰子は首を振つて、すぐに一人を部屋に上げた。「いいよ。うちはちつちやい頃から人の出入りが激しうちだつたんだ。ほら、美里ちゃんは紅茶がいい？ ジュース？」

「ええつと、紅茶、お願ひしちゃおうかな？」

「こずえちゃんがまぜつかえす。膝上のオレンジストライプキュロットが可愛い。お尻が小さいから良くなつて」

「なによ。気取つちやつて。いつかだれかさんとデートすること夢見てるんでしょ。あいつだつたらまあ、ねえ。あ、私はジュースでいいよ」

「うるさい！もう！」

美里ちゃんはリボンが肩に結ばれているジャンバースカートに、ボーダーのオレンジTシャツを着込んでいた。何気なく袖のところが膨らんでいて、ほつそりした腕の美里ちゃんがちょっと大人っぽく見えた。

ふたりをベットの上に座らせ、サイドテーブルを用意し飲み物を置いた。もちろん手作りクッキーは欠かさない。あとで昼のご飯も

「じゅえんつもりだつた。チャーハンあたりでどうだねつ。ふたりはしばらくクッキーの味を絶賛しまくり、例のワンピースを指差しては互いに鏡であでがい、試着しまくつたり、大騒ぎしていた。美里ちゃん、じゅえちゃんを見ていると全く飽きない。少し心がなごんだ。

「ところで、彰子ちゃん、本題なんだけど」

美里ちゃんに「やめなよ」と言われつつも、「あんちやんがにやつとしながら彰子に向かった。

目的はすぐにぴんときた。

「昨日の、じと？」

「じょ知答。彰子ちゃん、結局こんな可愛い服あるなら美里のファッショントヒックいらなかつたねえ」

「違う違う、母上の許可がでなかつたの。私だつてこんな派手な服激しく首を振つて、美里ちゃんはまだ服の袖を撫でていた。

「つひん、すつじく可愛い。いいなあ私もほしこ」

「で、南雲の奴は、じう言つてたの？」

「じこまで話したら、いいのかな。

彰子は迷つていた。本当のことを話すのには何も迷いがない。

ただ南雲くんとナッキーとのじとまぢばらすのは、状況がわからない以上だめなような気がした。

「うん、最初はぎょっとしたみたいだけじ、でも、よくしてくれた

よ

「南雲はトート慣れ絶対してゐよね」

膝を叩きつつじゅえちゃんは大笑いした。隣りで、割り込むのを待つてゐるのは美里ちゃん。身をかがめて、小さな声で口をつぼめた。

「一緒に、コーヒーカップとか、ショットゴースターとか乗つたの

？」

「うん、一通り、案内してもらつたよ。私が乗つたら壊れるんじや

ないかなつてそちらの方が心配だつたけどね」

とりあえずはさしあたりのないことだけに絞つた。ふたり、まだデートっぽいことは未体験らしい。もつとも、男子たちと仲のいいふたりのことだ。友だちとしての「おでかけ」は経験しているだろう。

「いいなあ。私も、そういうのしてみたいなあ」

「だから、あんたがこなかけりやいいじやない!」

「そんなのあんたに言われたくないよ、もう」

またこずえちゃんのつっこみが始まつた。すでに美里ちゃんのひそかなる恋のお相手が立村くんであることを彰子は知つていて。違和感ありありでも、ここまで真つ赤になりながら話すところみると、本気だらう。

立村くんだったら、美里ちゃんに告白されて断るなんてこと、絶対にないなあ。舞い上がりちゃうと思つ。真面目な子だからなあさらね。

ただ、ふたりが評議委員関係以外でデートしているところを想像するのはかなり困難だ。それ以前に立村くんが普段着、いわゆるジーンズとかTシャツとかそういうものを見につけていることがまず、イメージに合わない。立村くんといえばやはり、青大附中の制服でブレザーとワイシャツだらう。学校の中でしか、生息しない人物だ。「こずえ、あんたの方こそ、なんで貴史の方がいいわけ? そっちの方が謎」

「だつて、面白いし、かつっこいし、性格あつたかいし、いいよね、彰子ちゃん」

気づいているのがどうかわからないが、彰子はうなづいた。どうせ女子だけなのだから、安心して話せる。

「好みはあると思うけど、羽飛くんは、確かに、かつっこいタイプだよ。美里ちゃんとは幼なじみなんだよね。みんながうらやましがるもの当然だと思うなあ」

「彰子ちゃんまでそんなこと言つわけ!」

まあまあと、手で押さえむじぐわをし、彰子はむつ一度繰り返した。

「でも、幼なじみだからこそ、気づかないところもあるんじやないかなあ。友だちとしてはいいけれど、それ以上はいいかなっていうじ」

迷つたけれど続けた。

「じじだけの話だけど、私は立村くんがどうして評議委員としてあそこまで、男子に評価されているのがよくわからないんだよね」  
大きく頷くじゅえちゃん。おそらく美里ちゃんは、彰子が気づいていることを知らないのだろう。それなら知らないふりするしかな。思つた通り、美里ちゃんは少しだけほおを赤らめてうつむいた。平気な顔をしようしようとして、うまくいかない。やはりそんなところが男子たちからは可愛いと思われているんだろう。彰子も女子ながら、いい子だなと思つ。「立村くんはすごくいい子だと思うよ。この前もね、具合が悪くなつて保健室に行つて寝てたら、立村くんが来てくれたね。私のことを心配してくれたらしいんだ。クラスの雰囲気がおかしいかもしれないけれどなんとかするから大丈夫だよ、って言つてくれたんだ。その時は、何この人言つてるんだろうと思つたけど。きっと、気を遣うのが得意なんだろうなあ。でも、教室戻つたらそれほどでもなかつたし、まあ私のお顔がこの有様だからみんな呆然とするのはあたりまえだし。あきよくんもかなり誤解を解くのに苦労したみたいだし。要するに友だち同士で仲良くしようつて、話だけだつたんだから。たいしたことじやないけど、気になつてしまつから、声かけてくれたんだつて私は思つんだ。ただね」

美里ちゃんがだんだん唇を尖らせてきた。

「どうしてそんなことまで考えるのかなあとも思つ。ほら、この前、遠足についてのホームルームでも、手つなぎ鬼しようつてもちかけたら『手を握るのがいやな人もいるんじゃないか』とか言つてたでしょ。それはないよ。だつてみんな、一年D組の男子も女子もいい

子ばかりだもんね。みんなをもつと信頼してもいいのになつて、  
私なんかは思つちゃうんだ」

どんどん美里ちゃんの目がきつく変わつていぐ。まづいかも。でも  
隣りでこすえちゃんが、

「そうね、もつと言つて言つて」

と促す。

「いひじう時に、もし羽飛くんだつたらどうするかな、と考える  
と、もつと楽しく盛り上がれるんじやないかなと思うの。もちろん  
あきよくんでもいいけれど、やはりな。みんなへ訴える力があつ  
て、男子も女子も関係なくまとめられるとしたら、やはり羽飛くん  
が一番だと思つんだ」

頷きまくるこすえちゃん。やはり自分の大好きな相手を讃めても  
らえるのは嬉しいことなんだろつ。彰子も頷きかえした。共感大。  
「確かに、貴史はお調子ものだから、そういうところあるし、わかる  
よ。けど」

そつと紅茶のカップを両手で抱え、すすり、美里ちゃんは目を伏  
せたままでいた。めずらしい。言い返すのも難しそうだつた。

「でも、あいつが評議やつたとこなんて想像できる? できないよ  
「そつかなあ? 美里ちゃんは仲が良すぎるから氣づかないだけな  
んじやないかなつて気がするんだ。私からすると、立村くんのよう  
に人の顔色ばかり伺つておどおどしているように見える、あくまで  
も私にはそう見えるだけなんだけ。もつとはつきりしゃきしゃき  
した人の方が向いてるんじやないかなあ。これは適材適所つてこ  
とよ。もし立村くんが保健委員だつたら、まあね、こちらも一年連  
続相棒やつている東堂くんよりは『らしい』かなつて気はするよ  
両手を握り締めて、まず美里ちゃんに頷き一回。二回彰子にする  
のはこすえちゃんだ。

「でしょでしょ、前から私が言つてる通りだよ。美里。羽飛の方が  
ずっと上だつて言つるのが女子たち一同の意見だつて。美里の方がよ  
くわかつているんじやないの?」

美里ちゃんは答えなかつた。

もしかして私、美里ちゃんをいじめちゃつたかな。

そつと心に焦りが昇つてくる。ポットからもう一杯、注ぎ足してあげた。ティーカップは母の好みの薔薇模様。ソーサーの真ん中にも一輪、ぐるぐるっと薺がまるまつた格好で描かれている。つぼみと一緒にだつた。

突然、美里ちゃんが深くうなだれ、ティーカップを膝に下ろした。「貴史はいい奴だよ。だから仲良しでいるんだよ。でも違うの。私はずえちゃんが顔を覗き込む、はつとした表情で彰子に向い、小さく首を振つた。まづい、泣きたが、△図だ。

「「めん、美里ちゃん私」

「いいの。彰子ちゃんは立村くんの悪口を言つたわけじゃないんだつてわかつてるもん。でも、私が立村くんを評議として認めるつていうのは、そういうとこじゃないの」

柄を持つ指が震えていた。完全に泣かせてしまつた。美里ちゃんはあまり泣かない子だと思つていたけれど、まさか、こんなことでは「めん、なんで私、美里ちゃんを傷つけちやつたんだらうー！」

彰子の方が混乱してきた。手元のクッキーを押しやつたり、こづえちゃんと二人で顔を見合わせたりしたけれど、美里ちゃんは全くうつむいたままつぶやくだけだつた。小さい声。つまり声。鼻をすり出す様子。ティッシュを近づけておいたら、すぐにむしりつて鼻の下を押された。はあつと呼吸ひとつ、その後咽がつまつたように数回、咳払いのようなことをした。涙をこじらせていろりしき。

「美里、彰子ちゃんが困つてるよ」

「泣いてなんかない。私、そんなことで泣かない。ただ、違うの」言葉とは裏腹に美里ちゃんは片手で口を何度もこすり、肩を振るわせた。

しようがないね、とばかりにこづえちゃんは小さくため息をして見せた。

「彰子ちゃん、あの日のこと覚えてる? ほら、保健室で立村くん

に会つて、何か言われた日のこと

忘れるわけがなかつた。天井でちらついた光の玉が今でも宙に浮かぶ。うんと頷き、彰子は美里ちゃんにぐっと近づいた。

「立村くんが、変なこと言つたつて、言つてたよね」  
わけのわからないことを、たぶん思いやりから口にしていたはずだ。

「本当に立村くんそう実行してくれたつて、聞いてないよね」

実行？

美里ちゃんはいきなり顔を上げて目元を完全にゆがませたまま、一気にしゃべり始めた。せきとめられていたものが、溢れていた。何度も目を拭き、口でしゃくりあげ、鼻水をすすりながら、それでも止めることはしなかつた。こずえちゃんが最初あきれたように聞いていたが、だんだん戸惑いに変わつていつた。彰子も、同じだつた。

初めて聞くことだらけだつた。

「彰子ちゃんがいない間、男子たちが南雲くんの告白について盛り上がつていたの。想像なんて私もしてなかつたし。たまたまC組の女子も理科準備室の前で聞きつけたらしくつて、あつという間に広まつてたの。みんな、意見はいろいろだつた。水口くんはショック受けて泣いちゃうし、貴史は彰子ちゃんを馬鹿にしているんだと思いつ込んで南雲くんにくつてかかつてたし。それに、やはりC組の人たちは南雲くんの元彼女と仲いいから、みんなかわいそうがつてたしね。すごい騒ぎだつたんだ」

知つてゐる。聞いたことだつた。目の前にまた、光の玉が揺れた  
ような気がした。

「立村くん実験の途中でいきなり貧血起こして倒れたの。私、立村くんと話すこと多いからわかるんだけど、すごく相手が何を考えているかを想像しなくていいとこまで想像して苦しくなっちゃうみたいなんだ。先回りして考えすぎるつていうのかな。南雲くんが

落ち込んでいいるのを見ていいて、いろいろ考えてしまつたらしきの。

掃除の前に戻つてきたでしょ。彰子ちゃんが帰つた後、男子たちが一派に分かれですゞい罵りあいし始めたの。貴史が南雲くんに……あいつ馬鹿よ、『気がない相手に、よろこばせようとしてちょっとかいだすのは男としてというか、人間として最低だ!』なんて言い出したの。貴史単細胞だから、彰子ちゃんと南雲くんがくつつくなんて想像できなかつたみたいなんだ

そりやそだらうなあ。羽飛くん面食いだもん。鈴蘭優だものね。

わかつていてることを再確認する。食つて掛かつてくれた、それがちょこつとだけ嬉しかつた。

「私、その時貴史と立村くん待つてたからいたんだけど、南雲くんがね。『そうだ、俺は奈良岡のことが本氣で好きだ!』って断言しちやつたのよ」

「『すえちゃんが叫ぶ。

「それ聞いてないよお、美里、それほんとにほんと? あの南雲が?』

きつと言い返す美里ちゃん。

「ほんとだよ! みんなそれで黙つちゃつて、きまずくなつちゃつてたら、立村くんが戻つてきたの。『――』まだ、これから先はお互い、個人の問題だ。羽飛も、他の奴も、このクラス内で南雲たちのことに口出しするのはやめろ』って、びしつと、そう、叱り付けた感じで」

叱りつける? あの立村くんが?

口籠もりつつも彰子はつぶやいた。

「あの、立村くんが?」

「いつもそだよ。何かクラスのことで問題が起きると、立村くんが全部男子たちに指示を出すんだよ。ほら、一年の時の宿泊研修だって、国枝くんが食中毒で病院に運ばれた時、面倒みていろいろ片付けたの、立村くんなんだよ。他にも一杯あるけど、たぶん女子は

みな気づいてないだけなんだ。女子は立村くんのことばかにしてるから、絶対返事してくれないってわかつてるんだろうなあ。私の指示つて形で出すようにって、良く頼まれるもの。立村くん、自分はぼーっとした昼行灯の顔してるけど、いつもクラスのこととか、みんなのこととか真剣に考えてるんだよ。嫌いなのは菱本先生くらいじゃない。彰子ちゃんの時だって、ちゃんと言つてくれたんでしょ。なんとかするからって。立村くんきっと、彰子ちゃんが苦しんでるんじやないかって、心配してくれたんだよ。なんとか、彰子ちゃんが一年D組の教室で居心地いいようにって、男子たちを押さえてくれたんだよ。南雲くんがデートのお誘いしても誰もからかわなかつたでしょ。みんな、黙つてみてくれたでしょ。あれ、立村くんがみな、仕切つたからなんだよ」

激しくすすり上げ、鼻をかみ、『み箱に捨てた。『めんね』と続けた。

「へえ、男子たちみな紳士じやんと思つてたんだけど、あの昼行灯がねえ。美里、さすが見てるねえ。ダーリンのこと」

「そんなんじやないつてば！ 男子つて三グループに分かれてるでしょ。貴史、南雲くん、水口くん、つて感じで。でも、私の知つてる限り、一度も大喧嘩になつたことないでしょ。女子はしょっちゅう仲間割れしてるけどね。あれも全部、水面下で立村くんが片付けてくれてるんだよ。貴史とも、南雲くんとも仲良しだから、誤解のないよううにってお互いのいいことを教えあつたりしてるんだよ。貴史は立村くんが南雲くんと仲いいの面白くないみたいだけど。そう、それにね」

もう一度、息を吸い込み、今度は『ずえちゃんの膝を叩いた。

「『ずえ、一年の時、立村くんが杉浦さんに告白したなんていうがせねた回つたことあつたでしょ』

「あつたよね。でも立村にそんな度胸あるわけないじやないつてことで、終りでしょ」

「あの時、立村くん、一度も言い訳しなかつたんだよ。嘘ばつかり

杉浦さんに言わせて、悔しかったと思うんだ。だから私も、女子に話したの。立村くんの噂は根も葉もないことだつて」

思い出した。

一年の終りに、杉浦加奈子ちゃんという女子に立村くんが告白しつついく追いまわしたという噂が立つたことがあった。C組経由だつたと思つ。加奈子ちゃんも特別に表立つたことは言わなかつたけれども、女子たちは立村くんを軽蔑のまなこで見たのは確かだつた。もつとも彰子は、「好きな子に告白して振られたことは恥ずかしくない。立村くん、辛いだろうなあ」くらいたつた。すぐに噂は収まつた。

「私、思つたの。どうして立村くん一度も言い訳しなかつたんだろう。菱本先生に呼び出されて怒られても何も言わなかつたつて。そしたら貴史が後で教えてくれたの。男子たち、みんな立村くんが一生懸命にクラスのこととかひとりひとりのこととかを面倒みてくれたこと知つてたから、あえてその噂をガセネタだつてことにしてあげようつて決めてたんだつて」

「じゃあ、嘘だつたんだ。あのことは」

「そうよ。立村くんがそんな、女子を追い掛け回すようなことする人じゃないつて、男子はみんな信じてくれてたの。もつと自分で、そんなことしてないよとか言えればいいのにつて私は思つ。でも、言つたら大変なことになるつてわかつてるみたいだから、がまんしてるんだろうな。そんなことないのに。みんな、立村くんのこと、認めてあげてるのに。でも気づいてないの。言つてるよ、評議委員会の時。『俺は計算が全然できない馬鹿だから、ふつうの人の十倍はやらないと、ふつうになれないんだ』つて。馬鹿じやないよ。立村くん、英語もドイツ語も、他の言葉もペラペラだし、この前の数学の授業だつて」

はつと思い出した。狩野先生がいきなりドイツ語で話し掛けた時のことだ。美里ちゃんは大きく頷き、もう一度目をこすつた。

「立村くんが言つてた。なんで狩野先生がいきなりドイツ語で質問

したのかつて。きっとあまりにも基本的な計算式がわからなくつて、他の人たちにばかにされるのを可哀想がつて、あえて誰もわからないうように質問できるようにしてくれたんだつて。そんなこと、想像つかないよ。狩野先生つてわけのわかんない人だつて私は思つけど、でも立村くんはそういう人の心が異常なほど感じ取れる人なの。私、全然想像つかないことを、気を遣つてくれる人なの。だから、人の悪口とかきかされたると倒れちゃつたりするし、熱出したりするし。でも、必死なんだよきっと。みんなと仲良くやつていきたいつて、必死にやつてるんだよ。一年の評議を選ぶ時、確かに女子から貴史の方がいいつて意見が出たけど、男子がみな立村くんを推したでしょ。貴史だつたら南雲くんグループの人とうまくいかないかもしけないけど、立村くんだつたらどちらのグループの人も味方につけられるし、一生懸命やつてくれるつて分かつてるから。だから。なの。立村くん、あんなにやらなくたつて男子も、私も、認めてるのに、わかつてくんなくて……」

とうとう顔を覆つた。しゃくりあげたのが止まらない。彰子は美里ちゃんの隣りに座り、そつと肩を抱いた。泣いてしまつた時にはじつしてもらひと自分は楽なのだ。きっと美里ちゃんもそうだらう。思わずいじめてしまつたことをあやまらなくちや、そう思つた。

「美里ちゃん、ごめん、ごめんね」

暖かい温もりが伝わつてきた。震える背中をさすつた。

「本当に美里ちゃんは、立村くんのことが好きなんだね」

「じずえちゃんと少しだけ関係ない話をした後、ふたりは、

「じゃあ、またあしたね」

と帰つていつた。もつと長居してもらつたつてよかつたのに。残念だけど、やはり親友同士で話したいこともあるのだらう。美里ちゃんはすっかり元気をなくしてしまい、涙をぬぐつた後もしょんぼりしていた。

あそこまで好きな人のこと、思えるなんてすごいよなあ。

あの、立村くんのことをそんなにまで。

台所に茶碗を一通り持つていき、洗物をした後、彰子はあらためて、学級文集を取り出し、ぱぱぱりぱりとめぐつてみた。羽飛くん、立村くん、美里ちゃん、南雲くん。それぞれの文章をそりそりと見てみた。当時行っていたクラスの班ノートをまとめて一冊にしたようなものだった。評議委員同士が同じ班で一年過ごしたはず。羽飛くんも一緒にだった。

美里ちゃんが言つ通り、いくつか思い当たることはある。

立村くんが人見知りしやすく無口なのは、小学校時代ひどいじめにあつてきたりしことに「う」とに影響があるらしいし、両親が離婚してお父さんと一緒に暮らしていること、やたらと文学書の感想が書かれていること、愛読書はフィツシジュラルドの「グレート・ギャツビー」ということ。一通り読み通せば立村くんがどうにうきキャラクターを持っているかがよくわかる。

また、美里ちゃんと羽飛くんがそういう立村くんのことを好きで、仲良くしてあげたことも、云わつてくる。どこがどうわけではないけれども、

俺はりつちゃんのことがすつじく好きだなつて思つ。

立村くんはすつじくクラスのことを考えているんだなつて思ひます。

ところどころに出でてくる思ひやうの言葉。彰子はそちらの方がすごこと思つていた。同情をひくような風に見えなくもない立村くんの文章にくらべ、ずっとふたりの方が大人だと思えた。

でも、美里ちゃんは違つたみたい。

美里ちゃんが泣きながら訴えた言葉の端々には、彰子の知らない立村くんの姿が見え隠れしていた。もちろん一年時の班ノートには書かれていない、陰で懸命に一年D組のよしなことを片付けようとする姿はどうやつたら見えてくるのだろう。彰子が感じじることのできなかつたことばかりだった。

もし、美里ちゃんのいう通りだとしたら。

確かに一年D組の穏やかな雰囲気が、理科準備室事件後も若干乱されたとはいえ保たれたのは事実だつた。彰子も少しだけ変だと思つたけれども、「クラスのみんな」がいい人だからそうなんだと思つたに過ぎなかつた。まさか立村くんが男子たちに「一切南雲くんと奈良岡さんに出しするな」と指示を出した……ましてや「叱り付ける」なんて想像もしてなかつた。

そうだ。教室を出るやいなや、三年生の女子や他のクラスの人たちから、

「どうして奈良岡さんが？」

「どうしてあんな子に南雲くんが？」

とささやかれても、全く気にならなかつたのはずつと一年D組の教室にこもつていれば何も起こらないと楽観していたからだつた。そりや最初のうちはクラスの女子だつて、

「何か計算してることがあるんだよ、南雲くんも」

とかいろいろ話しあげたけれども、すぐに納まつて何事もないかのように時は流れていつた。南雲くんが人前で堂々と「トークの予定表を渡してくれた時も、男子たちがいる中で彰子がお付き合いの返事をした時も、誰もからかわなかつた。それどころか、

「あいついい奴だよ」

とまで、一声かけてくれた。きつと南雲くんの人望が厚いのね、それしか思わなかつた。

まさか、立村くんの指揮とは思わなかつた。

羽飛くんが南雲くんに食つてかかり、南雲くんが堂々と彰子への想いを断言したこと。これも初耳だつた。

今の今までずっと、「あきよくんは自分のことを友だちの延長上として仲良くしたいだけだ」と思い込んでいた。絶対に恋愛の対象として見られていることなんてない、そう思つていた。羽飛くんが彰子を「もてる男がからかつただけなんだ」と思い込んだのも当然

だと認識していた。

でも、南雲くんはクラスの男子たちの前で、堂々と、  
「やうだ、俺は奈良岡のことが好きだ！」

と言い切つたといつ。

私みたいなおかちめんこのことを、そんな意味で好きだなんて、からかうつもりだったら絶対に言えないよ。

あわてて南雲くんの書いた班ノート部分をめくつた。

あまり興味がなかつたからじつくり田を通したことがなかつた。音楽のことや、毎日のこと、そんな感じだつと思つていた。

僕は将来、父のよつな会計士になつて、家族全員で暮らしたいと思つてゐる。今、事情があつて妹はつちにいなければ、いつかは家族で仲良くへらしていけたらいいなと思つてます。

みんなから僕のことを軽い軽いといわれますが、そんなことありません。僕はそれなりに、真面目なつもりです。

「うちのおばあちゃんは小さい頃から僕の面倒を見てくれました。最近は大きい声で話さないと気づいてくれないので、早く補聴器のいいのを買ってあげられるくらいお金を稼ぎたいです。だから、バイトは許可してほしいです。

もちろん班ノートに書いてあることが全て本当だとは限らない。けれど、南雲くんのうちがただ、「軽い」だけではないことも、読み取れた。妹さんが事情あつてべつの家に住んでいることも、たぶん何かの時に聞いたのかもしれない。だから、テーント中は話に出さなかつた。やたらと話の中で「俺軽いと思われているかもしれないけど」と出てきたのは、もともと気にしていたのだろう。時也が南雲くんに話しかけられたのが「山乃耳鼻科」だったのも、おばあちゃんのために毎回薬を取りに出かけていて、それでと考へるなら話は通る。

ちやんと、彰子の前に南雲くんについての情報は並べられていたはずだった。テスト前に消しゴムをほしがつたりして、それを大切に握り締めながら問題を解いていた段階で、南雲くんの本心が本物だと気づいていたら。

ナツキーや時也と一緒に学校で待ち合わせて出かけた時、南雲くんの様子がふつうじゃないと気づかなかつたのはどうしてだつたのだろう。きっと心の田を開拓してしまつたのだろう。もし好きな相手が、他の男子たちと馬鹿騒ぎしながら帰つていつたとしたら、面白くないのは当然だろう。

南雲くんが理科実験室で告白してくれた時も、彰子は真つ正面から答えられなかつた。好きだと言われたことがぴんとこなかつたのもあつたし、友だちでいたいとだけ思つていたからだつた。付き合つたら友だちでも居られなくなる、でも好きな相手は羽飛くんだとも意識していた。だから、答えられず保健室に避難してしまつた。彰子が逃げ出した間、クラスの中で南雲くんはどんなに苦しかつただろう。恥ずかしい思いをしたのだろう。立村くんが回りの「氣」に毒されて倒れたらくらいだから相当ひどい状態だつたのだろう。

私、何にも気づいてなかつた。

目の前が暗い。文字がだぶつて見えた。目が疲れたわけじゃない。光りを見つめすぎてぼーっとしたような感じだ。ナツキー、時也の姿が浮かんできた瞬間、もう彰子は耐え切れなくなつていた。

時也も、ナツキーもみんな私のことが大好きだつて言つてくれたよね。わかるよ。すごく嬉しいつて思つてた。なのに、正直なのがいいことだつて思つて平氣な顔して、私、あきよくんと「デート」するとか、「友だち」としていい子だとか、さんざん言つてたわけなんだ。

もし、ふたりが私のことを本当に「好き」だつたなら。

ナツキーの、大人びた瞳が思い起こされる。

時也の、ずっと背中に張り付いていた姿が見える。

「私、顔とか体型とかで悪口言われるのは、当然だと思つてる。でも嫌いじゃないからいいと思つてたよ。けど。

ひとり」と、「「ごめんなさい」とつぶやいていた。

彰子は文集を開いたまま、涙を流れるままにしていた。部屋の中のものがみなぼやけ、輪郭が崩れていったのを感じた。

「私、ちゃんと田の前にころがつてていること、何にも見てなかつたんだ。それでさんざん人を傷つけてきたんだ。こんな性格の悪い子を、あきよくんも、ナツキーも、時也も、周りのみんなも好きだつて言つてくれてたんだよね。違うよ、みんな、私が本当は何にも気づかないおばかだつてこと。ただのほのんとしてたこと。人を傷つけて平氣でいたつてこと。こんな奴、嫌いだよね。ごめんなさい。

かつて彰子のことを思つてくれていたであろう、そして気づいてあげられなかつた相手たち、全ての人に謝りたかった。そして。やつぱり、私は、つきあえない。ごめんなさい。

ナツキーにも、南雲くんにも、電話しなかつた。本当だつたら南雲くんに、デートのお礼を言いたかつたけれども、今の彰子だと何を口走るかわからなかつた。またナツキーにも、また親切なつもりで傷つてしまふかもしれない。どうしたらいいかがわからなくなつていた。

部屋が暗くなつてに灯をつけずにいたら、ノックが聞こえた。あわてて机のライトだけひつぱつつけた。赤いかさで覆われた柔らかい光りだけが、ゆらいでいた。

「彰子さん、今いいかい」

父は小さい頃から娘のことをさん付けで呼んでいた。顔に、涙の跡がついていたことに気づかれたのだろうか。少し口籠もりながら

も、田は優しかった。父に怒られたことはほとんどない。気が弱いけれども優しいお父さん。彰子にとつては大好きな人だつた。担任した子ども達にも、小さい頃は慕われていた記憶しかないのだけれども、どうしてこうなつてしまつたのだろう。

「そろそろ夕食、作んなくちゃね。今降りるから」

「昨日のスープの残りがあるだろう。暖めるだけでいいわ」

お父さんみたいな先生ばかりならいいの！」

どうしてみんな、お父さんのこと嫌うんだろ？

机から椅子をひっぱりだし、ぺたんと座つた。父はベットに腰掛けると、大きくあぐびをした。昨夜は遅かつた。何時くらいに帰つて来たのかわからなかつた。彰子も自分のことで精一杯だつたから、覚えていない。

「お父さん昨日、遅かつたね」

「お前の親衛隊長のところにいたよ」

ナツキーのうららしき。びくりとした。

「だつてナツキー、あの」

「朝からつむを飛び出していつたつて聞いたんだよ。お母さんはそれほど心配していなかつたようだし、明日香ちゃんのこともあつたからなあ。ただ、宗くんの方は」

彰子を笑顔で見つめた。

「彰子さんのことになると、本当に向きたくなると、お母さんが笑つていた」

取り分けて何事もなかつたようだつた。彰子は少しだけ気が楽になつた。もしやナツキーが南雲くんを相手に再び怪我をさせたんじやないかと恐ろしい想像までしていたのだ、安堵のため息くらい吐かせてほしい。

「じゃあ、何もなかつたのね。ナツキー、悪いことなにもしてないのね」

「してないわけじゃない。実際、お前も時也から聞いているだろう

からわかるだらうが、他の子を怪我させるくらい殴ったのは、やはりよくないことだよ。たとえ自分の大切な人を罵られたからといって、許してはいけないことだからな。宗くんが一週間の自宅謹慎処分を受けたのは仕方ないことだ」

あの、学ラン姿で腕を組んでいるお父さんのことを、馬鹿にされたからだらうか。ナックキーもお父さんのことが大好きなはずだ。悔しくてならなかつたんだらう。

「でも、ナックキーはちゃんと謝りに行つたでしょ。その子のところに」

「ああ、行つたよ。でも、頭を下げるすむものとすまないものがあるのも、また事実なんだ。宗くんはきちんと、自分を押さえてあやまつた。間違いを認めた。だが、簡単には終わらない問題がたくさんあるんだよ。彰子さん」

「簡単に終わらない問題、つてなに?」

だつて、ナックキーが帰つて來た時、すつきりした顔でもどつてきただけを覚えている。もし、あそこでじやけじやが起つたとしたら、もつと暴れていても変じやない。ナックキーは冷静に時也の訴えおよび彰子の相手について問いただし、純粹に燃え上がつていた。

父は肩を落としている。言い出しにくいのだらう。彰子には全く想像のつかない出来事がからんでいるらしかつた。言いかけたのならば、聞きたかった。聞かなくてはならない内容なのかもしけなかつた。

「お父さん、言つてよ。私もつ覚悟できてるから」

「今すぐじりとこつ問題ではないよ。まだお母さんにも話してないけれどな」

背中の影が大きく写る。父の細い指が何度も組み合わされる。

「ただ、これからいやなことがたくさん起つかもしれないよ」「だから具体的に言つてよ、お父さん」

とうとう父は口を切つた。

「P-T-Aとか、学校側や、いろいろなところから嫌がらせを受ける

かもしだいよ。彰子さん。それだけは覚悟してくれるかな

言葉が出なかつた。

嫌がらせつて、いつたい、何？

「私、わかんないよ。ナッキーと、学校側からの嫌がらせとか、謝りに行つても許されなかつたことつてなんなの？ お父さん、もつと分かりやすく教えてよ。お願ひ」

さつき涙を出し切つたと思つたら、また沸いてきた。嫌われるなんて、今まで一度も経験したことがないのに、どうしていきなり、この一週間でそんなことになるんだろう。彰子のことを敵視する「南雲くんの元彼女関係」とかそういう人はいるかもしだいけれど、奈良岡家を丸」と嫌う存在つていつたいなんなんだろう。わからなかつた。

「彰子さん、大丈夫だよ。お父さんはね、彰子さんやお母さんに手を出す人がいたら、学校を辞めてでもきちんと守るよ。その辺は安心していい。でも、言葉の矢だけは自分で防ぐしかないんだ。彰子さんはもしかしたら、他の人とか、今まで友だちだと思っていた人たちから、冷たい言葉をたくさんぶつけられるかもしだい」

「たとえば？」

「そうだな、と父はつぶやきつつ、

「右とか左とか、いろいろあるだろ？ そういう思想関係に被れているのではないかとか、無言の電話がかかってくるとか、そういう類の嫌がらせだよ」

「もしかして、ナッキーのお父さんと関係が」

「いいや、それはないよ。宗くんのご両親は思想的にそぐわないものがあるかもしだいが、おふたりとも立派な人だよ。それは彰子も良く知つてゐるだろ？」

紅白まんじゅうを持つてきてくれて、彰子の頭をなでなでしてくれたおじさんのことが思い出された。頷いた。

「宗くんにしてもそうだ。ちゃんと自分の非を認めて、堂々と頭を下げるはとつても勇氣のいることだ。だが、受け入れられない人

にはどうじても受け入れてもらえないものがあるのも、わかるだろ  
う?」

「それが、思想つてこと? ナッキーのお父さんの、『君が代』みたいなもの?」

どんなに時也が性格のやさしい真面目な子でも、鼻水が治らない限り不潔感を拭い去ることはできない。それと一緒にだ。帰りのバスで、一緒に悪口を言われていたにも関わらず、彰子から離れなかつた時也のことを思い出した。

「そうだな。これから宗くんも学校に戻るわけだが、きっと辛いことが待つていてると思う。彼はそんなに弱い奴ではないし、お母さんもその辺はなんとかなると笑っていたよ。宗くんについては、お父さんは心配してないよ。ただ」

奥歯をかみ締めるように、こくこくと頷き、もう一度彰子に真剣なまなざしを向けた父。「彰子さん、宗くんと友だちだということ」で、これから近所の人たちからいろいろ言われると思う。でも、お父さんは彰子さんが彼のいいところを忘れてしまって、冷たい子だとは思っていないよ。彰子さんは、お父さんにとって、もちろんお母さんにとって、血縁の娘なんだよ。花散里の君つて、知つていいだろ?」

「知らない、なに?」

本当に知らない。彰子は古典文学については疎い方だ。膝を軽く叩いてお父さんは笑つた。「そつか、彰子さんは理数系だったなあ」「なんかそういう風に私のこと、言つてるんでしょ」「時也から聞いたのか? それとも宗くんか」

言葉が和んだ。

『『源氏物語』の中に出でてくるお姫様の一人で、主人公光源氏が大切にしていた女性のことなんだよ。光源氏くらいは知つているだろう?』

「うん、女つたらしの代名詞ね」

「身もふたもないなあ。とにかく、光源氏はたくさんのお姫さままで

心根のやさしい、容貌はまあいまいちの花散里といつ女性を大切にしていたんだ。ひまな時にあるすじくらいは読んでおきなさい。光源氏も不遇な生活を送っていたけれども、たまに花散里のところに行くと、心が和んだそうだ。心の暖かい人だったそうだ。『源氏物語』には、いろいろな性格の女性が出てくるけれども、お父さんはその中で、この花散里の君が一番好きだし、こういつ人になつてほしい、いつも思つてゐるんだ。彰子さんにはね

「私、そんな性格よくないよ。

首を振る彰子に、父は額を軽く撫でてくれた。

「もし、宗くんの周りでいろいろなことがおこり、彰子さんの方にもどばつちりがきたとしても、どうか、それで友だちをやめるようなことだけは、してほしくない。お父さんの言いたいのは、それだけだよ。まあ、そんなこと言う必要なんてないかな」

さつき、美里ちゃんが泣きじやくりながら立村くんのことをかばつていた。あの時と同じ泣き方かもしけなかつた。彰子は止められなかつた。もう、声を出して涙を流しつづけるしかなかつた。父に泣き顔をさらしてもよかつた。顔を覆うこともできなかつた。ただ、父の前で、ひたすら声を上げてつぶやいていた。

「私、そんな性格いい子じやないよ。でも、ナッキーのことは大切にするよ。お父さん、お父さんも、政治とか思想とかそんなの関係なく、仲良しは仲良しでいるのが大切だつて、そう言いたいだけだよね。私、そうだよ。絶対にそうだよ。お父さん」

ティッシュを引き抜いて、彰子の手に渡すと、父は出て行つた。

「じゃあ、スープを温めておくから。ゆつくり、降りてきなさい」

食事後両親は、居間で真剣に話し合ひをしていた様子だ。盗み聞きはしなかつたけれども、何度か「夏木さんとこの「ナッキーがねえ」と相槌を打つ母の様子からして、たぶん、彰子と同じことを聞かされたのだろう。

もう夜の十時近くだつた。泣くだけ泣いた。食べるだけ食べた。

そつと部屋の中で彰子は、母から借りた「週刊メディカル・イン」を開き、女医さんのインタビュー記事などを読みふけっていた。写真映りのいい美人さんが多い。お医者さんになるためには、別にルックスは関係ないと思うけれども、やはり昨日の今日だけに辛いものがある。

真っ赤なワンピースをしまいこみ、彰子は父の言葉とナツキーの瞳、南雲くんの笑顔、時也の表情を思い出した。みんな仲良く笑顔でいられたらそれでいい。そう思つて彰子が選んできただことが、もしかしたら間違いだつたのかもしれない。

どうしたら、みんなが楽しくいられるんだろう？

父さんの言つとおり、あしたからいやがらせが始まることないよね、お父さんの考え方すぎだよね。

でも、思い当たる節がないわけではない。ナツキーが怪我をさせてしまつた女子のところに謝りに行つたはいいが、許してもらえないどころか彰子の父にまで失礼なことを言い返されたらしい。きっと、ナツキーをかばうよつな言葉を父は口にしたのだろう。それが仇となつて。

PTAとか学校側、も敵に回すようなことを言つてしまつたのだろうか。

もともと父は政治に無頓着な人だつた。ナツキーのお父さんとはうまく合つて家族ぐるみの付き合いをしていたけれども、特別に思想の右左というのはなかつたようだ。たとえ日常的に日の丸が掲げられ、たまに軍歌の音楽が部屋に流れていたとしても、その人とは関係ないことだと考えていたようだ。

でも、ナツキーと仲良くするつてことは、お父さんも同じ思想の持ち主だつて思われることになる。だから、なのかな。いやがらせが始まることないつていうのは。ナツキーも小さい頃から、一部の大人に「右翼の子ども」とか言われていたつて聞いたし。無言電話とか、日本刀持つた人とかがうろついて大変だつたつて聞くし。

辛いのはお父さんもそうだけど、ナックキーの「うちだよ。

ナックキーに今、私、何してあげられるんだろう。

してもらつてばかりだ。彰子を守ろうとしてくれるナックキーに、

何も恩返ししていないことに、今気づいた。

やっぱり、「友だちでいる」ことしか、ないよね。

でもそれだと、かえつて傷つけることになるのかな。

何度も無言電話がかかってきた。とうとう始まったのだろうか。

最初は機嫌よく出ていた母も、五回目には、

「もう、困ったわねえ。電話代もつたいたいのに、暇な人たちよねえ」と、留守電に切り替えてしまった。

「彰子も留守電でいれてくれた人に、こちらからかけなおすようにしなさいね。まあ、しょうがないけどね。困った人にはこちらも頭使うしかないしね」

真っ白いネグリジェ、当然どふりふり。聖歌隊の人みたいな格好。母は彰子につっこり笑いかけた。

「大丈夫よ、お父さんは悪いことなんもしてないんだからね。ナックキーのことは心配しなくても大丈夫だつて。あ、別の意味での心配は、彰子もしなくちゃいけないか。あの、かつこいい彼。ナックキーにもちゃんと説明してあげなさいよ」

母は南雲くんのことが気に入つたらしい。彰子は良く知っている。母が若い少年たちのアイドルグループを非常におきに召しているということを。彰子のクラス集合写真を見ては、「この子美少年よねえ」とつぶやいていることを。いやがらせとか無言電話がこれからたくさん襲つてくる前夜だというのに、おめでたい人だ。

心配するなつて、言つてくれてるのかな。お母さん。

「早く寝なさいよ」

母が出て行つた後、また電話が鳴つた。五回鳴つた後、留守電に切り替わつた。案内のメッセージが流れた後、録音される言葉を待

つた。無言のまま切れた。やはり始まった。

心配だったの戸口も確かめた。爆弾なんて置かれていることなんてないとは思うのだけど、念のために。

やはり、何か紙くずが押し込まれていた。郵便物は多いほうだとと思うが、夜十一時過ぎにこれだけつめこまるのは異常だった。一枚ずつ広げてみると、手書きで、

「危険思想の家庭を擁護しようとする最低教師よ、辞職しろ」  
わざわざすみからすみまで丁寧に縁取りしているチラシだった。  
なんで父がここまで悪口を振りまかれなくてはならないのだろう。  
よっぽどナッキーとのからみでこたごたしていたのだろう。見せる  
必要もない。彰子はごみ箱に捨てたのち、もう一通、きちんと折り  
たたまれた封筒を手にした。切手は貼つてない。封筒には小花模様  
が散らされたかわいらしい絵柄。母の趣味たるどふりふりブランド  
のもののはずである。しかし上に書かれた文字は四角張つていて、  
どうみても男手だ。しかも、下にはしみがついている。  
時也だ。

立つたまますぐに封を切つた。入っているのはおそろいの便箋で一枚だけだった。

明日の朝六時半、夏木とあの男が、決闘する。  
六時に迎えに行く。

用件だけだ。決闘、とはただごとではない。

電話ではなくあえて封筒で呼び出したのは、何かの理由があるのかもしれない。しかも、このどふりふり封筒を使つたというのにも、わけがあるのだろうか。

彰子は袖の下に隠して大急ぎ部屋に戻つた。もう一度二行を読んだ。

やはり土曜日、あの後、何があったんだ。南雲くんとナツキー、私のことでまた言い合になつたんだろうか。どうしよう。ナツキーはただでさえ苦しい立場に追い込まれてる。南雲くんは私たいな性格の悪い人間に、あれだけ一生懸命してくれたんだもの。みんな、私のことをいい子だと思い込んでるから、こんなにしてくれるんだ。本当は、誰とでも仲良くしたいだけの、いいかげんな人間なのに。人のことを思いやれない、最低の人間なのに。

時也が知らせてくれたのは、たぶんナツキーに気づかれないよう阻止しようということだろう。父にばれたらまた別の意味で大変なことになる。まだ自宅謹慎期間中だ。その間に何かやらかしたら、もつと重い罰を受けるはめになる。しかもきつかけが、担任の娘だとしたら。父の立場ももつと悪くなつてしまつ。教師の世界には、思想的ながらみもあつて「たごたがあると聞く。父は話さないけれども、同じ教師の娘やつている子が「組合が大変でうちの父さん、倒れそう」とぼやいているから。

あの穏やかな父が彰子に釘をさすぐらいなのだ。身の危険すら感じているに違いない。

これ以上、私のことでみんなに迷惑かけられないよ。

ナツキーも、時也も、それと、南雲くんも。

原因はすべて自分だ。自分の手ですべて片付けたい。もう一度と、みんなから好かれなくなつたとしても。

朝五時半に目を覚ました。母が起きだして食事の準備をしている。

「あれ、どうしたの彰子、あんた珍しいねえ」

「お母さんの方こそ、どうしたの」

スクランブルエッグとトーストを出しててくれた後、燃える「」み、燃えない「」みをより分けていた。

「なんかまた変な手紙とかがきててね、ほら外の鉢植えが盗まれちゃった。捨てておいたから平気だけど。まったくねえ」

朝のもやがまだ外に満ちている。風が冷たい。ふつと立ち上る冷気。

「学校の委員会?」

「ううん、ちょっと出かけると」「あるんだ」

「ははん、あの彼と、朝のデート?」

「ちょっと額をつつかれた。」

「違うつてば」

そんなこと言つたらまた、どふりふりの洋服を着るよ「」に言われてしまう。だから制服に着換えたのだ。まだまだブレザーを羽織つてもおかしくない外の風。彰子は時計を覗き込みながらまず、腹ごしらえをした。じくんと野菜ジュースを飲み干した。

玄関でばさばさと気配がした。行こうとした彰子を、母が止めた。

「あんたはここで待つてなさい。お母さんが見てくるから」

用心だらうか。時也のお迎えだと彰子にはわかつていたから何も言わなかつた。脳天気な声に変換されて、母が呼んでくれた。

「彰子ちゃん、時也くんよ。いつもありがとうね。しかし早いねえ。薬効いてる? もしあれだったら遠慮なく言つてね。あら、でもだいぶ鼻の調子よくなつたみたいねえ」

ここで薬の効果を確認するのが母の医師たるところだ。だ。

彰子の田からるとあまり芳しくないのだが。良くなつているのだろう。

時也も学生服姿だつた。何度もじつくり頷きながら、彰子に田配せをする。言いたいことは伝わつてゐる。指で答えた。

「でもどひしたの？ 朝早いねえ」

「ラジオ体操に」

思ひつきり吹き出したのは彰子と母、同時だつた。時也だけ真面目だつた。

「夏休みならともかくなんで今の時期に？」

母に聞かれると彰子もでまかせを言わなくてはならない。時也と田を合わせて、「どひする？ どひする」と合図をする。時也が続けた。

「鼻を直すために、朝早く起きて運動するよひといつて言われてるから。それで誘いにきた、んです」

一度言葉をどぎらせたのは嘘を言つたからではない。鼻が苦しくなつたのだろう。ティッシュで鼻をかんだ。即座に彰子と母が手を差し出し、燃える「こみ入れに捨てた。

「そりなんだあ。時也くん、偉いねえ。彰子、それはあんたもこれから行かなくちゃだめよ。で、どこでやつてるの？」

「念上寺の境内で、熟年クラブの人たちが毎日やつてゐるからそこで」

知らなかつた。ずいぶん遠くである。

「じゃあそこまで彰子をジョギングさせなくちゃね。あんたも少し運動して贅肉落とさなくちゃ。これからも時也くん、迎えに来てくれるの？」

時也は大きく頷いた。思わぬことになつてしまつた。明日以降、時也は眞面目に彰子を迎えて来るだろう。母のお墨付きでちゃんと、ラジオ体操に通わなくてはならなくなるだろう。運動は苦手だ。でもしかたない。自然な顔して家を抜け出し、ナックキーと南雲くの「決闘」現場に向かわなくてはならないのだから。

「じゃあ彰子ちゃん、ジャージで行つた方がいいんじゃないの」「つうん、まつすぐ学校に行くからいいよ。行つてきます」「これ以上嘘に嘘を重ねるのはまじめんだ。かばんと体育着が入つた手提げを持つて、彰子は急いだ。

時也と並んで歩き、小さな声でささやいた。

「決闘つて、時也、何があつたの？ ナックー、まさかまた殴つたりしたんじや？」

「それはない」

時也が断言した。

「ただ、奈良岡のことを決着つけたい、そういうてた」

「誰と？ 南雲くんと？」

「そうだ」

まさか刃物を持ち出すなんてことはないと思つけれど、でも、もし、ばれたら大変なことになる。

「時也、もうひとつ教えてください。土曜日に、うちの父さんが、私を迎えて行くようになつて言つてたのはどうこいつのこと？ 父さんも、私が南雲くんと会つ約束してたのは知つてるんだよ。洋服買つてくれるつて言つてたし」

「どふりふりでいいなら、俺が今度持つてくる」

「お願い、それだけはやめようよ！」

時也は大真面目だつた。時也のお母さんが着古した洋服をこつたり持ち出すに違ひない。彰子の趣味じゃないとわかつていても。歩きがてら、時也が話したのは以下の事情だつた。

ナックーがクラスの女子を殴りつけ、その母親に罵られて止められなくなつたのは知つている。自宅謹慎となり、非を認めないナックーは部屋にこもりっぱなしだつたのも父から聞いた。

そこで原因の発端だつた時也が、「自分から」夏木家に向かうことを言い出したといつ。父が連れて行つたのではなかつた。

「時也が、言ったの？」

「時也が、言ったの？」

「俺の鼻が悪いのが、夏木を怒らせた原因だつてわかつてゐるから  
気にしてるんだ。

「それに」

何度か立ち止まり目をこするど、時也が例のどふりふりブランドハンカチを取り出して手に押し付けてきた。新品のままだ。使うのになんとなくためらいがあつたけれども。握り締めることで感謝を伝えた。

「なら先生のことを悪口言つてたこと、前から知つてたし、奈良岡のことをばかにする奴がたくさんいるつて言つてたのを、伝えないと、夏木が怒る」

塾から電話をかけてくれたのはその時のことだろう。

小学校時代の友だちを集めて、留守電に応援メッセージを入れてくれた時のことを、彰子は忘れない。

奈良岡彰子危機一髪の話を扉越しに聞かされ、ナツキーはぶちつと切れた。奈良岡先生……彰子の父である……も絶句するほどに、ナツキーは彰子の立場の辛さおよび気づいていない親に対してもくし立てたといつ。時也もその内容は「長すぎて」ほとんど覚えていないと言つから、相当なものだったのだろう。

しばらくナツキーの言い分を聞いていた彰子の父は、

「わかつた。彰子さんに直接、お前の言いたいことを伝えてほしい。ただな、人に暴力をふるつてしまつたということは、どういう事情があつても言い訳はできないんだよ。宗くん、お前が先にすることは、傷つけてしまつた人のところに出かけて、あやまることだ。許してもらえるとは思うなよ。それが人間として最初にしなくてはならないことなんだよ。お前のお父さんは立派な人だけど、すべての人がそう思うわけではない。そう思うのも自由だ。だからその分、お前がお父さんを大事に思つていればいい」

「殴つたことだけは重罪だ」ということを伝えたらしい。

ナツキーもその辺りで納得したらしく「彰子を呼んで説教することを条件に、その女子のところへ頭を下げる決心した。彰

子の家に電話をよこし、ハイテンションなままで呼びつけたのは、この時だらう。

当然、時也は彰子を自宅まで迎えに行こうと、「自分から」申し出た。

昨日父から聞いたところによると、あやまつたナッキーに対しても相手の両親は一切聞く耳をもつてゐなか、むしろ屈辱的な言葉を浴びせたらしい。

「犯罪者の子ども、とか、寄ると怖いとか」

時也は正直に、おそらくナッキーからの口伝えをつぶやいた。

「失礼だね。反省している人にぶつける台詞じやないよ」

「それで、なら先生がかばつたらしい。なら先生が、夏木のことをあまりひどく言わないでくれと頼んだらしい」

それで。まさか、そういうことだ。

初めて納得した。

「でも、相手はさりに怒つて、追に出したらし。夏木、ぜんぜん、言い訳しないで手も出さないで、うつむき帰つたらし。」

「その後で、私に、説教したわけね」

ナッキーはすごい。強い。偉い。

ずっとなじやかにことを片付けたとあの時は思つていた。父も笑顔だつたし、ナッキーも真面目にことを諭じてくれていたし、想像なんてしてなかつた。

まさか、お父さんとナッキーに、そんな屈辱的なことが起つていたなんて。

「奈良岡、泣くな。はやくハンカチつかえ」  
「だめだよこれ。時也、これお母さんのもの、いつそり持つてきた  
んでしょ?」

泣き笑いしながら、彰子は丁寧にたたみ直して返した。

「きっと、ものすごく高い、プレミアムものだよ。時也、気持ちだ

け、いっぱいもられたから、もつ私泣かないからね  
石のかたいのを踏んづけてしまい、転びそうになる。

「土曜日、教室すごかつた。なら先生が来たとたん、女子たちが教室を出て行つた。その後、校長室になら先生が呼び出されて、ほとんどあの日、自習だつた」

つま先の小石がごろごろした。もう動けなかつた。時也はじつと彰子の横顔を見詰めながら続けて、淡々と事実をつなげていつた。  
「なら先生、女子たちの親につるし上げられてた。ずっと、授業終わつた後昼間ですつと、親たちに文句言われてた。だから終わつてから、俺が」

「時也、あんたから？」

口籠もるように、もつ一度鼻をかみ直し。今度は自分のポケットにたたんでしまつた。平べつくなつていて。

「このままだつたら奈良岡も帰り道、あの女子たちの親になにかされるかもしれないから、迎えに行くつて言つた。なら先生、頼む、つて言つてくれた」

あの、いつもおとなしくてなかなか言い出せなくて、みんなから「鼻垂れ小僧」だとか言われていた時也が、私のために自分から、迎えにきてくれたんだ。ナツキーの命令でもなんでもなかつたんだ。

ただ、南雲くんのことが気に入らないからじやなかつたんだ。私つて本当にうねぼれやの性格悪い、魔女みたいな奴。こんな子を、どうしてみんな好きになつてくれるんだろう。時也ごめんね。

時也もきっと、ナツキーと組になつて南雲くんに文句を言いたかつただけなのだと思い込んでいた。心のどこかで、「私つてもてるかも」といううねぼれがあつたのも否定できない。意識していくても、そんなことないと思つていても、でも彰子の態度にそういうところが見え隠れしていたからこそ、女子たちが不快に思つたのだろう。見えてなければ誰も誤解なんてしない。

時也は彰子が危険な目にあうでないかと心配して、自分の判断で、自分の意志で、十五分以上かけて彰子を迎えてくれた。簡単にできることじゃない。

「時也、『ごめんなさい』

「俺、したいこと、してるだけだ」

立ち戻くしたまま時也は待つてくれた。

連れて行かれた原っぱには誰も、ラジオ体操している奴なんていなかつた。音楽だけがかすかに裏のお寺から聞こえてきた。時也の言つたお寺さんは裏の方なのだろう。公園を作りかけの原っぱには、丸のまま切り倒された木が横たわつていた。ありあわせにこしらえたらしいベンチが幾つか並んでいた。真後ろの陰には大量の廃材が重ねられていた。だいたい、彰子の背丈ぶんよりはるかに高く積み重なつっていた。

時也は彰子を案内すると、その辺で拾つた板を持ってきて座るよう指差した。色が濃い。朝露で湿つていた。

「ここにいるの？」ナツキーたちが来るの？

「たぶん」

短く答えると、時也は黙るよつ口を覆つて合図した。

「ナツキーたちは、私がいること知つてるの？」

「絶対、知らない」

なら、絶対に口を利いてはいけない。彰子はおとなしく従つた。一分、一分、三分。長かつた。朝霧が木々の端から落ちて、小さな音を立てている。背中に落ちた。もう泣かないようにじよつ。決意した。

時也が振り返り、もう一度、両手で口を押さえるしぐさをした。自転車の音がかすかにする。一重に聞こえる。木の陰に隠れて彰子は耳を済ませた。きいっと、ブレーキが響く。あれはナツキーの金銀まだらの自転車だ。もう一台、聞き覚えのない響き。たぶん、南雲くんだ。

「待たせたな」

「「ひかり」や、どうも」

腰の低い返事は南雲くんだった。

彰子は時也に田で合図され、立ち上がった。木々の隙間に田をくつつけた。細く見えるのは、南雲くんとナッキーがふたり立つたままにらみ合っている姿だ。想像以上に近い。ふつうの話し合いに見える。

「事情は大体理解したんですが、夏木くん」

軽く、へらへらした風に見せている南雲くん。しかし、声が少し作りっぽい。

「俺も、一日考えた」

ナッキーはやはり学生服姿だった。が、バンダナも離さない。

あと一日謹慎期間があるはずなので、学校には行かないはずだ。

「だが、お互い、共通した目的は一緒だつことは理解した」

「御意」

含み笑いを交わすふたり。背中が寒くなる。時也の方を見ると、じつと真剣な顔をして、田をくつづけている。鼻水の音が聞こえないう、必死にティッシュで鼻を押さえているのが痛々しい。

「要するにだ。南雲、自分のやらかしたことへの責任をとりたい、そういうことなんだな」

「そういうことです」

南雲くんの表情を伺うと、そこには真剣な中にも勝ちを意識したような落ち着きすら感じられた。制服姿で、ネクタイもゆるめだ。しかし、髪がちよこいつとてかてかしているのはポマードか何か塗っているからか。南雲くんは、軽くうつむいて息を整えるよくなじぐさをした後、笑みを浮かべつつ続けた。

「俺が奈良岡さんにベタ惚れだつていうのは、まあこの前の話を聞いてもらつたらわかるでしょうな。俺はみなさまが思つほどに女た

らしでもないし、軽くもないつもりだが、世の中人が判断することだから、その辺の言い訳はしませんぜ。ただ、俺が軽い過去を清算しないでこうこうことをしたために、奈良岡さんに迷惑をかけることは確かなんですよ。夏木くん

「自覚してるじゃねえか」

「たぶんこのままだと、奈良岡さんは俺の軽い行動のためにさんざんひどい仕打ちされるでしょう。今だつて大変ですよ。俺が元の彼女にきちんと話をして、断つたつもりでいたのに、周りへの配慮が足りなかつたゆえに、奈良岡さんにはいろいろ辛い思いをさせている。そういう風に見せないのが、彼女のいいとこだし、俺が死ぬほど惚れぬいているところですが、夏木くん、君も嫌でしょう。好きな子が苦しんでるのを見るのは。だから、徹底してこれからは、指先で魔法をかけよつとするかのよつて、くるくると回して指差した。

「青大附中においては、奈良岡彰子さんを守り、そう決めたわけです」

隣りの時也は息を止めていた。口で呼吸したくなるのがわかる。彰子の口も開いたままだった。

あきょくん、そんな。

一言一句、南雲くんの言葉を頷きながら聞いていたナツキー。ポケットに手を突っ込みながら、ぐるぐると南雲くんのそばを一周した。見たことのない、計算高そうな瞳が見え隠れした。

「まあな、南雲、お前が彰子に惚れぬく気持ちは、よおくわかる。それ以前によく青大附中の野郎どもは、彰子に熱を上げなかつたんだ。そつちの方が俺には腑に落ちねえ」

ナツキー、それは違う。勘違いだよ。

「俺の知つている限りでも、たくさん彰子に惚れぬいていた奴がいるし、女つきでりながら彰子の親衛隊だと名乗る連中も倍はいる。お互ひの目的はひとつ、彰子を守るためだ」「御意。おおせの通りでござります」

「南雲、今の話で、青大附中においても彰子がかなり厳しい立場にあることはよくわかつた。責任とりたいといふ気持ちに嘘はない、とは信じてやあひ」

「ありがたいことで、」  
「あります」

「いやに腰が低い。

「だがな、南雲。土曜にも話したとおり、現在俺のやらかしたことが原因で、彰子、彰子の父ちゃん母ちゃんがとんでもないことに巻き込まれる可能性がないとも言えない」

ナツキー、まさか。

さつき時也から聞かされた話が蘇り、耳を覆つた。聞こえてしまひ。

「俺は生まれ持つて右翼の息子だ。田の丸だか君が代だか、そんなのはどうでもいいが、俺の父ちゃんのことを馬鹿にされるのだけは許せねえ。怪我を相手にさせたのはまずかつたと思うし、その辺は反省している。だがな、これは俺の問題であつて、彰子やなら先生たちにまで火の粉が掛かるのは許しちゃおけねえ!」

小也く、「そうだ」とつぶやく時也の声。

「学校の中でだつたら俺は、徹底してなら先生、彰子の悪口を言つ奴を肅正してやるんだが、青大附中ともなつたら手が届かねえ。わかつた。南雲。これから、契約を結ぼつ」

契約?

時也と顔を合わせて、もう一度田を近づける。驚いているのは南雲くんの方だ。口をあががさせて、小也く「契約?」とつぶやいている。ナツキーは落ち着いている。

「俺たちの田的はひとつだ。奈良岡彰子を、日夜守りたい、その一点だろ?」

「『もつとも、でも、

「だからだ。俺も本当だつたら青大附中に侵入して、彰子のことをブタブス扱いする女どもをしばいてやりたいところだが。仕方ない。俺はこの町で彰子のことを守るべく命を賭ける。だから南雲、お前

は青大附中の近辺において、彰子に手を出す奴をしばいたれ。いいな。同じ女に惚れた男の、約束だ。ただし

「ただし？」

注意深く言葉を継ぐ南雲くん。なにか、まずそうな感じらしい。「決して、お前に彰子を渡したわけじゃねえからな。彰子がお前を選んだという確証はまだないわけなんだからな。あいつは南雲、お前のことをまだ『友だち』としか思つてないみたいだし、もし付き合つなんてことになつたら、なら先生本当に怒るだらうなあ。俺、なら先生には一目置かれてるから、もしなにかすげなことやらかそうとしたら、すぐに報告するからな」

「あの、夏木くん、ちょっとまつた」

「待たねえよ。今は緊急事態なんだ。俺だつて、お前みたいな『パール・シティー』もどきの優男に彰子を任せたくねえよ。きっと、色氣のある女が出てきたらふらふらとそつちになびこちまつんだろつな。けつ、どこまで本気だか、じっくり見せてもらひじやねえか」

時也が顔を木から離し、するりと前にまわつてナッキーの背中にたつた。驚いているのは南雲くんだ。まさかこいつまで来るなんて言いたげだ。ナッキーも振り返るや、「時也、なぜこんなとこ来てるんだ!」

「俺もその契約結びたい」  
ぼそつとつぶやく時也。

「今の話、お前聞いてたのかよ!」

「俺は、親の方を受け持つ」

南雲くんがそつと顔を覗き込んで、

「親?」

「つぶやく。

「もう奈良岡のつぶ、鉢植え盗まれたり、いやがらせのチラシ入れられてる」

「どうしてそんなこと知つてる?」

「さつき奈良園のうちの前に、クラスの女子たちの親がチラシ書いていた。悪口ばかりだ。そういうことそれでいるかどうかの情報は、うちの親つかって聞き出す」

彰子はもう動けなかつた。

ナッキー、時也、南雲くん、私、そんな守る価値のある子じやないよ。

見ると辛くなる。顔を離してひざを抱えた。かばんに顔を押し付け、声を押し付けた。

どのくらい時間が経つたのだろうか。水を弾くかばんの上に、小さな涙の染みがついていた。

顔を上げると、いつのまにかナッキー、時也、そして南雲くんがしゃがみこんでいた。

「おい、彰子、泣くなよ」

ナッキーがほおの触れそうな側に一緒にいた。顔を上げた。顔が百倍一百倍、不細工に見えてるだろう。いつも笑顔でいたかったのに。声がつまってしまう。時也がもう一度、花柄のハンカチをかばんに載せてくれた。

「今のは全部聞いてたのかよ」

「うん、盗み聞きなんて、ごめんね」

「どっちにせよ、俺も話すつもりだった。なら先生にも」

南雲くんだけが立ち上がり、じっと見下ろしていた。何も言わなかつた。

「俺も、父ちゃんのこと、こんなひでえことになるなんて思つてなかつたんだ。彰子、ごめんな。なら先生にも、おばさんにも、あやまらないとつて思つてる。けど、俺ができる」とつたら、このくらいだ

すうつと、南雲くんに視線を向け、ナッキーは力をこめてつぶやいた。

「青大附中に用心棒をつけてやることくらいしか、思いつかなかつた。

たんだ。彰子

「私、そんなことをしてもらえるような性格いい子じゃないよ。ナッキー」

「じえきれず涙ぐみ、彰子は三人の顔を見回した。みな、穏やかに、心配そうに彰子のそばにいる。

「私、みんなと仲良くしたかったなんて言つて、結局、いいとこばっかり持つていい」としてただけなんだもん、私、一股かけようとしてたつてことだよね。汚いよね。失礼すぎるよね」

「そうしてほしいうて、俺が思つてるんだ」

後ろで手を挙げているのが、ささやかな存在感を主張する時也。

「俺は、彰子がいつもげらげら笑つていれば、それでいいんだ。とにかく、青大附中で何かいやがらせされちまつたら、こいつをとことんこき使え。別の女に走るようなことになつたら俺に連絡しろ。もちろん、締め上げる。俺の田が届くところは俺がやる。母ちゃん関係は時也が担当する」

ナッキーは笑みを浮かべて彰子を一秒射た後、時也に振り返つた。「時也、さつきなら先生のうちにいやがらせのチラシ撒いた奴がいたつて言つてたよな」

「たぶんそろそろ入つているころだ」

「謹慎が終わつてねえから動けねえけれど、なら先生にすぐ報告してくれ。チラシの場合は大抵、誰が作るか見破ることができるので、うちの父ちゃん言つてた。捨ててねえかどうか聞いてくれ」

「わかった、すぐうちに帰る」

「俺は、ちょっと彰子のうちの周り見てくる。なあに、花泥棒かよ。簡単だぜ、俺が捕まえてやる」

「かばんを叩いて、ナッキーは時也に耳打ちをした。  
「じゃあ、帰つたらまた報告するからな。彰子、負けるなよ。それと」

南雲くんに、もう一度指を指した。一緒に時也も真似をした。

「いいな、契約は成立したぞ。破つたら、ただじゃ置かねえからな

！」

時也の頭をぶんなり、ナッキーは去つた。

向こう側からはゲートボールの稽古をするらしい、六十代以上の男女が準備をしていた。でも彰子たちには気づいていないらしい。ちょうど陰だからだろう。ナッキーたちを見送りながら、目にたまつている田やにをティッシュでふいた。泣き過ぎだった。

南雲くんはしばらく身動きしないでナッキーたちを眺めていた。横顔は、クラスの女子たちが「きやーかっこいい」と騒ぐ、まさに「パール・シティー」そのものの表情だった。冷たくも見え、きざつぽくも見えた。ずっとナッキーがいる間は仮面を被つていたようだつた。ポーズを崩して、ふつと彰子を見下ろし、見慣れたすかうとした笑顔に切り替えた。

「あきょくん」

「ああ、俺もほっとした」

ナッキーがいた反対側、左側にそつとしゃがみこんだ。

「あいつこええなあ。彰子さん、やつぱり、俺が思つてたとおりもてもてじやん」

「そんな、私

「もつと早く、言えばよかつたなあ」

彰子の側にべつたりくついた。お尻がぶつかり合つ。

「用心棒でよければ、しばらく使ってもらえませんか、彰子さん」

「そんな、あきょくんに私、失礼なことばかりしてると。ナッキーは一股でいいとか言つてたけど、そんな私

「一股なんかじゃないって」

言われた言葉が耳に残り、まだすとんと頭の貯蔵庫に納まつてい

ない。

「私、最初、あきょくんが私に、付き合つてつて言つてくれた時、クラスの子が思つてる通り何か裏があると思ってたもん。おばあち

やんの病氣で病院紹介してほしいんだなつて思つて、お母さんから循環器系の病院教えてもらつたもの。それに、私、人を見る目なんてないもん」

昨日、美里ちゃんがつぶやいていた言葉を思い起こしながら、「理科準備室のこと、あつた後、あきよくんが羽飛くんとけんかしてたつて聞いたよ。きっとクラスでは嫌な思いするんだろうなあって思つてたら、みな、D組では暖かく迎えてくれたし、そういうもんだなつて思つてたんだ。でも、それつて、立村くんが全部そぐるようになつてくれたんだつてね。知らなかつたよ。私、立村くんつて何考えるかわかんない人だと思つてたし、なんであきよくんと仲がいいんだろうつて不思議でならなかつたの。保健室で、私に『南雲は本氣だよ、クラスのことはなんとかするから』って言つてくれたのに、全然この人、何考えるんだか、つて不気味に思つたの。人のこと外見でしか見てなかつたんだつて、やつとわかつたの。あきよくんにだつて同じこと思つてたよ。本当はおばあちゃん思いの優しい子なんだつて、土曜日、やつとわかつたの。みんな、私、見ていることに気づかないで、勝手に決め付けてばかりいた、最低な人間だつて、分かつたの」

言葉がとりとめなく続いた。

戸惑つた風に、となりの南雲くんは首をかしげていた。

「立村が、やはり、そうか」

ひとりじとつぶやき、

「ありがたいよなあ。やっぱりいい友だち、持つもんだ  
肩に手が廻つた。身を堅くする。もちろん何もしなかつた。

「五分だけ、じつしていい? それで、俺への罪滅ぼしはおしま

い  
ぎゅつと、一の腕のところに顔をつけて、抱き寄せようつにしてくれた。

「学校なんだけど、これから俺の自転車に一人乗りしない?」

「だめだよ。規律委員がそんなことしたら。それ以前に自転車が壊れるよ」

「大丈夫だよ。俺、そんなにちゃちなもの、持つてないもん。途中で降ろして、あとは歩けばいいもん。一緒に歩いて、教室に入ろうよ。もし、立村のことが気になるんだつたら、あとで俺がうまく言つとく。なあに、最大のライバルからお墨付きをいただいたんだ。俺は負けないよ」

身体を抱き寄せてどこが楽しいのか彰子にはわからなかつた。でも、五分間南雲くんは大満足だつたらしい。身体を離した後、名残惜しそうに立ち上がつた。彰子に片手を差し伸べた。

「では、参りましょうか、花散里の君」

本当の、「花散里の君」に近づけますよ！」  
ナッキー、時也、南雲くんの心に届くよう。

彰子は一息ついて南雲くんの瞳を見つめ返した。朝の光が滴り落ちる手のひらに、自分の手を重ねた。心こめて、握り返した。

終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6863e/>

---

花散里の手帳～青潟大学附属シリーズ中学編

2010年10月8日14時29分発行